

神戸市西区

神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書V

柾木遺跡

一般国道2号(神戸西バイパス)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

神戸市西区

神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書V

柾木遺跡

一般国道2号(神戸西バイパス)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



調査区遠景(1) (北から 平成11年度撮影)



調査区遠景(2) (西から 平成13年度撮影)



平成11年度調査区（東から）



平成13年度調査区（西から）



弥生時代の遺構 SX03



弥生時代の遺構 SD94



中国産磁器

例　　言

1. 本書は、神戸市西区緑谷町菅野に所在する栎木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一般国道2号(神戸西バイパス)建設事業に関するもので、国土交通省(旧建設省)近畿地方整備局阪神国道工事事務所の委託を受けて、平成11・13年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
3. 出土品整理作業は、平成19・20年度に兵庫県立考古博物館において実施した。
4. 遺物写真撮影は、緑谷口フォトに委託して実施した。
5. 本書の執筆は山上雅弘、長瀬誠司が担当し、編集は高瀬敬子の補助をえて長瀬が行なった。
6. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県立考古博物館で保管している。
7. 現地調査および整理作業の際には、地元の方々をはじめ、関係各機関のご協力をいただいた。感謝の意を表す。

凡　　例

1. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準(T.P.)を基とする。方位は座標北を指し、平面図に示した座標値は、平均直角座標V系原点からの距離である(単位:km)。
2. 遺構は種類ごとに以下の略号を用い、遺構の種類ごとにそれぞれ01~つけている。
S B : 捩立柱建物　　S D : 溝　　S K : 土坑　　S X : 墓　　S P : 柱穴
3. 遺物には通し番号を付けている。ただし石製品はSとして土器と区別している。遺物の番号は、本文・図版とともに統一している。
4. 土器の断面は土師器・弥生土器を白抜き、須恵器を黒塗り、陶磁器を網かけとした。
5. 土器の色調や土層などの表記については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1999年版を使用した。
6. 本書で使用した地図は以下のとおりである。
第2図 1/2,500神戸市都市計画図　　「菅野」、「如意寺」
第6図 国土地理院1/25,000地形図　　「加古川」、「高砂」、「東二見」　1996年
　　　　　　　　　　　　　　　「三木」　1997年

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 溝査に至る経緯	(長瀬誠司) 1
第2節 梁木遺跡	(長瀬) 1
第3節 発掘調査の経緯	(長瀬) 2
1. 確認調査の経過	
2. 本発掘調査の経過と体制	
第4節 遺物整理作業の経過と体制	(長瀬) 4

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	(長瀬) 6
第2節 歴史的環境	(長瀬) 6

第3章 調査の結果

第1節 地形と基本的な層序	(長瀬) 9
第2節 遺構	(長瀬) 9
1. 概要	
2. 中世以降の遺構	
3. 弥生時代の遺構	
第3節 山土遺物	(山上雅弘) 29
1. はじめに	
2. 中世以降の遺物	
3. 弥生時代の遺物	

第4章 遺跡の検討

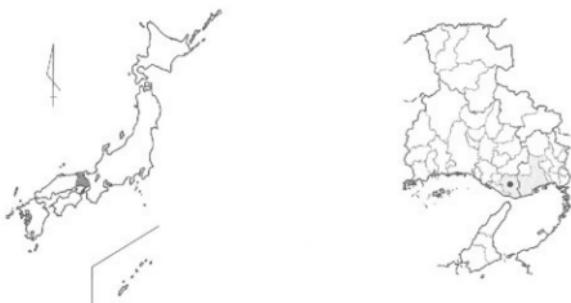
第1節 出土遺物	(山上) 35
1. 土器概要	
2. 土器組成	
第2節 検出遺構	(長瀬) 37
1. 弥生時代の遺構	
2. 中世の遺構	
3. 梁木遺跡の地割	
4. 梁木遺跡と如意寺	

挿図目次

第1図 遺跡の位置	ii
第2図 調査区の位置	1
第3図 楠木遺跡の調査	2
第4図 確認査位置図	3
第5図 整理作業風景	5
第6図 周辺の遺跡	8
第7図 調査区の地形	10
第8図 弥生時代の遺構	38
第9図 中世の遺構	39
第10図 楠木遺跡の地割	40
第11図 如意寺と調査区周辺	41
第12図 如意寺	42

表 目 次

第1表 土器観察表	43
第2表 新旧遺構名対照表	47



第1図 遺跡の位置

図版目次

- 図版1 遺構 全体図
図版2 遺構 屋敷地1 (1)
図版3 遺構 屋敷地1 (2)
図版4 遺構 屋敷地1 (3)
図版5 遺構 屋敷地1 (4)
図版6 遺構 屋敷地2
図版7 遺構 屋敷地3 (1)
図版8 遺構 屋敷地3 (2)
図版9 遺構 屋敷地3 (3)
図版10 遺構 屋敷地4
図版11 遺構 屋敷地5 (1)
図版12 遺構 屋敷地5 (2)
図版13 遺構 屋敷地5 (3)
図版14 遺構 屋敷地5 (4)
図版15 遺構 土坑群 (1)
図版16 遺構 土坑群 (2)
図版17 遺構 その他の遺構 (1)
図版18 遺構 その他の遺構 (2)
図版19 遺構 その他の遺構 (3)
図版20 遺構 溝 (1)
図版21 遺構 溝 (2)
図版22 遺構 溝 (3)
図版23 遺構 弥生時代の遺構 (1)
図版24 遺構 弥生時代の遺構 (2)
図版25 遺物 出土遺物 1 土器1
図版26 遺物 出土遺物 2 土器2
図版27 遺物 出土遺物 3 土器3
図版28 遺物 出土遺物 4 土器4
図版29 遺物 出土遺物 5 土器5、石製品
図版30 遺物 出土遺物 6 土器6
図版31 遺物 出土遺物 7 弥生土器1

写真図版目次

- 写真図版1 遺跡 調査区付近航空写真
写真図版2 遺跡 明石川付近より櫛谷川流域を見る／遺跡の遠景
写真図版3 遺跡 調査区遠景(1)／調査区遠景(2)
写真図版4 遺跡 平成11年度調査区全景(1)／平成11年度調査区全景(2)
写真図版5 遺跡 平成13年度調査区 (I) 全景(1)／平成13年度調査区 (I) 全景(2)
写真図版6 遺跡 平成13年度調査区 (II) 全景(1)／平成13年度調査区 (II) 全景(2)
写真図版7 遺構 屋敷地1・2(1)／屋敷地1・2(2)
写真図版8 遺構 屋敷地1／SB01／SB01P
21柱根検出状況
写真図版9 遺構 SK01／SK01炭化物検出状況／SE01
写真図版10 遺構 SX01／SX01断面／SX01
土器出土状況／SK04断面
写真図版11 遺構 SK05断面／SD01(b-b')
断面／SD01(c-c')断面
写真図版12 遺構 SD01土器出土状況／屋敷地2 (1)／屋敷地2 (2)
写真図版13 遺構 屋敷地3 (1)／屋敷地3 (2)／屋敷地3 (3)
写真図版14 遺構 SB03／SB03P22柱根検出状況／SB03P31柱根検出状況
／SB03P12柱根検出状況／SB03P36柱根検出状況
写真図版15 遺構 SB03P8礎板検出状況／SB03P28礎板検出状況／SB03P29礎板検出状況／SB03P37礎板検出状況／SB03P36土器出土状況／SX02
写真図版16 遺構 SK10検出状況／SK10東西断面／SK10完掘状況
写真図版17 遺構 SK11断面／SK11土器出土状況／SD37断面／SD42・38断面／SD42土器出土状況

- 写真図版18 遺構 屋敷地4／S D63断面／S B
10、S K20
- 写真図版19 遺構 S K17断面／S K18断面／S
K19断面／S K20
- 写真図版20 遺構 S K20断面／S K20木材出土
状況(1)／S K20木材出土状況
(2)／S K20木材出土状況
(3)
- 写真図版21 遺構 S K15断面／S K29・30断面
／S E05断面
- 写真図版22 遺構 屋敷地5(1)／屋敷地5(2)／
屋敷地5(3)
- 写真図版23 遺構 S B05・06／S B07／S B09
- 写真図版24 遺構 S B05P 8礎板検出状況／S
E02・03検出状況／S E02・
03
- 写真図版25 遺構 S E02検出状況／S E02曲物
内断面／S E02
- 写真図版26 遺構 S E02掘方断面／S E02曲物
片出土状況／S E02+器出土
状況／S E04断面
- 写真図版27 遺構 S E03検出状況／S E03断面
／S E03
- 写真図版28 遺構 S E03井戸側板／井戸側板北
東面／井戸側板南東面／井戸
側板南西面／井戸側板北西面
／S E03根太検出状況
- 写真図版29 遺構 S D67断面／S D68・69断面
／S D71断面／S D70断面／
S D73断面／S D74断面
- 写真図版30 遺構 土坑群／S K21断面／S K22
断面
- 写真図版31 遺構 S K23断面／S K24断面／S
K25断面
- 写真図版32 遺構 S K25木製品出土状況／S K
27東西断面／S K28断面
- 写真図版33 遺構 S D01①断面／S D01③断面
／S D17断面／S D24土器出
土状況／S D27断面
- 写真図版34 遺構 S D28・35周辺／S D28①断
面／S D28②断面／S D28③
断面／S D34断面
- 写真図版35 遺構 S D56①断面／S D57①断面
／S D57②断面／S D59断面
- 写真図版36 遺構 S D67断面／S D78周辺(1)
／S D78周辺(2)
- 写真図版37 遺構 S D78①断面／S D78②断面
／S D78③断面／S D84・85
断面
- 写真図版38 遺構 S D65①断面／S D87①断面
／S D87②断面／S D87③断
面
- 写真図版39 遺構 S D90断面／S D92断面／S
D93断面／調査風景
- 写真図版40 遺構 S X03／S D94／S D94土器
出土状況
- 写真図版41 出土遺物 中世土器 1
- 写真図版42 出土遺物 中世土器 2
- 写真図版43 出土遺物 中世土器 3
- 写真図版44 出土遺物 中世土器 4
- 写真図版45 出土遺物 中世土器 5
- 写真図版46 出土遺物 中世土器 6
- 写真図版47 出土遺物 中世土器 7
- 写真図版48 出土遺物 中世土器 8
- 写真図版49 出土遺物 中世土器 9
- 写真図版50 出土遺物 弥生土器

卷頭写真図版目次

- 卷頭写真図版 1 調査区遠景(1)／調査区遠景(2)
- 卷頭写真図版 2 平成11年度調査区／平成13年度
調査区
- 卷頭写真図版 3 弥生時代の遺構 S X03／弥生
時代の遺構 S D94
- 卷頭写真図版 4 中国産磁器

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査の起因となった神戸西バイパスは、明石海峡大橋から西方面へのアクセス道路として事業が進められている。神戸西バイパスに伴う埋蔵文化財の対応は、平成4年3月に事業地内の分布調査を実施したことに始まる。また本発掘調査としては、伊川谷町において長板遺跡、上脇遺跡、表山遺跡、池ノ内群集墳について行い、すでに阪神高速北神戸線と交叉する永井谷ジャンクション（J.C.T）までは平成10年4月に開通し、国道2号の混雑緩和に寄与している。

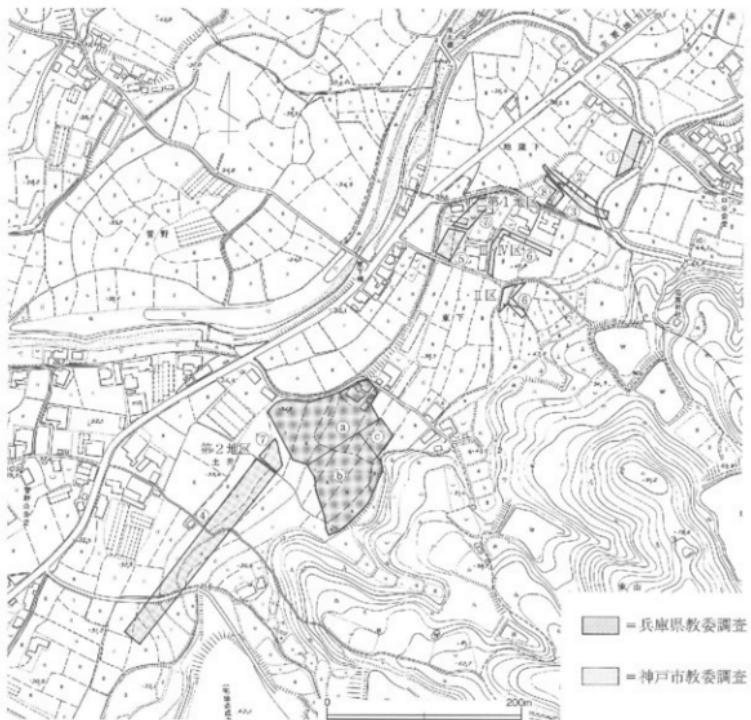
計画路線のうち、永井谷J.C.Tから国道175号と交する神戸市西区平野町までの区間について工事が実施されることになった。この区間にあたる西区櫛谷町域については、平成9・10年度に分布調査の成果に基づき埋蔵文化財の実態を確認する調査を実施した。その結果櫛谷町菅野付近の広い範囲に埋蔵文化財の存在が明らかとなり、以後建設省（現国土交通省）からの依頼を受けて本発掘調査を実施した。調査は事業の進捗に伴い本報告の桟木遺跡と西神ニュータウン（以下西神N.T.と記述）No62遺跡を平行して進めた。また確認調査も用地買収に合わせて継続して実施した。

第2節 桟木遺跡

桟木遺跡は神戸市西区櫛谷町菅野に所在する周知の遺跡である。櫛谷川沿いに形成された段丘上の南



第2図 調査区の位置



第3図 柄木遺跡の調査

a. 平成11年度（990255） b. 平成13年度調査（2001141） c. 平成13年度調査（2001211）

①昭和60年度 ②昭和62年度（地蔵下地区） ③平成3年度（第7次調査） ④平成5・7年度調査（第I～V調査区） ⑤平成8年度（第12次調査） ⑥平成9年度（第13次調査） ⑦平成10年度（第14次調査） ⑧平成10年度（第15次調査） ⑨～⑩は『神戸市埋蔵文化財年報』各年度を参照した）

北約1500m、東西約100mの範囲に広がる弥生・古墳時代、中世の集落遺跡である。西神ニュータウンと西神南ニュータウンの間に位置するこの地域は、開発の著しい場所でもあり、土地改良事業、河川改修、県道建設などの開発に起因する発掘調査が昭和60年度以降神戸市教育委員会により十数次にわたり実施されている。特に神戸西バイパスと交差する県道小部明石線建設に伴う発掘調査では、本事業対象地の南西側で弥生時代から中近世に至る遺構が検出され、神戸西バイパス事業範囲にまで遺構が広がることが想定された。

第3節 発掘調査の経緯

神戸西バイパス建設に伴い兵庫県教育委員会が実施した柄木遺跡の発掘調査は、以下のとおりである。

1. 確認調査の経過



第4図 確認調査位置図

遺跡調査番号：970424

調査期間：平成9年12月1・2日

面 積：46m²

担当者：山下史朗・守岡克倫

県道小部明石線との交差箇所に計11箇所のトレンチを設定し、調査を行ったが、隣接地からの遺構の広がりは確認できなかった。

遺跡調査番号：980217

調査期間：平成11年1月5日～3月25日

面 積：230m²

担当者：岸本一宏・松野健児・小田 賢

神戸市の調査成果に基づき、バイパス部分の全域について、トレンチ23箇所を設定し調査した。その結果、樅谷川氾濫原と丘陵部を除くほぼ全域で遺構・包含層を確認した。

遺跡調査番号：980254

調査期間：平成11年3月4日

面 積：29m²

担当者：岸本一宏

県道小部明石線との交差部について確認調査である。トレンチ3箇所について調査を行った。すべてのトレンチで遺物包含層を確認し、2箇所では遺構を検出できた。

遺跡調査番号：2002132

調査期間：平成14年8月22日

面 積：12m²

担当者：柏原正民

確認調査未実施箇所にトレンチ3本を設定し、調査したが遺構・遺物の存在は確認できなかった。

遺跡調査番号：2004131

調査期間：平成16年12月6日～12月15日

面 積：363m²

担当者：吉田 界・山上雅弘

本発掘調査実施範囲南側の丘陵尾根上についてトレンチ17本を設定し調査を行った。一帯は戦後の開墾により大きく削平され、遺構・遺物は確認できなかった。

2. 本発掘調査の経過と体制

遺跡調査番号：990265

調査期間：平成11年9月30日～平成12年3月17日

面 積：5,497m²

担当者：甲斐昭光・川村慎也・田中秀明

工事受託：関西建設工業株式会社

空洞受託：株式会社中庭測量コンサルタント

遺跡調査番号：2001141

調査期間：平成13年12月25日～平成14年3月12日

面 積：4,732m²

担当者：山上雅弘・長濱誠司・柏原正民

工事受託：ダイニチ・コンストラクション株式会社

空洞受託：日本テクノ株式会社

遺跡調査番号：2001211

調査期間：平成14年1月28日～平成14年3月15日

面 積：774m²

担当者：中川 渉・日置 智

工事受託：ダイニチ・コンストラクション株式会社

空洞受託：株式会社中庭測量コンサルタント

第4節 遺物整理作業の経過と体制

遺物整理作業は、発掘調査時に現地において、水洗・ネーミングを行ったことに始まる。本格的な作

業は、平成19年度に出土遺物を兵庫県立考古博物館に搬入して行った。

平成19年度

遺物の水洗・ネーミングから接合・補強、実測を行い、復元の後に遺物の写真撮影を行った。また出土金属器の保存処理を行った。

整理の体制

整理担当：山上雅弘 長濱誠司

工程管理担当：岸本一宏

金属器保存処理担当：岡本一秀

調整担当：菱田淳子

非常勤嘱託員：眞子ふさ恵 伊藤ミネ子 早川有紀 萩野麻衣 谷脇里奈

宮田麻子 西村美緒

栗山美奈 大前篤子 藤井光代（金属保存処理）

日々雇用職員：的場美幸

平成20年度

図版類のトレース、レイアウトから報告書刊行までの作業を行った。また出土した木製品の保存処理作業を行った。これとあわせて分析・鑑定として、出土した木製品の樹種同定を株式会社古環境研究所に委託した。その成果については本文中に記している。

整理の体制

整理担当：山上雅弘 長濱誠司

工程管理担当：岡田章一

木製品保存処理担当：鈴木敬二

調整担当：菱田淳子

非常勤嘱託員：高瀬敬子

今村直子 小林俊子 渡辺二三代 村上令子（木製品保存処理）



第5図 整理作業風景

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

柄木遺跡の所在する神戸市は兵庫県の南東部に位置する。兵庫県の県庁所在地として政治・経済の中心であるとともに、人口も約153万人を数え県下の約3割を占めている(平成20年現在)。市域は約552km²と県内で広大な面積を占める。市域を背骨のように六甲山地が北東～南西方向に伸び、南は大阪湾に面する。広大な市域は9つの区に分けられる。市域の大部分は旧摂津国であるが、垂水区と柄木遺跡の所在する西区だけは六甲山系の西側にあたり旧播磨国明石郡となっている。

神戸市西区は神戸市の西端であり、神戸市街地とは六甲山系により隔てられたことから、長らく明石市域との結びつきが強い地域であった。

区域は明石川水系によって形成された明石平野とその周辺の段丘および丘陵から構成される。明石川は六甲山を源とし、明石市域において播磨灘に流れ込む全長約25kmの河川である。途中、平野町付近で南へ流れを変え、六甲山系と平行する北東～南西方向に流れる。支流の権谷川、伊川は明石川もこれと平行して流れ、玉津町出合付近で権谷川が、明石市との市境付近で伊川が合流する。

西区は面積約137km²あり、市域の約1/4を占める。そのうち山林・原野が約27%、農地が約40%、宅地が約26%である。緑豊かな区域では長らく稲作を中心とした農業が主産業であったが、近年は都市近郊農業として園芸や畜産もさかんであり、観光農園も経営されている。一方、1960年代より宅地化も進み、1970年代以降丘陵部を中心に西神ニュータウン、西神南ニュータウン開発などの新都市建設、平野部の市街地整備もはじまっており宅地化が進んでいる。また地下鉄や道路整備により神戸市街地へのアクセスも良好となった。多くの開発事業により人口増加が著しいことから、1982年に垂水区の西半にあたる7町が分区して西区となつた。分区当時の人口は約9万4千人と9区のうちで最小だったが、現在は約24万人と9区のうちで最大となっている。新都市開発に合わせて工業団地も造成され、神戸市域の中で工業事業所数は2位、工業従業員数は1位である。このように山林や農地が減少し、宅地や工場が増加する傾向にあるものの、まだ緑に恵まれた地域であり、都市と緑の均衡した町づくりを目指している。

第2節 歴史的環境

柄木遺跡を含む明石川流域は各時期の遺跡が高密度に分布する地域である。これは当該地域が新都市開発など大規模開発に伴って実施された発掘調査による成果が大きい。

旧石器・縄文時代

更新世段丘縁辺部では旧石器～縄文時代の遺物散布地が知られ、ナイフ形石器などが採集されている。集落の形成が確認されるのは縄文時代後期以降である。伊川流域では長坂遺跡(61)で竪穴住居が検出されている。明石川流域では玉津田中遺跡(26)、印路遺跡(51)で土坑などが検出されている。大畠遺跡(29)、西戸田遺跡(50)などでも後期～晩期の遺物が出土している。

弥生時代

吉田遺跡からは明石川流域最古の土器が出土しているが遺構は検出されていない。これにやや遅れて

玉津田中遺跡(26)、新方遺跡が出現し、弥生時代を通じて集落が営まれる。玉津田中遺跡では前期の方形周溝墓などが検出されている。

中期に入ると遺跡数は急増する。新方遺跡、今津遺跡、居住小山遺跡などがあり、新方遺跡では玉作り関連の遺物が出土する。

中期後半に入ると遺跡は丘陵上に営まれる特徴がある。西神N.T.№38(42)・50(38)・65(19)遺跡、伊川流域の池上口ノ池遺跡、頭高山遺跡など標高100mを越える丘陵上に集落が立地し、尾根上や斜面に住居などを築いている。西神N.T.№50遺跡(38)は堅穴住居20棟、段状遺構などが検出され、明石川流域最大の高地性集落である。西神N.T.№65遺跡(19)も中～後期の高地性集落であり、溝内より石製銅鋸鉄型が出土している。青谷遺跡(11)は、遺跡の実態は不明であるが、丘陵上に立地。土器多数のはか小型倣製鏡も採集されている。またこの時期の墳墓も丘陵上に築造される。西神N.T.№40遺跡、印路台古墳(52)では方形台状墓、西神N.T.№42(41)・47(39)・59遺跡では木棺墓や土塙墓が検出されている。中期末から後期前半の集落は丘陵上に立地する城が谷遺跡(12)、袞山遺跡(63)がある。表山遺跡では環濠をもち、吉備系土器や倣製鏡が出土している。

後期に入ると集落は再び低地に営まれるようになる。この時期の集落は、玉津田中遺跡(26)、新方遺跡のほかに吉田南遺跡、池上北遺跡(59)、大畠遺跡(29)などが新たに出現する。

古墳時代

明石川流域最古の古墳は天王山4・5号墳(56)であり、これに続いて流域最古の前方後円墳である白水瓢塚古墳(57)が築造される。この他に前期古墳としては、西神N.T.№44・45遺跡、堅田1号墳(46)、印路古墳群(52)などがあり、いずれも丘陵上に築造された方墳という点で共通している。吉田王塚古墳(55)は明石川右岸に所在する流域で最大規模の古墳である。白水瓢塚古墳に続く前方後円墳であり、被葬者は明石川流域を統合した豪族と想定される。

明石川流域では約200基の後期古墳が知られているが、その多くは木棺直葬墳である。また遺跡の調査では消滅した古墳の痕跡が検出されることも多く、さらに多くの古墳があったものと思われる。

出合遺跡(54)は5～6世紀の集落が検出され、隣接して須恵器窯跡が検出されている。集落背後の丘陵上には帆立貝式古墳である亀塚古墳など複数の古墳の痕跡が検出されている。

古代

明石川流域は旧明石郡に属していた。郡内には山陽道が東西に通過していたが、須磨から明石に至るルートは海岸沿いに進むもの、峰越えで伊川流域を進むものの2説がある。また大寺遺跡付近に明石駅家が想定される。吉田南遺跡は大型の掘立柱建物や官衙的遺物が検出されていることから、明石郡衙の有力な推定地である。出合遺跡(54)でも大型掘立柱建物が検出され、吉田南遺跡との関連が指摘されている。西神N.T.№62遺跡(2)でも同時期の集落が検出されている。

中世

明石平野には条里制地割が明瞭に残存していた。この地割がいつ造成されたものか明らかでないが、中世の集落はこの地割の規制を受けている。玉津田中遺跡(26)では地割に沿う建物群を検出したほか、辻ヶ内地区で検出されたものは、周囲を堀で囲んだ1町以上の屋敷地であり、その内部に瓦葺建物と園地があり、神出での須恵器生産・流通に関わる有力者の居館あるいは寺院と想定される。二ツ屋遺跡(21)でも池を伴う礎石建物などが検出される。

この時期、明石川流域の神出町付近では神出窯が操業、その製品は広域に流通し、そのうち瓦は京の

寺院や鳥羽離宮に供給されている。神出の周辺部でも築田古窯址(40)などが確認されている。西神N.T. No62遺跡(2)では集落が確認されている。

城館は、伊川流域では脇村構居(上脇遺跡)(62)、太山寺城など、櫛谷川流域では端谷城(16)、池谷城(15)、などがあり周辺地域と比較しても集中している。1580年の三木合戦の後、これらの多くは廃絶し、明石川流域の中世は終焉する。その後、明石川河口付近に船上城、1616年に明石城が築城される。

寺院は天台宗寺院として伊川流域に太山寺、櫛谷川流域に如意寺があり、12世紀以降伽藍が整備される。如意寺周辺では中世の塔頭址(13)などの調査が行われている。また天台寺である日輪寺(20)は調査により区画溝が検出されている。頭高山遺跡では大谷寺跡と推定される遺構が検出されている。



第6図 周辺の遺跡

1. 桜木遺跡 2. 西神N.T. No62遺跡 3. 櫛谷中道跡 4. 艮谷遺跡 5. 池谷進跡 6. 西区No255遺跡 7. 川重裏山古墳 8. 香野遺跡 9. 松本郡集墳 10. 西区No190遺跡 11. 青谷道跡 12. 城が谷道跡 13. 如意寺塔頭址 14. 如意寺裏山遺跡 15. 池谷城跡 16. 篠谷城跡 17. 西神N.T. No84遺跡 18. 西神N.T. No66・67遺跡 19. 西神N.T. No65遺跡 20. 日輪寺遺跡 21. 二ツ塚遺跡 22. 二ツ塚東遺跡 23. 水谷遺跡 24. 九塚遺跡 25. 居住遺跡 26. 津田中道跡 27. 芝崎遺跡 28. 植中城跡 29. 大瀬遺跡 30. 篠田遺跡 31. 篠田遺跡 32. 下村古埋葬群 33. 春日神社西遺跡 34. 西神N.T. No56~60遺跡 35. 西神N.T. No55遺跡 36. 春日神社裏山古墳集墳 37. 西神N.T. No45遺跡 38. 西神N.T. No50遺跡 39. 西神N.T. No47遺跡 40. 篠田古窯址 41. 西神N.T. No41・42遺跡 42. 西神N.T. No38・39遺跡 43. 西神N.T. No28・29遺跡 44. 西神N.T. No34・35遺跡 45. 西神N.T. No30~33遺跡 46. 篠田神社古墳群 47. 黒田遺跡 48. 常本遺跡 49. 少年保育所裏山古墳集墳 50. 西口田遺跡 51. 印路遺跡 52. 印路群集墳 53. 中村郡集墳 54. 出合道路 55. 吉田王塚跡 56. 天王山古墳群 57. 白水窓根古墳 58. 北別府遺跡 59. 池上北塗跡 60. 池上遺跡 61. 長坂遺跡 62. 上塗遺跡 63. 表山遺跡・池ノ内御集墳 64. 片山古墳集墳 65. 開道跡

第3章 調査の結果

第1節 地形と基本的な層序

調査区は榎谷川左岸、南北端に山麓の小支谷を望む河岸段丘上に位置し、一部小支谷を含む。南東から北西へ傾斜をもち、造構面の標高は最も低い北西隅で約34m、丘陵部となる東端付近では約37mとなる。最高所は調査区南端の丘陵部で約38mを測る。調査区北西側は、榎谷川が北から西へ蛇行しつつ流れている。南東側は丘陵であり、比高差約15mの斜面を経て頂部にいたる。この丘陵からは鋸歯状に小支谷が開析している。つまり調査区は榎谷川と丘陵にはさまれた場所に所存している。

調査区北側は里道を挟んで1.2~1.5mの段差となり榎谷川の氾濫原となる。確認調査の成果によれば、この部分は数十cmのシルト堆積層の下は厚い礫層となっている。これに隣接する調査区北半部の断面観察では、調査区北半部を中心に榎谷川の河川堆積と考えられる亜円礫層がみられ、かつて遺跡周辺が河川であったことが伺える。この礫層の上には段丘崖が形成された後に堆積し、土壤化した砂層がみられ、造構はこの層の上面から切り込んでいる。遺物包含層は東側で厚く、西に向かって薄くなる傾向にある。調査区北端付近では礫層堆積後に北側の谷から流入する細礫を含む堆積物が堆積する。南側では河川堆積はみられず、東側の小支谷から流入する淘汰の悪い堆積物が部分的にみられる。丘陵の裾部は丘陵を形成する述山上に斜面からの出土物が堆積する。なお現水田である表土下には灰白色の水田土壤層、その直下には水田層と推定される暗褐色の土壤層が続き、遺跡廃絶後は現代に至るまで水田として利用されていたことが伺える。

近隣の調査では、弥生時代から中世まで複数の造構面が確認されているが、本調査区内においては1面を検出したのみである。造構面は河川および丘陵側から供給・堆積したもので、部分により礫層やシルト層となる。断ち割りによる調査でも下層に造構面、遺物包含層は確認できなかった。

第2節 造構

1. 概要

発掘調査は平成11年度と12年度で3次にわたって実施したが、各調査区は隣接し図上では連続する1つの調査区となる。検出した造構は各調査時に独自に造構名をつけたが、同じ造構名が重複すること、複数の調査区にまたがる造構も存在することから、本調査報告書作成時に再整理し、すべて一連の番号とした。新旧造構名対照表を第2表に記している。

調査で検出した造構・遺物の大半は中世に属するもので、一部弥生時代のものがある。中世の造構は溝によって区画され、グループ分けすることが可能であり、溝によって区画された、掘立柱建物を中心とした造構群を屋敷地1~5としてまとめて記述する。またこれに属さない造構や時期の異なる造構をその他の造構として記述している。

2. 中世以降の造構

a. 屋敷地1

概要



第7図 調査区の地形

調査区西端に位置する。S D01・02・03・04・05により東西約19m、南北約11.5mの長方形に区画される。区画内には建物、井戸、土坑などがある。区画内はS D02によりさらに南北に2分割される。北半はSB01が大部分を占める。一方、南半にはSE01などがあるものの、遺構の分布は疎らである。

掘立柱建物

S B01 図版3 写真図版8

検出状況 屋敷地1北半に所在し、全体を検出することができた。土坑、溝などの遺構と重複している。

これらのいくつかは同時に存在しないと考えるが切り合い関係なく、先後関係は不明である。

形状・規模 4間(8.0m)×4間(9.8m)の東西棟の純柱建物である。梁行方向はN-27°Eを示す。

床面積は78.4m²を測る。ただしSD05を跨いである東端の柱穴列は、ほぼ柱穴の桁行方向の延長に合致することから4間×5間の建物となる可能性もある。

柱穴 柱の通りは比較的良好である。柱間は梁行が約2mだが、桁行は両端が約2m、中央の2間が2.8~2.9mとなる。

遺物 柱穴内より土師器小皿(1)・鋤釜(2)が出土した。

残存した柱根のうちP21のものについて樹種同定を行った。その結果、柱根はマツ属複維管束並属(*Pinus subgen. Diploxyylon*)と同定された。

土坑

SK01 図版3 写真図版9

検出状況 SB01南東隅に位置する。SK02・03と重複し、これらを切る。

形状・規模 平面は不整な方形を呈すると見られ、一辺2.7m程度あると見られる。検出面からの深さは10cm程度である。土坑の隅付近にはSB01を構成する柱穴があることから、柱間1間を意識して掘られたものと思われる。

埋土 上層に藁や竹の炭化物が大量に堆積する。炭化物は東接するSD05でも認められ、これらは並存したものと考える。

遺物 須恵器小皿(21・22)が出土した。

SK02

検出状況 SB01南東隅に位置する。東半がSK01と重複し、本遺構が切られている。また本土坑が埋没した後にSB01を構成しない柱穴が掘り込まれている。

形状・規模 平面は方形を呈すると思われる。東西2.2m以上、南北2.5mを測る。深さは14~20cmである。

埋土 上層に藁や竹の炭化物が大量に堆積する。

遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SK03 図版3

検出状況 SB01南東隅に位置する。南半がSK01と重複する。

形状・規模 全容は不明であるが、平面は方形を呈するものと考える。規模は東西約1.5m、南北1m以上を測る。深さは12cmである。

埋土 SK01・02と異なり炭化物は含まない。

遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SK04 図版5 写真図版10

検出状況 屋敷地の北東部分、SB01内に位置する。他の遺構との重複は認められない。

形状・規模 平面は東西方向に主軸をもつ梢円形である。長径1m、短径0.8mを測る。検出面からの

深さは15cmである。

埋土 上下2層からなり、礫を少量含む。

遺物 図化しうる遺物は出土していない。

S K05 図版5 写真図版11

検出状況 検出したのは屋敷地の北東隅であり、S B01の北東隅でもある。溝状の遺構と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模 南北に長軸をもつ長方形を呈する。規模は、長さ1.8m、幅0.75mを測る。検出面からの深さは25cmである。形態や規模から屋敷墓の可能性がある。

埋土 上下2層からなるが、上層には遺構面構成上がブロック状に混じる。

遺物 土師器小皿(23)が出土している。

S K06

検出状況 屋敷地の北隅で検出した。S B01内で北隅のS B01 P14南側に位置する。他の遺構との重複はみられない。

形状・規模 北西-南西に主軸をもつ不整な梢円形を呈する。長径70cm、短径40cmを測る。

埋土 細砂～中砂の単層である。

遺物 須恵器小皿(24)が出土している。

S K07 図版5

検出状況 屋敷地南西部に位置する。

形状・規模 南北に主軸をもつ不整な梢円形を呈する。長径4.9m、短径2.1mを測る。検出面からの深さは20cmで、断面は皿状を呈する。

埋土 上下2層よりなり、いずれも礫を含んでいる。

遺物 図化しうる遺物は出土していない。

S K08 図版5

検出状況 屋敷地を区画するS D05東側に位置する。S B01 P 2と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模 南北に主軸をもち、S B01やS D05と平行する。平面は不整な長梢円形を呈する。長さ2.2m、幅0.7m、検出面からの深さ5cmを測る。

埋土 褐灰細砂～中砂の単層である。

遺物 土師器甕(25)が出土している。

S K09 図版5

検出状況 S D04・05交点の北側に位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

形状・規模 東西に主軸をもつ梢円形である。長径75cm、短径50cm、検出面からの深さは15cmを測る。

断面は「U」字状を呈する。

埋土 褐灰細砂～極細砂の上下2層よりなる。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

井戸

S E01 図版4 写真図版9

検出状況 屋敷地の南東隅付近に位置する。比較的遺構の疎らな場所にあり、関連施設は検出できなかった。S D05と重複しS D05埋没後に掘削している。S D05はS B01に伴う可能性が高い溝であり、そうであるなら、本遺構とS B01とは時間差があるかもしれない。

形状・規模 南北に主軸をもつ楕円形を呈し、長径3.65m、短径2.95mを測る。深さは0.9mであり、断面はすりばち状を呈する。検出面から0.65mで段をもち、下部は1.2m×0.95mで東西に主軸をもつ楕円形となる。水溜や井戸側などの施設は伴わない。

埋土 上層は砂層を基層とするのに対し、中～下層はシルト層と粗砂層が互層をなす。中層および最下層には上器を多く包含する。

遺物 多量の遺物が出土している。そのうち18点(3~20)を実測した。他に実測しえなかた個体として、須恵器碗17点以上・小皿1点・鉢4点・壺1点、土師器壺2点以上・羽釜1点・小皿2点以上、瓦器碗2点、白磁碗1点がある。

墓

S X01 図版4 写真図版10

検出状況 屋敷地の中央からやや北西より、S B01の西端付近で検出した。他の遺構との重複は認められない。検出状況などからS B01に伴う屋敷墓と推定する。

形状・規模 平面は南北に主軸をもつ長方形で、長さ1.75m、幅0.95mを測る。検出面からの深さは20cmで、断面は「コ」字状である。

遺物 南東隅で須恵器鉢(33)が1点のみ出土している。

溝

S D01 図版5・20 写真図版11・12・33

検出状況 調査区西半で検出した「L」字状にのびる溝である。西半部では最も規模の大きな溝であり、屋敷地1の南辺を区画するとともに、一帯の区画の基幹となる水路であろう。

形状・規模 調査区北端から南西方向へ40m直線にのび、さらに直角に屈曲して北西方向へ30m直線的にのびる。両端とともに調査区外へのびる。幅は最大で2m、深さ0.45mを測る。

埋土 粗砂による堆積状況をみせるが、最下層にシルトが堆積し潘水した状況も示している。上層にからは比較的多くの土器が出土している。

遺物 土師器皿(26)・壺(27)・羽釜(28)、須恵器碗(29)が出土している。

S D02 図版5

検出状況 屋敷地1敷地内で検出した「L」字状にのびる溝である。S B01の雨落ち溝であるとともに、S D03とともに屋敷地1の西辺を区画する性格をもつてであろう。S K01と一部重複し、断面観察では本遺構がS K01を切っている。また、後述するS D03とは本来同一の溝であった可能性がある。

形状・規模 S B01に南接し、北西方向に11.5mのびる。S B01西隣付近ではほぼ直角に屈曲し、南西方向に9.5mのび、S D01に合流する。幅0.75~1m、深さ15~20cmを測る。

埋土 細砂～中砂が堆積する。

遺物 須恵器壺(30)が出土している。

S D03

検出状況 屋敷地1西北で検出した。他の遺構との重複関係は認められない。南側のS D02に統いて屋敷地1の西辺を区画するものと考える。

形状・規模 S B01に西接し直線的にのびる。検出長7.5m、幅は最大で0.8mである。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

S D04 図版5

検出状況 北西から南西方向にのびる。北西は調査区外へ続き、南西側はS D28とつながる。西半は屋敷地1、東半は屋敷地2の北辺を区画し、S D01とともに一帯の土地を区画する溝になるのであろう。

形状・規模 ほぼ直線的にのびる溝で、検出長約45mを測る。南東側はS D28とつながり、北西側は調査区外へとのびる。深さは10cmで断面は浅い逆台形を呈する。

埋土 細砂を基調とした堆積をみせる。

遺物 須恵器壺(31)が出土している。

S D05 図版5

検出状況 S D01・04間で検出した。直線的にのび、屋敷地1の東辺を区画する溝である。

形状・規模 S D01・04間を直線的にのびる。検出長19m、幅0.45mを測る。深さは15cmで断面は「U」字状を呈する。

埋土 細砂を基調とした堆積であり粗砂が混じる。SK01に隣接する地点では底に炭化物の集積が検出され、SK01と併存することを物語る。

遺物 須恵器壺(32)が出土している。

b. 屋敷地2

概要

調査区中央よりやや北西よりに位置する。S D01・04・28・24により東西約10.5m、南北約19mの方形に区画される。北辺は屋敷地1北辺と同じS D04であり、約12mの遺構のない区画をはさんで東西に並ぶ。区画内部にS B02とその周囲を巡るS D04・19・20がある。検出した遺構は東半に偏り、西半にはほとんど遺構は存在しない。土坑など生活に関連する遺構は認められない。

据立柱建物

S B02 図版6 写真図版12

検出状況 区画内の北西半で検出した。S D21と重複しているが、先後関係は不明である。

形状・規模 2間×3間の規模をもつ東西棟であり、梁行はN-25°Eを示す。桁行6.05m、梁行3.2m

を測り、床面積は約19m²である。柱の芯々間距離は2m前後である。

柱穴 東西面の側柱は隅柱のみで梁行中央の柱穴を持たない。柱の通りは比較的良好である。掘方の径は25~30cmであり、隣接する区画のS B01と比較するとやや小型で浅い。

遺物 柱穴内より須恵器碗(34)が出土した。また屋敷内の包含層より須恵器小皿(36)が出土している。

溝

S D19 図版6

検出状況 屋敷地北西部で検出した。「L」字状にのびる溝である。「L」字状に囲まれた内部にS B02があり、建物の西・南辺を区画する性格の溝であろう。他の造構との重複は見られない。

形状・規模 南東ー北西方向に8mのび、北東方向に直角に屈曲する。さらにS D01に平行し9m直線的にのび、S D04とつながる。南端付近で幅1m、北端付近では幅50cmを測る。深さは15cm程度で、断面は浅い「U」字状を呈する。

埋土 極細砂の堆積が主体をなすが、底部に粗砂が堆積している。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

S D20 図版6

検出状況 屋敷地2北東部で検出した直線的にのびる溝である。S B02の東辺と平行することから、建物の東を区画する性格の溝であろう。

形状・規模 南西ー北東方向にのびる。南西端は収束し北東端はS D04につながる。検出長は8.6m、幅50cmを測る。深さ5cm程度であり、断面は浅い皿状を呈する。

埋土 粘質の強いシルトを埋土とする。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

S D21・22 図版6

検出状況 S B02周辺で検出した。このうちS D21はS B02と重複関係にある。切り合い関係にないため先後関係は明らかでないが、建物廃絶後のものであろう。

形状・規模 北西ー南西方向に直線的にのびる溝であり、S D01・19・20・28とはほぼ平行している。検出長はS D21が6.8m、S D22が4.2mである。S D21はS D19をはさんだ延長上に溝状の落ち込みが検出され、本来は同一の溝であった可能性がある。区画を意図した溝と比較すると小型であり、耕作痕と考える。

埋土 粘質の強いシルトを埋土とする。

遺物 出土していない。

c. 屋敷地3

概要

調査区北東端付近に位置し、S D37・38などにより南北約17m、東西約10mの長方形に区画される。区画内のはば全域をS B03が占める。

掘立柱建物

S B03 図版8 写真図版14・15

検出状況 溝によって区画されたほぼ全域を占める。

形状・規模 7間×4間の規模をもつ南北棟の総柱建物であり、桁行方向はN-25°Eを示す。桁行15.7m、梁行8.8mを測り、床面積は約138m²である。柱の芯々間距離は桁行の北側2間分が約2.5mあるが、他は2~2.2mである。梁行方向はほぼ2mと整っている。後述する土坑の配置と合わせると建物北半の2間×4間は土間として利用されたものと考える。桁行の北側2間と平行して建物東側に柱穴列があり、梁行の延長上に柱穴があることから、庇などの施設を想定しうる。

柱穴 柱穴は欠損する部分もなく柱の通りは比較的良好である。掘方は円形または梢円形を呈し径は20~50cm、深さ10~50cmである。建物を構成する柱穴には柱根や根木・礎板が遺存するものがある。P 12・21・22・31・36で柱根、P 8・12・20・28・29・37で礎板を検出している。

遺物 柱穴内より土師器羽釜(37)・小皿(38・39)が出土した。

残存した柱根の5点(P 12・21・22・31・36)全て、礎板のうち1点(P 12)について樹種同定を行った。その結果、柱根はP 36がツガ属(*Tsuga*)である他はカヤ(*Toreya nucifera* Sieb. et Zucc.)と同定された。礎板はツブラジイ(*Castanopsis cuspidata* Schottky)と同定された。

土坑

S K10 図版9 写真図版16

建物北東隅で検出した。2.5m×2.3mの方形を呈する。断面は皿状を呈し深さは最大で12cmである。4隅にあたる部分に建物の柱穴があることから、柱間1間×1間に収まる規模であり、各辺も建物の方向と合致することからS B03の屋内施設として設けられたと考える。

遺物 図化しうる遺物は出土していない。

S K11 図版9 写真図版17

検出状況 屋敷地の北隅付近で検出した。S B03内でその北隅付近にあたる。他の遺構との重複はみられない。同様の規模・形状のS K12が南側に位置する。

形状・規模 円形を呈し径70cm、深さ31cmを測る。断面は逆台形を呈する。

埋土 上下2層よりなり、ほぼ水平な堆積をみせる。上層には炭粒が多く混じる。

遺物 須恵器壺(45)が出土した。

S K13 図版9

検出状況 屋敷地の北を限るS D38の北側にあり、厳密には屋敷地外である。他の遺構との重複はみられない。

形状・規模 平面は東西に主軸をもつ不整な梢円形を呈する。長径1.8m、短径1.5mを測る。深さは8cmである。断面は浅い皿状を呈する。

埋土 細砂から中砂の単層であり、礫を含んでいる。

遺物 図化しうる遺物は出土していない。

S K14 図版9

検出状況 S K13の東側で検出した。同様に屋敷地外に所在する遺構である。他の遺構との重複はみられないが、東半部を擾乱により失っている。

形状・規模 本来の形状は、北西から南東方向に主軸をもつ楕円形と考える。短径70cm、長径は70cm以上である。深さは15cmで、断面は浅い「U」字状を呈する。

埋土 1層のみの堆積である。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

溝

S D37 図版9 写真図版17

検出状況 S B03の東辺沿いで検出した。

形状・規模 S B03東辺沿いに13.6mのび、さらに西へ屈曲し、南辺沿いにS K15に至る。幅は1.6mあるが立ち上がりは緩く深さは10cm程度である。

埋土 上下2層からなり、上層には礫とともに遺物も包含する。

遺物 土師器納壺型土器(43)・羽釜(44)が出土している。

S D38 図版9 写真図版17

検出状況 S B03の北辺沿いにのびる。S D42と重複し、本遺構が切っている。

形状・規模 幅70cmを測る。深さは4cm程度である。断面は浅い「U」字状を呈する。

埋土 基盤層をブロック状に含んだ砂層が単層で堆積する。

遺物 須恵器碗(46)が出土している。

S D42 図版9 写真図版17

検出状況 S B03の北辺沿いにのびる。東端付近はS D38と重複し、本遺構が切られている。擾乱により消滅するが、さらに西へ続く可能性がある。

形状・規模 幅70cmを測る。深さは4cm程度である。断面は逆台形状を呈すると思われる。

埋土 基盤層をブロック状に含んだ砂層が単層で堆積する。

遺物 須恵器碗(41)、土師器羽釜(42)が出土している。

S D43 図版9

検出状況 S D38・42と平行する。屋敷地3に伴うものかは不明である。

形状・規模 検出長は6mあり、さらに東側へ続く。幅25cm、深さ8cm程度である。

埋土 砂層の単層である。

遺物 土師器小皿(40)が出土している。

墓

S X02 図版9 写真図版15

検出状況 S B03西側で検出した。S D40に切られている。検出した位置からS B03に伴う屋敷墓の可

能性がある。

形状・規模 東西に主軸をもつ長方形を呈し、長さ1.5m、幅1mを測る。深さは25cmである。

埋土 細砂から中砂がほぼ水平な堆積をみせる。

遺物 遺物は出土していない。

d. 屋敷地4

概要

調査区中央付近で検出した。屋敷地を限る明確な区画は認めがたいが、北をS D63、東をS D66で区画するのであろう。西側を区画する溝は明確ではないがS D60であろうか。そうであれば区画の東西は約19mとなる。区画内ではS B04を検出したが、土坑などそれに付帯する遺構は検出していない。

掘立柱建物

S B04 図版10 写真図版18

検出状況 区画の北端、S D63に沿って検出した。耕作痕と思われるS D64と重複している。

形状・規模 欠落する柱穴が多いものの、2間×5間の規模をもつ東西棟の純柱建物であり、梁行はN-24°Eを示す。桁行10.6m、梁行4.4mを測り、床面積は約46m²である。柱の芯々間距離は桁行の北側間が約2.5mあるが、他は1.5~2.5m、梁行は2~2.4mとばらつきがある。

柱穴 欠損する部分が多いものの、残存する部分の通りは比較的良好である。掘方は円形を呈し径25~50cmを測る。深さは10~30cmである。建物を構成するもの以外に西半部に複数の柱穴が分布することから、建て替えなどが行われているかもしれない。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

溝

S D63 図版10・21 写真図版18

検出状況 S B04とはほぼ平行して検出した。何本かの溝と交錯しているが先後関係は不明である。

形状・規模 東西方向に直線的に約15mのびる。東端はS D66とつながり、西端は調査区内で収束する。幅60cm、深さ10cmである。

埋土 細砂が上下2層堆積する。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

S D64 図版10

検出状況 S B04と重複するため建物に伴うものと考えがたい。その規模などから、周囲の溝と同様に建物廃絶後の耕作に伴う動溝であろう。

形状・規模 北東から南西方向に直線的にのび、検出長約7mを測る。幅30cm、深さ8cmを測る。

埋土 粘土質シルトの单層である。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

S D66

検出状況 S B04東側で検出した。複数の溝と交錯しているが先後関係は不明である。

形状・規模 南北方向に直線的に約20mのびる。南端はS D78、北端はS K20とつながるが、さらに北側のS D65と一緒になる可能性をもつ。幅0.5~1m、深さ30cmを測る。断面は台形を呈し、しっかりと掘り込まれている。

遺物 本屋敷地に伴うと考える範囲からは遺物は出土していないが、その他の範囲からは須恵器小皿(74)・碗(75・76)・壺(77)が出土している。

e. 屋敷地5

概要

調査区南西部に位置する。調査区内で最も遺構密度が高く、柱穴、土坑、溝が重複した状態で検出した。溝は多数検出したが、いずれを区画溝とするか明確でない。S D67により東、S D68ないし69で北を区画すると思われるが、西および南側を区画する遺構は不明である。区画の規模は最大で東西約22m、南北約20mを測ると思定し、東西方向は他の屋敷地の2区分となる。区内では建物を5棟検出した。いずれも重複関係をもたないが、建物の方向により2時期に分けることが可能であろう。また建物を復元しない柱穴も多数検出しておらず、本来は復元した数以上の建物が存在したものと考える。

屋敷地内では建物群と重複して土坑群を検出したが、屋敷地に先行する遺構の可能性がある。

掘立柱建物

S B05 図版12 写真図版23

検出状況 区画西端で検出し、西側が調査区外となる。溝などと重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模 5間×3間の規模をもつ南北棟の総柱建物であり、桁行はN-27°Eの方向を示す。桁行9.7m、梁行6.3mを測り、床面積は約61m²である。柱の芯々間距離は1.8~2mでほぼ整っている。

柱穴 一部の柱穴を欠くものの、柱の通りは比較的良好である。掘方は円形を呈し径は25~60cm、深さ10~45cmである。

遺物 柱穴内より土師器小皿(47)、中国産青磁碗(48)、須恵器碗(49)が出土している。

S B06 図版12 写真図版23

検出状況 S B05に東接して検出した。溝・土坑と重複する。土坑を切るが、溝との先後関係は不明である。

形状・規模 5間×3間の規模をもつ南北棟の総柱建物であり、桁行はN-26°Eの方向を示す。桁行10.5m、梁行6.2mを測り床面積は約65m²である。柱の芯々間距離は1.8~2mであるが、桁行の南1間分が2.5mを測りやや開く。柱穴の通りは比較的良好で、梁行方向はS B05の梁行きとはば揃う。

柱穴 掘方は円形を呈し径は20~40cm、深さ10~40cmである。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S B07 図版13 写真図版23

検出状況 区画内北辺沿いで検出した。北辺の柱穴がS D68と重複し、柱穴が溝を切る。

形状・規模 3間×3間の規模をもつ東西棟の総柱建物であり、梁行はN-35°Eの方向を示す。桁行6.4m、梁行5.0mを測り、床面積は約32m²である。柱の芯々間距離は桁行が1.8~2mであるが、南1間が2.5mを測りやや聞く。梁行きは1.6mを測り、やや狭い。柱穴の通りは良好である。

柱穴 掘方は円形または梢円形を呈し径は25~50cm、深さ10~40cmである。P 8・15の底部で礎板を検出した。

遺物 柱穴内より砥石(S 1)が出土している。

S B 08 図版13

検出状況 区画の南北、S B 06の東側で検出した。建物を構成する柱穴の多くは土坑や溝と重複する。

形状・規模 3間×2間の規模をもつ東西棟の総柱建物であり、梁行はN-35°Eの方向を示す。桁行5.8m、梁行3.7mを測り、床面積は約21m²である。柱の芯々間距離は桁行が1.7~2.2m、梁行きは1.8mと2mを測り、ばらつきがあるものの、柱穴の通りは比較的良好である。

柱穴 南東隅を除くのみである。掘方は円形を呈し、径は25~50cm、深さ20~50cmである。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S B 09 図版13 写真図版23

検出状況 区画の北東隅で検出した。北辺の柱穴がS D 68と重複している。

形状・規模 3間×2間の規模をもつ南北棟の総柱建物であるが、桁行はN-34°Eの方向を示す。桁行3.65m、梁行2.4mを測り、床面積は約9m²と小型である。柱の芯々間距離は桁行の中央1間が1.3mを測る他は1.1mと短い。柱穴の通りは比較的良好である。

柱穴 掘方は円形か梢円形を呈する。径はP 7が40cmある他は30cm以下と小型である。深さ5~40cmである。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

溝

S D 67 図版13 写真図版29

検出状況 S E 02~04と重複し、本遺構が井戸を切る。

形状・規模 南北方向にのびる溝である。北端はS D 78とつながる。西端は屋敷地東側で肩が不明瞭となるが、西側へ「L」字状に屈曲するとみられる。屈曲して間もなく消滅するが、西側の延長上に小規模な溝状遺構があり、これに続く可能性がある。検出長は南北方向に28mであるが、最大35m程となる。幅は1.5m、深さ25cmを測る。

埋土 シルト～細砂が自然堆積する。

遺物 須恵器甕(81)が出土している。

S D 68・69 図版13 写真図版29

検出状況 屋敷地北端で検出した。30~50cmの間隔をもって平行し重複しない。S D 68はS B 07・09を構成する複数の柱穴と重複し、柱穴が溝に先行する。またS D 76をS D 68が切っている。

形状・規模 いずれも東西方向に直線的にのびる。S D 68は検出長16.5mで、両端とも調査区内で終結

する。幅は最大で65cm、深さ15cmを測る。S D69は検出長19.7mで、東側はS D67につながり、西端は調査区内で終結する。幅は30~40cm、深さ10cmである。

埋土 S D69はオーリープ褐細砂の單一の堆積である。S D68もこれに類似した堆積が認められるが、それを切って暗灰黃細砂が堆積している。

遺物 S D69からは須恵器碗(60)、中国産青白磁合子蓋(61)が出土している。

S D70 図版13・写真図版29

検出状況 屋敷地内で東西方向にのびる溝である。S B07と重複し、建物を構成する柱穴の一部と切り合い関係にあり、溝が柱穴を切る。

形状・規模 北西から南東方向に直線的にのび、南東端で直角に曲がる。S B05・06の北辺と平行し圓むような形状である。検出長約15m、幅40cm、深さ15cmを測る。

埋土 中～粗砂の单層である。

遺物 底部に墨書きのある須恵器碗(64)が出土している。

S D71 図版13 写真図版29

検出状況 屋敷地南端で検出した。S B06の南辺とは平行し、一部重複する。

形状・規模 南北方向に直線的にのび、南側調査区外へ続く。北端は調査区内で消滅するが、その延長上にS D70があり、一体となる可能性がある。規模は検出長13m、最大で幅1.95m、深さ45cmを測る。

埋土 中層はラミナ状の堆積をみせる。最下層は中～粗砂が堆積する。

遺物 須恵器碗(62)、中国産青磁碗(63)が出土した。

S D73 図版13 写真図版29

検出状況 屋敷地南半部で検出した。S D71・74と平行する。S B06・08、S K22と重複する。

形状・規模 南西から北東方向に断続的にのび、南東方向に屈曲する。溝の両端はともに調査区内で完結する。幅は最大で1.3m、深さ10cmを測る。

埋土 シルト質粗砂の单層である。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S D74 図版13 写真図版29

検出状況 屋敷地南半部で検出した。S D71・73と平行する。S B06と重複する。

形状・規模 南西から北東方向に直線的にのびる。溝の南西端はともに調査区内で消滅し、北東端はS D73にあたる。検出長14m、幅は最大で50cm、深さ16cmを測る。

埋土 細砂～中砂の单層である。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S D76 図版13

検出状況 屋敷地北東部で検出した。S D67と平行する。S B09、S K27、S D68・69と重複する。

形状・規模 南西から北東方向に直線的にのび、両端は調査区内で完結する。検出長5.8m、幅は最大

で44cm、深さ10cmを測る。

埋土 シルト質細砂の単層である。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S D77 図版13

検出状況 S D68・69・70と平行する。S B07と重複するが、切り合い関係になく先後関係は不明である。

形状・規模 北西から南東方向に直線的に断続的にのび、検出長11mを測る。幅32cm、深さ10cmを測る。規模から屋敷廃絶後の耕作痕と思われる。

埋土 中砂～細砂の単層である。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

井戸

S E02 図版14 写真図版25・26

検出状況 S D67の掘削中、溝底部で検出した。西接してS E03がある。

形状・規模 掘方は北西～南東に主軸をもつ橿円形を呈し、長径1.0m、短径0.8mを測る。断面は「U」字状で深さは50cmである。底面はほぼ平坦であり曲物を置く。井戸側は径、深さともに50cmである。井戸側内には曲物の破片が多数あることから本来はもう少し深さがあったものと考える。

埋土 掘方埋土は上層からほぼ平行に堆積する。井戸側内は層中において大きな変化は見られない。

遺物 井戸側である曲物は脆弱であり、良好な状態で取り上げることができなかつた。井戸側内の底部より若干浮いた状態で須恵器輪(65)が、また埋土内より須恵器鉢(66)が出土している。

S E03 図版14 写真図版27・28

検出状況 S E02と同様に S D67の掘削中、溝底部で検出した。S E02が東接する。

形状・規模 掘方は一辺約1.3mの方形を呈し北東側に張り出す。深さは50cmを測る。断面は逆台形を呈し、底部は平坦である。底部に水溜は確認できなかつた。

井戸側は横板を方形に組み平面は南北にやや長い方形を呈する。遺存する井戸側の上法で南北95cm、東西70cmを測る。横板は各辺2段であり、隅柱により支持する。また井戸側の下部には1、2本の自然木または竹材を横板と平行に置き、根太を意図しているものと思われる。

埋土 掘方は細砂を埋土とするが、井戸側の裏込めとして礫や粘土を置く部分がある。また埋土内には角材や枝、笠などが混ざっている。

遺物 井戸側を構築する横板は長さ91.5～118.5cm、幅8.5～24.8cm、厚さ2.5～4.3cmと規模がばらつくが、93×23×3cm前後を測るものが多い。隅柱は長さ71.0～95.2cm、断面は長方形を呈し、長辺7.4～11.0cm、短辺6.0～7.5cmを測る。隅柱の2面にはほど穴が穿たれているが、横板の固定には用いていない。したがって隅柱に用いた角材は転用材と思われる。

横板に用いた木材のうち3点について樹種同定を行つた。その結果、試料はいずれもモミ属(*Abies*)であると同定された。

S E 04 図版14 写真図版26

検出状況 S E 02・03の南西側で検出した。そのため井戸としたが、井戸側や水溜などは検出されなかつた。また掘方の形状や埋土の状況も後述する土坑群のものに類似している。

形状・規模 平面は不整な隅丸方形を呈し、主軸方向はN-56°Wを示す。長軸1.5m、短軸0.95cmを測る。検出面からの深さは75cmである。

埋土 水平な堆積をみせる。

遺物 土師器小皿(67)、須恵器小皿(68)が出土した。

土坑群

概要 東西約9m×南北約7mの範囲に9基の土坑が集中する。その多くは平面が長方形を呈し、主軸をN-55°Wとすることから一連の遺構と思われる。埋土の状況などから粘土探掘坑と推定する。

S K 21 図版15 写真図版30

検出状況 土坑群の北半で最も西に位置する。

形状・規模 平面は隅丸長方形を呈し、長さ1.65m、幅0.9mを測る。深さは40cmあり、断面形は逆台形で底部は平坦である。

埋土 埋土の下層は黄褐色や橙色のシルトブロックを多く含む。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S K 22 図版15 写真図版30

検出状況 土坑群の北半に位置し、西側にS K21、東接してS K23がある。

形状・規模 平面は隅丸長方形を呈し、長さ2.2m、幅1.5mを測る。深さは55cmある。断面は箱掘りに近く底部は平坦である。

埋土 主に3層が水平に近い堆積をみせるが、いずれの層も黄色シルトブロックを多量に含む。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S K 23 図版15 写真図版31

検出状況 土坑群の北半に位置し、西接してS K22、東側にS K24がある。

形状・規模 平面は隅丸長方形を呈し、長さ1.85m、幅1.35mを測る。深さは35cmある。断面は逆台形で底部は平坦である。

埋土 主に3層が水平に近い堆積をみせるが、いずれの層も黄褐色シルトブロックが混じる。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S K 24 図版15 写真図版31

検出状況 土坑群の北半のうち最東端に位置する。S D70と重複し、本遺構が切られている。またS B 07 P 7とも重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模 平面は隅丸長方形を呈し、長さ1.3m、幅0.85mを測る。深さは45cmある。断面は箱掘りに近く底部は平坦である。

埋土 3層が水平に近い堆積をみせるが、上層を除いて黄褐色系のシルトブロックが混じる。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S K25 図版16 写真図版31・32

検出状況 土坑群の南半のうち最西端に位置する。S B08と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模 平面は方形を呈し、長さ1.5m、幅1.35mを測る。深さは40cmある。断面は逆台形を呈し底部は平坦である。

埋土 2層がほぼ水平に堆積する。黄褐色系のブロックは混じらない。

遺物 底部より鉢とみられる木製品の痕跡を検出した。

S K26 図版16

検出状況 土坑群の南半のうち東寄りに位置し、東側にS K27がある。建物に伴わない柱穴と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模 平面は隅丸長方形を呈し、長さ2.4m、幅1.0mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは5cmある。底部は平坦である。

埋土 黄褐色系の極細砂が堆積する。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S K27 図版16 写真図版32

検出状況 土坑群の南半のうち東寄りに位置し、西側にS K26がある。S K28と重複関係にあり本造構が切られている。また重複関係はないが、S D70に本造構が先行していることを確認した。

形状・規模 やや不整な隅丸方形を呈し北隅付近からS D70方向に短く浅い溝がのびる。長さ、幅とも1.6mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは20cmある。底部はやや起伏がある。

埋土 基本的に3層からなるが、上層には黄褐色シルトブロックが混じる。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

S K28 図版16 写真図版32

検出状況 土坑群南半の最東端に位置する。S K27と重複関係にあり、本造構が切っている。

形状・規模 平面は不整な円形を呈し、径0.9mを測る。深さは25cmである。断面は概ね逆台形であるが、壁面、底部ともに起伏がある。

埋土 3層がほぼ水平な堆積をみせ、各層とも橙系のシルトブロックが少量混じっている。

遺物 実測しうる遺物は出土していない。

f. その他の遺構

S B10 図版17 写真図版18

検出状況 屋敷地3東側で検出した。南北方向はほぼ水平であるが、東西方向は比高差50cm前後となる。

形状・規模 2間×2間の終柱建物であり、南北方向はN-29°Eを示す。床面積は約14m²を測る。東西3.8m、南北3.7m、柱の芯々間距離は1.8m～2mである。

柱穴 柱の通りは比較的良好である。掘方の径は20~40cmあり、深さは38cm前後である。

遺物 建物を構成する柱穴から遺物の出土はないが、建物内にあるP10から須恵器鉢(70)が出土している。

土坑

S K15 図版18 写真図版21

検出状況 調査区北東部で検出した。東側にS D37が、西側にS D80がとりつく。周辺は溝以外に遺構は疎らであり、他の遺構との重複はみられない。

形状・規模 2段に掘り込まれる。上段は平面が東西に主軸をもつ長方形を呈し、東西4.2m、南北3.1mを測る。下段は不整梢円形を呈し、その断面は逆台形を呈する。深さは30cmである。底部は東から西へわずかに傾斜している。

埋土 3層からなり、極細砂から中砂がほぼ水平な堆積をみせる。

遺物 土師器皿(69)が出土した。

S K17 図版17 写真図版19

検出状況 屋敷地3の南東側、S D65とS D48との交点の南西側に位置する。

形状・規模 平面は不整な隅丸方形を呈する。一辺1.3m前後、深さは25cmを測る。断面は浅い「U」字状を呈する。

埋土 周囲から土砂が流入した状況を看取できる。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

S K18 図版17 写真図版19

検出状況 屋敷地3の南東側、S K17の南側に位置する。東側にS K19が平行して所在する。他の遺構との重複はみられない。

形状・規模 平面は南北方向に主軸をもつ長方形を呈し、長さ80cm、幅50cmを測る。深さは5cmと浅く断面は皿状を呈する。

埋土 炭が充満する。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

S K19 図版17 写真図版19

検出状況 屋敷地3の南東側、S K17の南側に位置する。西側にS K18が平行して所在する。他の遺構との重複はみられない。

形状・規模 平面は北東から南西方向に主軸をもつ長梢円形であり、長径1.2m、短径45cmである。深さは6cm程度であり断面は皿状を呈する。

埋土 上下2層からなり、上層には炭が充満する。

遺物 固化しうる遺物は出土していない。

S K20 図版19 写真図版18・19・20

検出状況 S D58とS D65・66が「T」字状に交わる地点に掘削している。

形状・規模 平面形は北東から南西方向に主軸をもつ不整な橢円形を呈し、長径約4m、短径約3mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは60cmである。溝底よりも深く掘り込まれているため、水溜の用途をもっていたと考える。

掘方の西寄りにはS D66からS D65へつなぐように数枚の板材をさしかけた状態で検出している。板材のうち最も長いものは約2.5mを測り、下に数本の杭を等間隔に斜め方向に打ち込んで、西向きの面を持たせている。さらに板材の上には、細い自然木や木材を数点束ねて載せている。

埋土 底に近い部分は黒シルトが堆積し、底には礫や中砂がブロック状に混じっている。

遺物 須恵器鉢(78)・甕(79)が出土した。

S K29・30 図版17 写真図版21

検出状況 調査区東端の丘陵裾に所在する。東半部がS D93と重複している。

形状・規模 東西方向に主軸をもつ不整橢円形を呈する。長径2.5m、短径1.5mを測る。深さは25cmで断面は逆台形を呈する。

埋土 埋土内に多くの礫が含まれる。

遺物 埋土上層より石臼片(S 2)が出土している。

井戸

S E05 図版17 写真図版21

検出状況 調査区東端の丘陵裾に所在する。S K29・30が東側にあり、溝状遺構が北接して所在する。

形状・規模 不整橢円形を呈し、東西1.25m、南北1.4mを測る。深さは40cmで断面は箱掘り状である。

埋土 上下4層よりなり、ほぼ水平な堆積をみせる。中層には礫が多く含む。

遺物 埋土内より平瓦片(92)が出土した。

溝

S D06

調査区西端付近、屋敷地1の南側で検出した。北東から南西方向に直線的にのび、南北側は調査区外へ続き、北東側はS D01につながる。図化しうる遺物は出土していない。

S D07~13 図版20

調査区北西端、屋敷地1西側で検出した。S D01に平行するS D07~09、これに直交するS D10~13がある。いずれも浅く小規模なものであり、畑の畝など耕作に伴うものと考える。図化しうる遺物は出土していない。

S D14~18 図版20 写真図版33

調査区北西端、屋敷地1北側で検出した。S D04と平行し北西から南西に直線的にのびるS D14~16とそれに直交するS D17・18がある。S D14が深さ18cm程度ある他は10cm未溝と浅く、断面も深い「U」

字状を呈する。いずれも耕作に伴うものと考える。図化しする遺物は出土していない。

S D 23～26 図版20 写真図版33

調査区西半部、屋敷地2周辺に分布する。S D24は北西から南東方向に、S D25・26は北東から南西方向にのび、ほぼS D01に平行する。S D23のみ後述するS D29などと同じ方向をもつ。いずれの溝も調査区内で完結する。S D24が深さ27cmあるほかは浅い。S D24より土師器皿(35)が出土している。

S D 27 図版20 写真図版33

調査区北西部で検出した。擾乱の影響を受けているが検出長約11mを測る。北西から南東方向にのび、北西側は調査区外へ続く。南東側はS D28付近で消滅するが、その延長上にS D80があり、本来は同一の溝であった可能性がある。幅1.1mを測り、深さは40cmある。図化しする遺物は出土していない。

S D 28～36 図版20 写真図版34

調査区の中央やや西よりで検出した。北東から南西方向にのびるが、南半に位置するS D29・33・36はやや南側に偏る方向を示す。S D28～30とS D35・36の2列として把握でき、その幅は約5mを測る。

S D 40

調査区北半部で検出した。S B03、S D37、S X02と重複しこれらよりも後出している。検出長42mで北西から南東方向に直線的にのび、北西側は調査区外へ続く。

S D 44～57 図版21 写真図版35

調査区北東部、屋敷地3の東側から南側で検出した溝である。S D50～52が北東から南西に方向をもつ他はいずれも北西から南西方向に直線的にのびる。規模は幅50cm程度、深さ10～15cm程度が多い。断面は浅い「U」字状を呈する。いずれも耕作に伴うものであろう。図化しする遺物は出土していない。

S D 58 図版21

S D53～57に隣接して検出した。これら溝と同一方向にのびている。南東側はS K20につながることから、水路として用いられたと考える。

S D 59～62 図版21 写真図版35

屋敷地3・4の北西側で検出した。北東から南西方向に直線的にのび、いずれも調査区内で完結する。S D60を除いて耕作に伴うものであろう。

S D 65 図版21 写真図版38

調査区北東部、屋敷地3の東側で検出した。北東から南西方向に直線的にのびる。北東側は調査区外へ続き、南西側はS K20に取り付く。S K20の南西側に取り付くS D66とは別の溝としているが、方向性や断面形状が同じであり、本来は同一の溝かもしれない。これら2本の溝の総検出長は約48mとなる。溝の断面形は「V」字状を呈し、深さは最大40cmを測る。遺物は土師器皿(71)、須恵器碗(72)・鉢(73)が

出土している。

S D78 図版22 写真図版36・37

調査区東半部で検出した。段差に沿って北西から南東方向に直線的にのびる。両端とも調査区内で完結し、検出長は約41mである。途中S D66・67・87・88が本溝に合流している。幅1~1.8m、深さは20~50cmを測る。遺物は主に西半部から出土し、須恵器小皿(82)・楕(83)、土師器羽釜(84)、中国産白磁蓋(85)が出土している。またS D67との交点付近で須恵器楕(80)が出土している。

S D79・80

S D80はS K15より北西へ約11mのび、消滅するが、前述したS D27はその延長上にあり、同一の溝となる可能性がある。幅1.9m、深さ35cmを測り、断面は浅い「U」字状を呈する。埋土は比較的粒子の細かい砂であり、溝底にはシルトが堆積していることから、漏水していたものと推定する。

S D79はS D80の南側に沿ってのびる小規模な溝である。

S D81~86 図版22

調査区東半部で検出した。S D78とその北側にある段差の間に所在し、S D78と同様に北西から南東方向に直線的にのびる。断面は浅い「U」字状を呈し、幅50cm前後、深さ10cm前後と小規模である。遺物はS D81から土師器小皿(86)・羽釜(87)、須恵器小皿(88)が、S D83から須恵器壺(89)が出土している。

S D87・88 図版22 写真図版38

調査区南東部の比較的遺構の疎らな箇所で検出した。南西から北東方向に直線的にのび、検出長は約33mで南西側は調査区内で消滅するが、南西側に設定した確認トレンチにおいて同方向にのびる溝を検出していることから、さらに10m以上続く可能性がある。北東側はS D78に合流する。S D87は断面形が「U」字または台形を呈し、深さ40cmを測る。S D88は深さ10~15cm程度で浅く細い。

S D88から土師器壺(90)、中国産青磁楕(91)が出土している。S D87からは図化しうる遺物は出土していない。

S D89

S D78と屋敷地5の中間付近で検出した。S D78、S D68・69とはほぼ平行し、北西から南東方向に直線的にのびる。検出長は約9mである。遺構の性格は不明である。図化しうる遺物は出土していない。

S D90~93 図版21 写真図版39

調査区東端付近で検出した。いずれも北東から南西方向に直線的にのびる。断面形はS D91が浅い皿状である他は「U」字または台形を呈する。図化しうる遺物は出土していないが、いずれも近世以降に属するものと推定する。

3. 弥生時代の遺構

概要

弥生時代の遺構は屋敷地5北東隅付近で検出したのみである。土器埋納坑1基、溝状遺構1基が隣接して所在する。

土器埋納坑

S X03 図版23 写真図版40

S D69東端付近で検出した。S D69と重複している。掘方は北西から南東方向に主軸をもち、平面は不整指円形を呈する。長径75cm、短径60cm、深さ45cmを測る。断面は逆台形を呈する。埋設された土器は弥生土器広口壺(109)であり、斜位に近い横倒し埋設である。さらにこの壺は上部を欠いた壺底部(110)を転用した蓋により口縁部を塞いでいる。

溝状遺構

S D94 図版24 写真図版40

S D69北側で検出した。他の遺構との重複は見られない。平面は「く」字状を呈し、南東から北東方向へゆるく屈曲している。このような方向をもつ溝は他に検出していない。規模は検出長2.9m、深さ25cm程度である。溝北端部で弥生土器直口壺(111)が横倒しの状態で出土している。

第3節 出土遺物

1. はじめに

朽木遺跡の調査から出土した遺物は合計でコンテナ30箱分に及ぶ。大半が中世前半の土器であるが、少量であるが中世後半や弥生土器なども含まれている。

中世前半の出土遺物には土器類の土師器小皿・皿・堀・羽釜・擂鉢・甕・銷壺型土器・須恵器皿・椀・鉢・甕、中国産白磁碗・青磁碗・青磁皿・青白磁合子・瓦類の平瓦片・石製品の石臼がある。また、弥生土器では無頸壺・直口壺・壺などがある。

なお、今回図示した遺物は遺構を中心に抽出しているが、包含層出土遺物のうち磁器については、図化可能なものをできる限り掲載した。

2. 中世以降の遺物

a. 屋敷地1

S B01 図版25 写真図版41・43

P16から土師器皿(1)、P11から土師器羽釜(2)が出土した。

S E01 図版25 写真図版41・42

S E01からは多くの遺物が出土した。土師器小皿(3)・甕(5・6)・羽釜(7・8)・須恵器小皿(4)・椀(9~14)・鉢(15・16)・甕(17)・中国産青白磁合子(18)・白磁碗(19・20)がある。

土師器では、小皿3は糸切り底のものである。甕5・6は体部が丸くなる個体で、5には外面に平行タキがわずかに観察されるが、6はハケ目によって消される。羽釜7・8は体部が直立気味で口縁部

がやや内傾する。7は外面に縦ハケのみがわずかに観察されるが、8では体部下半にわずかに平行タタキ痕跡が残される。内面はいずれも板ナデなどで器面調整する。須恵器では、小皿4が糸切り底のものである。碗9~14は高台がなく、体部も直線的に立ち上がるもので占められる。12のようにやや楕形に近いプロポーションをもつものもあるが全体に退化した形態である。鉢15・16は口縁部が断面三角形になるもののまだ拡張が進んでいないタイプである。壺17は頸部を丸く折り、口縁外面に面をもつもので、端部内面はナデによって上方につまむ。外面には平行タタキ痕跡が密に確認できる。中国産磁器では、青白磁合子18は小形のもので、白磁碗19・20は端反の碗である。

S K01 図版26・写真図版41・43

須恵器小皿(21・22)が出土した。いずれも糸切り底のものである。

S K05 図版26 写真図版43

土師器小皿(23)が出土した。底部が厚手で糸切り底のものである。体部は小さく斜めに立ち上がる。

S K06 図版26 写真図版41

須恵器小皿(24)が出土した。底部中央がやや盛りあがり、体部は低く斜めに湾曲しながら立ち上がる。

S K08 図版26 写真図版43

土師器壺(25)が出土した。頸部を「く」字に折り、口縁部を斜め上方に立ち上げ、上面外方に面を作る。

口縁端部はやや肥厚し下方につまんでおえる。外面には右上がりの平行タタキがわずかに観察される。

S D01 図版26 写真図版43

土師器皿(26)・壺(27)・羽釜(28)、須恵器碗(29)が出土した。十輪器では、皿26は手づくね技法のものである。口径13.3cmで、口縁部を1段ナデし、上方に小さくつまみ、底体部の境は丸く立ち上げている。壺27は口径27.7cmと大型のもので、口縁部を「く」字に折り、罐部を角張らせて面を持つ。外面下半には細かな平行タタキが観察される。羽釜28は外面に縦ハケ、内面は板ナデ調整を施す。須恵器碗29は高台がなく、体部が外開きみて直線的に立ち上がる。

S D02 図版26 写真図版43

須恵器壺(30)が出土した。頸部をやや長く、外反させて立ち上げ、断面が角張った口縁部を持つ。外面に面を持ち、端部を上方につまむ。体部外面にはやや右上がりの平行タタキが見られるが、頸部周辺では縱方向の平行タタキが観察される。

S D04 図版26 写真図版43

須恵器碗(31)が出土した。高台はなく、体部はややカーブしながら立ち上げ、口縁端部を角張らせておえる。

S D05 図版26 写真図版43

須恵器壺(32)が出土した。頸部を短く外反させて立ち上げ、断面が角張った口縁部を持つ。外面に面を持ち、罐部を上方に小さくつまむ。体部外面にはやや右上がり、頸部周辺には上下方向の平行タタキを施す。

S X01 図版26 写真図版41

S D02との交点から須恵器鉢(33)が出土した。口縁部は断面三角形で、上方に罐部をつまむ。体部は開き気味で直線的に立ち上がり、水挽き痕跡が顕著に観察された。また底部には糸切り痕跡が明瞭に残る。片口は大半が欠損するが端部が僅かに残される。

b. 屋敷地 2

S B02 図版26 写真図版43

P 4から須恵器椀(34)が出土した。高台はなく、体部は直線的に立ち上げ、口縁端部を丸くおえる。

S D24 図版26 写真図版41

土師器杯(35)が出土した。やや器高が低く、体部が直線的に開く個体である。

包含層 図版26 写真図版43

須恵器小皿(36)が出土した。底部がやや隆起する個体で、体部が短く斜めに立ち上がり、口縁部は丸くおえる。

c. 屋敷地 3

S B03 図版26 写真図版44

P 10から土師器羽釜(37)、P 35から土師器小皿(38)、P 36から土師器小皿(39)がそれぞれ出土した。38は糸切り底の皿、39は手づくね技法の皿である。

S K11 図版27 写真図版44

須恵器椀(45)が出土した。高台はなく、底体部の境が明瞭で器高のやや低い個体である。

S D37 図版27 写真図版44

土師器蜻蛉型土器(43)・羽釜(44)が出土した。蜻蛉型土器43は砲弾型の器形で、口縁部は内湾し丸くおえる。底部および口縁下に円形の穿孔をもつ。器壁は粘土経成形で外面は平行タタキの後、ナデによって器面を調整する。羽釜44は外面体部に平行タタキ痕跡、内面に板ナデ調整の痕跡を残す個体である。

S D38 図版27 写真図版44

須恵器椀(46)が出土した。底部が小さく、体部はカーブしながら開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く肥厚させておえる。

S D42 図版27 写真図版44

須恵器椀(41)、土師器羽釜(42)が出土した。須恵器椀41は高台がなく、体部下半がカーブしながら立ち上がる。土師器羽釜42は体部が直線的で、口縁部がやや内傾するものの全体的に直線的な印象の個体である。外面下半に縱方向のハケ目が観察される。

S D43 図版27 写真図版44

土師器小皿(40)が出土した。糸切り底のものである。器壁が薄い個体である。

d. 屋敷地 5

S B05 図版27 写真図版44・45・47

P 3から土師器小皿(47)、P 6から中国産青磁碗(48)、P 8から須恵器椀(49)の3点が出土した。

土師器小皿47は糸切り底のもので、体部は開き気味に小さく立ち上がる。中国産青磁碗48は同安窯系のもので片切彫りで草文を描く。須恵器椀49は高台のない個体で、体部は直線的に立ち上がる。

S B07 図版27 写真図版49

P 8から砾石(S 1)が出土した。

柱穴 図版27 写真図版44・45・47

単独の柱穴から多くの土器が出土している。S P01の須恵器甕(58)、S P02の土師器小皿(52)、S

P03の土師器羽釜(50・51)、S P04の土師器小皿(53・54)・須恵器小皿(55)・椀(56・57)、S P05の須恵器鉢(59)などがある。

S D69 図版27 写真図版45・47

須恵器椀(60)・中国産青白磁合子蓋(61)が出土した。須恵器椀60は高台がなく、開き気味で下半が屈曲する体部をもつ個体である。中国産青白磁合子蓋61は直径5.4cmと小型の製品で、口縁部及び内面が露胎となる製品である。

S D70 図版27 写真図版45

須恵器椀(64)が出土した。高台が退化し、斜め上方に開く。底部外面に花押と思われる墨書がある。

S D71 図版27 写真図版45・47

須恵器椀(62)・中国産青磁碗(63)が出土した。須恵器椀62は高台が退化した個体で、やや内傾する体部を持つ。中国産青磁碗63は同安窯系のもので内面に草花文を描く。

S E02 図版27 写真図版45

須恵器椀(65)・鉢(66)が出土した。椀65は高台がなく、腰部がカーブしながら立ち上がる個体である。鉢66は口縁部が断面三角形で、上方にやや伸ばす傾向がある。体部には水挽き痕跡が観察される。

S E04 図版27 写真図版45

土師器小皿(67)、須恵器小皿(68)が出土した。土師器小皿67は小さく立ち上がる体部をもつ。須恵器小皿68は糸切り底のもので口縁部を丸く肥厚させる。

e. その他の遺構

S B10 図版28 写真図版48

P10から須恵器椀(70)が出土した。高台はなく、体部はロクロによる凹凸が見られる。口縁部は丸く肥厚させておえる。

S K15 図版28 写真図版43

土師器皿(69)が出土した。口縁部の破片で全体の器形は知りえないが、体部は開き気味に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。

S K20 図版28 写真図版46・48

須恵器鉢(78)・壺(79)が出土した。鉢78は口縁部の破片である。口縁部は断面三角形で上下に少し拡張が見られる。壺79は頸部を丸く外反させ、口縁部上面を横ナデして、端部を上方につまむ。体部外面には平行タタキが密に施される。頸部周辺は縱方向に施されるが、ナデによって大半が消されている。肩部から胴部中位にかけては平行タタキ、下半は横方向を基本としながら、若干不定方向のものがみられ、底部は不定方向に平行タタキが施される。

S D65 図版28 写真図版46・48

土師器皿(71)、須恵器椀(72)・鉢(73)が出土した。土師器皿71は口縁部内外面を強く1段ナデする個体で、横ナデによる段が特徴的である。須恵器椀72は高台がなく、開き気味に立ち上がる体部をもつ。鉢73の体部下半はややカーブする。

S D66 図版28 写真図版46・48

須恵器小皿(74)・椀(75・76)・壺(77)が出土した。小皿74は糸切り底の製品である。体部中位に横ナデによる屈曲がみられる。椀75・76はどちらも高台がなく、75の体部は直線的に立ち上がるが、76の体

部下半はカーブしながら立ち上がり、上半は直線的である。壺77は底部の破片である。小さい輪高台をもつ。

S D 67 図版29 写真図版48・49

須恵器椀(80)・甕(81)が出土した。椀80は高台がなく、ナデによる屈曲が見られる個体である。ただし、この個体は S D 78との交点からの出土である。甕81は頸部をカーブしながら立ち上げ、口縁部側面に面を持つ個体である。体部外面には横方向の平行タタキの後、縱方向の平行タタキが部分的に観察される。ただし、タタキ痕跡は大半がナデ調整によって消されており部分的にしか観察されない。

S D 78 図版29 写真図版46・48

土師器羽釜(84)・須恵器小皿(82)・椀(83)・中国産白磁蓋(85)が出土した。土師器羽釜84は胴部が直線的に立ち上がる個体で、口縁部も内傾はするものの直線的である。口縁部は上端に面を持つ。外面は縱方向のハケ目、内面は横方向の板ナデ調整を施す。須恵器小皿82は短い体部が開き気味に立ち上がる小皿である。椀83は高台がなく、腰部が湾曲しながら外開きの体部につながる。中国産白磁蓋85は水滴などの蓋と思われる。つまみの有無は欠損するため不明である。

S D 81 図版29 写真図版46・47

土師器小皿(86)・羽釜(87)・須恵器小皿(88)が出土した。土師器小皿86は体部が短く立ち上がり、口縁部を丸くおえる個体である。羽釜87は胴部が直線的に上方に向けて立ち上がり、口縁部も内傾はするがやはり直線的である。内外面の調整は磨滅が著しく不明である。須恵器小皿88は短い体部が開き気味に立ち上がる。

S D 83 図版29 写真図版47

須恵器甕(89)が出土した。口縁部を湾曲させて外方に折り、端部に面を持つ。体部外面には平行タタキを施す。タタキの方向は横方向の後に縱方向となる。

S D 88 図版29 写真図版47

土師器壠(90)・中国産青磁碗(91)が出土した。土師器壠90は口縁端部を外方に折り、頸部を軽く「く」字に曲げる。外面には平行タタキが施される。中国産青磁碗91は外面に鏡運びが施され、葉肉は隆起した陽刻の表現となる。

S E 05 図版29 写真図版48

平瓦(92)が出土した。小破片で、側面の一部が残るもののみは残存しない。表面にはわずかにケズリ痕跡が観察されるが、炭素の吸着は安定せず、表面の磨滅が著しい。

S K 29 図版29 写真図版46

石臼(S 2)が出土した。下臼で、半分に折損する。分割線が部分的に残るが、表面の大半は剥離して残らない。

f. 包含層 図版30 写真図版49

包含層出土の土器は調査面積に比してあまり多くない。遺構面上層が水田開発などによって削平されたことが大きな原因と考えられる。ただし、包含層に関しては限定期に抽出したものを掲載した。

図化した遺物は須恵器椀(93・94)・鉢(96~98)・甕(95)、中国産青磁碗(99~101)・白磁碗(102)・青白磁合子身(103)である。このうち93~98については確認調査で屋敷地5周辺に設定したトレンチから出土したものである。

須恵器碗93・94は体部が直線的な個体で、94は高台がない。鉢96は口縁部が肥厚し、上方に伸ばし端部を丸くナデでおえる。97は上方への拡張ではなく、口縁部が肥厚し丸くなる。98は断面が薄く口縁部は上方に拡張される。99～101は中国産青磁碗であるが、99が同安窯系で、100・101が龍泉窯系の製品である。99は外面に縱方向の線彫りの文様が施され、内面は片切彫と櫛状工具の文様が描かれる。100・101は外面に蓮弁を描く蓮弁文碗である。100は陽刻され蓮弁の鏽が表現される。101は蓮弁を片刃彫で表現するが陽刻にはならない。白磁碗102はIV類碗で口縁部に玉縁を持つ。体部下半以下は露胎になる製品である。合子103は小型の製品で、口縁部に小さいかえりが付く。

g. 調査区北東部の包含層 図版30 写真図版49

土師器小皿(104)・擂鉢(105)、須恵器壺(106)、中国産青磁皿(107)・青磁碗(108)が出土した。

土師器小皿104は糸切り底の製品である。体部は短く立ち上がり、口縁部を丸くおえる。擂鉢105は体部が急激に立ち上がる個体で、口縁部は退化しており外面の突堤はナデによってその痕跡が僅かに観察されるのみである。内面は横方向の板ナデののち、浅く力のない卸目が縱方向に施される。須恵器壺106は底部が平底になり、口縁部は短く外反して立ち上がる。口縁部上端に面をもつ。外面には密な平行タタキが観察される。体部中位までは横方向のタタキののち、縱方向のタタキが施され、底部付近は不定方向のタタキが施される。内面はわずかにアテ具の凹凸が観察されるものの、おおむねナデ調整によって平滑にされるため、アテ具痕跡の詳細は明確にできない。中国産青磁皿107は同安窯系のもので、内面に草花文を描く。青磁碗108は龍泉窯系のもので底部片である。内面に記号化した文様が片切彫で描かれる。高台は小さな輪高台が腰部よりやや内側に貼り付けられる。

3. 弥生時代の遺物 (図版31・写真図版50)

弥生時代の土器は広口壺(109)・壺(110)・直口壺(111)の3点がある。いずれも弥生時代中期中頃のものである。広口壺109・壺110はS X03、直口壺111はS D94から出土した。109は「く」字状に外反する口縁部をもつ個体である。肩部が体部上方に上がり、底径が小さくなるプロボーションをもつ。口縁端部に刻み目文、外面に櫛書きによる直線文・波状文、肩部上半にはさらに斜格子文をはさんで上下に直線文と円形浮文による区画線を加飾する。さらに、下部にはヘラ磨きがわずかに観察される。玉津田中遺跡の無頸壺F 1 タイプに相当する個体である。110は109よりやや開き気味の体部となるものの109に近い器形と推測される。ただし底部片であるため詳細は不明である。

111は無花果形の体部に直立した口頭部が付く個体である。体部外面に縱ハケが施され、体部下半はヘラ磨き調整される。玉津田中遺跡⁽¹⁾ 直口壺H 1 に近似する個体である。これらの個体は玉津田中遺跡のⅢ-2期ないしⅢ-3期に相当する時期のものと考えられる。

註

1. 篠宮 正「弥生時代中期中頃から後半の土器(Ⅲ・Ⅳ期)」『玉津田中遺跡(第6分冊)』兵庫県教育委員会1995による。

第4章 遺跡の検討

第1節 出土遺物

1. 土器概要

以下では中世段階の主要な遺物について総括したい。また、周辺では玉津田中遺跡⁽¹⁾において良好な資料が得られ検討が行われている。このため同遺跡との比較を中心に検討を行うこととした。

土師器では皿・甕・羽釜・壺・擂鉢などが出土した。

小皿・皿は26の皿を除いてすべて回転台のもので、小皿が大半を占める。これに対して玉津田中遺跡では手づくね皿（小皿B・皿B）・回転台使用の皿の両方が含まれ、皿も多数見られるが、本遺跡ではこれらが欠如した状態となる。

煮炊具では土師器甕・羽釜・壺が出土した。甕は基本的に外面をハケ目調整する5・6と、平行タタキ成形のまま未調整の25・27の2種が存在する。後者のタイプはやがて撲丹型の壺に移行する形態である。ただし、本遺跡では撲丹型の壺はほとんど見られない。このためこの資料はこの時期までは存続しないようで、壺が登場する以前の段階にとどまると推定される。

羽釜は甕に比べると体部が直立気味になるものが多い。基本的にハケ目調整で最終仕上げをする28・84と平行タタキ痕跡を残したままの37・42・44・50・51の2種が存在する。全体に体部が球状に丸くなるプロポーションを持つが、84のみは体部が直立し筒状の器形を持つ。

壺は90の1点のみが出土した。包含層からの出土で14世紀代の製品である。擂鉢は105の1点がある。口縁部は退化し突帯はナデによって形変化した痕跡が残る。17世紀初頭の製品である。90および105はいずれも他の遺物より後出のものである。

須恵器は皿・碗・鉢・甕がある。碗は高台がなく、体部が直線的に立ち上がるるもので占められる。中には腹部に渦曲が見られ、渦形を意識したものも見られるが例外的である。口縁端部はやや丸く肥厚するものが多く、体部には雑な水挽き痕跡を顎著に残すものもある。口径15~16cm代のものが中心で、高台径は4~5cm前後である。

鉢は口縁が断面三角形のもので、わずかに肥厚し端部が上方に拡張する。16のように口縁端部をわずかに丸くおえるものもあるが、全体的には尖り気味におえるもので占められている。ただし、包含層出土遺物の中にやや口縁部が上下に拡張し端部を丸くおえる96・97がある。この2点は前者のものより後出と考えられ、14世紀代のものである。甕は総じて口縁部の作りが退化する。外面は平行タタキ痕跡が観察され、体部は半球状でやや長胴になる。型式的には玉津田中遺跡の甕Bのみが確認される。

中国産磁器は青磁碗・白磁碗・青白磁合子がある。青磁碗がやや多く、白磁は19・20のII類碗や102のIV類碗など少数である。このほか青白磁合子の身2点・蓋1点、白磁の蓋(85)1点が出土するなど日常品でないものも含まれた。

今回出土した遺物群について概観すると屋敷地1~5からの出土遺物は玉津田中遺跡のⅢ-1期ないしⅢ-2期の様相に近似する。また、今回の遺物群はほぼ同形式と考えられることから、玉津田中遺跡との比較で考えると、時期的には12世紀後半~13世紀初頭頃のものと考えられる。このため土器の様相からみると屋敷地1~5の存続期間は12世紀後半~13世紀初頭と考えられ、13世紀前半には集落は別の場所に移動、ないしは消滅したと推定される。

ただし、SD88に関しては土師器場90・中国青磁碗91などからすると、廃絶は13世紀代中頃以降に下る可能性がある。このほか包含層出土遺物であるが青磁碗99~101なども13~14世紀に下るもので、集落廃絶後も人為的な手がしばらくは周辺に及んでいた可能性がある。

一方、調査区の北東部で屢敷地3・4の東側には鉛溝や人為的な土坑などが検出されたが、この周辺からは17世紀初頭の土師器擂鉢105などが出土した。このためこの周辺では逆に中世後半に至って人為的な手が及んだことが推定される。

2. 土器組成

次に、朽木遺跡の土器組成について、やはり玉津田中遺跡など周辺の遺跡との比較を行いながら、若干の検討をおこないたい。まず、玉津田中遺跡と比べた場合、器種組成に相違する点がいくつか見られる。朽木遺跡では前述したように土師器は小皿が一定量あるものの皿がほとんどなく、杯・碗が欠落する。さらに、小皿は回転台使用のもので占められ、手づくりのものは見られない。須恵器では玉津田中遺跡の甕Aタイプ・片口鉢Bなどが欠落する。このほか、瓦器・瓦質土器の類についても欠落している。このよう玉津田中遺跡と比較すると、朽木遺跡の器種組成は単純であるといえる。

さらに、玉津田中遺跡の土器組成を詳しく見ると、「居館もしくは寺」とされる辻ヶ内地区では土師器が90%以上を占めるという特殊な出土傾向を持つが、一般集落である二ノ郷・徳政地区では須恵器61.2%、土師器32.2%、瓦器2.4%、陶磁器4.0%となる。また、玉津田中遺跡の南に隣接する居住遺跡⁽¹⁾での種別ごとの比率は土師器32.9%、須恵器64.3%、瓦器1.4%、陶磁器1.2%になるという。一方、朽木遺跡の今回の遺物は図示した個体数での推測であるが、須恵器6に対して土師器4前後の比率は実測個体数。磁器は実測個体数15点であるが、比率ではおそらく1%前後と推測される。)である。このように明石川中流域周辺の一般集落では、須恵器がやや優勢で土師器がこれに次ぎ、瓦器・陶磁器が少量含まれる組成となり、遺跡間を通じて近似していることがわかる。

さらに、明石の東に位置し、摂津に近い垂水・日向遺跡⁽³⁾(神戸市垂水区)をみてみたい。この遺跡は明石海峡に面した福田川の河口近くの沖積地に位置する遺跡である。土坑04は一括性の高い遺構であるが、玉津田中遺跡の中世Ⅲ期に並行すると考えられている。この土坑の種別ごとの比率は土師器41.3%・須恵器35.3%、瓦器22%、陶磁器1.3%、さらに同じくSK02では土師器72.3%、須恵器27.1%、瓦器0.47%、陶磁器0%となる。2つの土坑からは土師器の比率が高く、瓦器がわずかに含まれる点が指摘できる。これらは、先に見た明石川中流域とは異なり、より東側の摂津に近い様相といえるだろう。

この他に明石川中流域付近の遺跡では12世紀後半の居館である二ツ屋遺跡⁽⁴⁾がある。ここでも土師器小皿(手づくり皿・回転台使用の皿の両方)・杯や須恵器小皿・鉢・瓦器椀・中国白磁・陶器壺などが出土している。岡化遺物で見る限り土師器より須恵器がやや優勢で、瓦器が少量含まれ、玉津田中遺跡二の郷・徳政地区に近い様相をもっている。この遺跡は居館とされているが、土器様相から見る限り居館の主は在地色の濃い人物と推測される。

これらのことから、播磨東端の海岸部に立地する垂水・日向遺跡では摂津地域に近い様相を持つが、玉津田中遺跡など明石川中流域では須恵器が優勢となり、東播磨系須恵器の生産地を據る、播磨中枢部の様相が色濃い傾向が見られた。ただし、さらにやや上流に入った櫛谷では、朽木遺跡のように器種組成の単純化が進み、より広域の流通品の占める割合が低下する傾向がある。このように小地域の中でも器種組成に差異が認められるわけだが、播磨では朽木遺跡が回転台使用土師器で占められるように、

広域流通品や外来技術の要素を除去すると、須恵器工人によって製作された製品のみが残されることが確認されたのだ。自明のことではあるが須恵器系工人の技法が当地域の基層に大きく繁栄していることを改めて感じさせてくれる。

註

1. 中川 渉「辻ヶ内地区陪塚出土の土器について」「玉津田中遺跡（第4分冊）」兵庫県教育委員会1995
および中川 渉「中世の土器」「玉津田中遺跡（第6分冊）」兵庫県教育委員会1995、森田稔「東播磨系中世須恵器土器の成立と異同－神出古廟跡並びを中心にして－」「神戸市立博物館研究紀要」第3号1986などを参照した。
2. 谷正俊「居住遺跡における土器・陶磁器の亂成について」「居住遺跡発掘調査概要」神戸市教育委員会1984による。
3. 谷正俊・斎木敏「垂水・日向遺跡」神戸市教育委員会1992による。
4. 前田佐久「二ツ屋遺跡」「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1995による。

第2節 検出遺構

1. 弥生時代の遺構

今回の調査では弥生時代中期の土器埋納坑と溝状遺構を検出したのみである。その他に調査区内で弥生時代の遺構は確認できず、遺物の出土もみられない。

土器埋納坑はいわゆる土器棺墓と考えられる。また溝状遺構内からは残存状態のよい直口壺が出上していることから、この溝を周溝墓の残穴と考えることもできよう。2つの遺構は近接しており、墓域を形成するのかもしれないが、調査区内ではその母集落の痕跡は認められなかった。

調査区周辺では、北側から北東側の段丘上において、弥生時代中期を主体とする遺構および包含層が広い範囲で確認されている。第15次調査ではS X03に類似すると思われる土器埋納遺構が検出されている。また第13次調査Ⅲ・Ⅳ区では弥生時代中期の円形周溝墓と推定される溝や木棺墓が検出されている。しかしここでは隣接して竪穴住居も検出しており、集落に隣接して墓域が形成される状況は本調査区とは異なる。本調査区では擾乱の影響が大きい北半部に当該期の遺構が所在する可能性はあるものの、現状では遺構は疎らである。

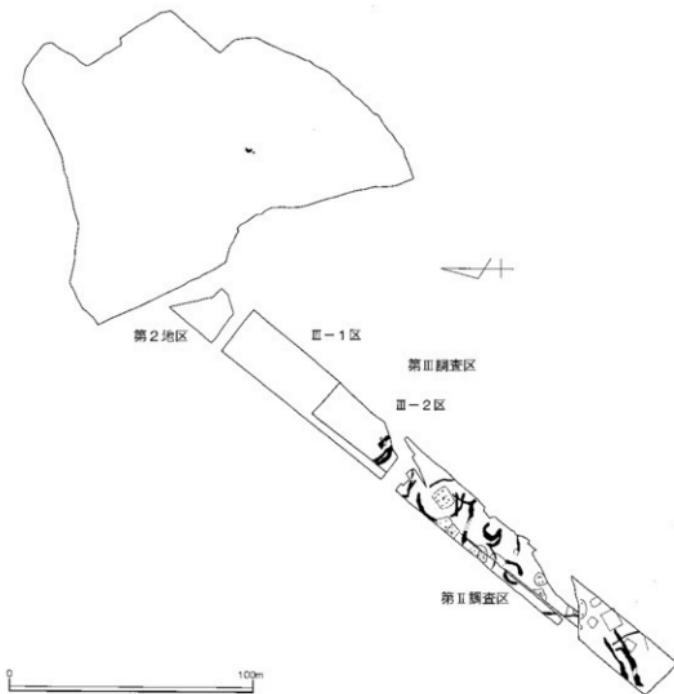
本調査区南側に目をむけると、小肩状地上に立地する平成6・7年度調査区で弥生時代中期～後期の竪穴住居などの遺構が分布している。ここで主体をなすのは弥生時代後期であり、古墳時代中期以降まで遺構が継続している。ここでは本調査区で検出した中期の遺構は少数であり、本調査区に隣接した平成10年度調査の第2地区では当該期の遺構は検出されていないことから、本調査区と連続性は認められない。

以上より、本調査区検出の遺構は調査区北側に展開する中期の集落に関連し、その縁辺部にあたると考える。

2. 中世の遺構

本調査区の主体となる時期であり、大半の遺構がこの時期に該当する。

本調査区北東側に所在する第14・15次調査区では当該期の遺構は検出されていない。また第12次調査ではわずかに土坑を検出したのみであり、本調査区北端付近が北限と推定される。ただし13次調査において平安時代後期の掘立柱建物が検出され、東側には広がりをもつ可能性を指摘したい。また西側は櫛谷川の氾濫原となっていることから、やはり本調査区西端が遺跡の西限と判断する。調査区内では東半部のS D67、S D65・66以東で当該時期の遺構が検出されないことから、これらの溝が東限になると考へる。



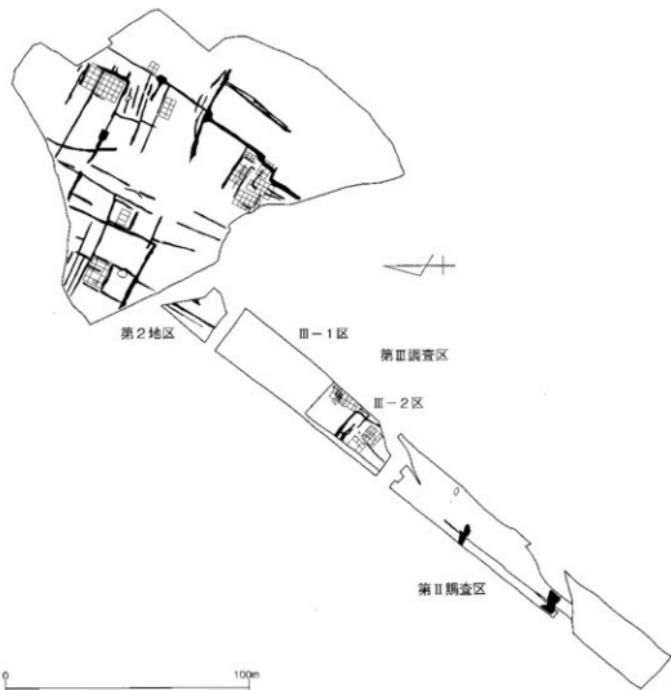
第8図 弥生時代の遺構

南側については、南西側の平成10年度調査区第2地区において、S D06の延長上に同規模の溝が検出され、同一の溝となるならば、遺構の広がりが少なくとも同地区まであることになる。

中世の遺構が確認されるのは平成6・7年度調査区の第III調査区であり、中央より南半に集中している。ここでは溝によって区画された建物、池状遺構などの他、建物を構成しない柱穴が多く検出されている。平成7年度第I・II調査区では、中世の遺構はわずかに土坑が1基検出されたのみであり、第III調査区との境界となる里道付近が南限となるのであろう。遺構の分布が第III調査区で終結し、地割も遺構の分布と一致するため、ここを中世の遺構群の南限とすることが妥当であろう。第II調査区で検出された建物の方向はN45~48°Eを示すものが多い。平成6年度第III調査区は南半部に当該期の遺構が集中し北側の平成7年度第III調査区の遺構と一緒になるようである。遺構の詳細は不明であるが、溝、土坑、井戸、池状遺構などが検出されている。井戸は曲物を積み上げたもので、SE02と類似した井戸と思われる。また池状遺構は溝の取り付きや遺構内に木製品が投入されていることなどSK20と共通性が指摘できる。したがって第III調査区に営まれた集落は本調査区と関連性が強いと考える。

3. 柄木遺跡の地割

調査区内で検出した遺構は主に溝である。溝の多くは北東-南西方向かこれに直交する方向をもち、



第9図 中世の遺構

長方形の区画が形成される。この区画の規模は概ね北西—南東方向で12m前後、北東—南西方向で18m前後であり、屋敷地1・2付近では特に整然とした区画が認められる。この区画内に掘立柱建物などの遺構が溝と同じ方向をもって存在し、中世集落の景観が復元される。

溝の中には鐵溝なども多く含まれるが、区画を構成する主な溝について若干検討してみたい。S D01は屋敷地1の南辺を区画するとともに、一帯の溝の中では最も規模が大きく基幹的な水路であると思われる。同様に屋敷地3の南・東辺を区画するS D37も北西方向に20m以上延び、S K15を経てS D80、さらにS D27まで続く可能性がある。S D78は丘陵裾に位置し、S D66・67・87・88と合流し、谷部からの水を排水する基幹的水路の性格を持つと思われるが、西側にあるS D01のはば延長上に位置することから、土地区画の基幹ともなる溝であろう。屋敷地5の東辺を区画するS D67は一連の区画に合致する溝であり、S D37とほぼ南北に並ぶ。また南側丘陵からの水をS D78へ排水する性格も併せ持つと考える。S D65・66は規模こそ小さいがしっかり掘り込まれた溝であり、傾斜変換点付近に位置することから、東側丘陵から屋敷地3・4方向への流水をさえぎるとともに、S K20によって貯水し利用していたと思われる。またS D87・88とともに溝以東に中世の遺構がほとんど存在しないことから、集落の東を限る性格も持っていたと考える。このうちS D88は13世紀後半まで存続していた。なおS D65・66、S D87・88は一連の区画とは合致しないが、S D78とともにほ場整備前の水田畦畔にその痕跡を残して



第10図 櫛木遺跡の地割

いた。

櫛谷川流域は明石川流域で見られるような整然とした条里制地割の痕跡は認められず、不定形な形状の水田が広がっている。これは流域が丘陵と河川に挟まれた狭い地形であり、川沿いの平野部に氾濫原が広がるためと思われる。今回の調査では段丘上で中世の小規模な区画を検出することができた。そしてその区画の一部は現代の水田畦畔にその痕跡をとどめていた。さらに調査区一帯を巨視的に見てみると、如意寺の所在する谷の開口部付近の櫛谷町菅野字東下から字上井にかけて、不明瞭ながらも北東—南西方向に長軸をもつ短冊状の地割が認められる。その範囲は、西側は櫛谷川の氾濫原、北側と東側は丘陵、南側は小扇状地に規制され、さらに段丘地形の制約もあって整然とはいがたいが、は場整備前の畦畔の形状からは、少なくとも南北約340m、東西150mの範囲に東西方向に雁行に3列その地割を見

取ることが可能である。1列は南北に2区画に分けられ、計6区画を確認することができる(①区～⑥区)。1区画は東西50m前後、南北80m前後を測り、地割の内部は、若干の余剰が生じるもの、小区画が南北に4程度、東西に3程度認められる。

①、②区については、発掘調査が行われていないため、遺構の状況は不明であるが、如意寺の所在する谷の開口部であり、①区東側にあたる第13次調査Ⅲ・Ⅳ区では平安時代後期の掘立柱建物や溝が検出されている。

今回の発掘調査では、③、④、⑤区の大部分を対象とした。③、④区の境界付近には段差があり、SD 78がその境界となる。さらに③区を南北に2分する位置にSD 37がある。③、⑤区には1区画の屋敷地(屋敷地1・3)と半区画の屋敷地(屋敷地2・4)が所在している。④区は2区画分の広さをもつ屋敷地5があり、その性格は他の屋敷地と異なるかもしれない。

③・④区と⑤区の間は2本の溝が北東～南西方向に平行して延び、幅約5m程度の区画の空白帯が存在する。この部分は段丘崖にあたり土地改良前の水田もこの空白帯沿いに段差が見られる。さらにこの部分を南北に延長すると、ほぼ直線的に段丘崖の裾や氾濫原沿いに延びている。この空白帯は居住域や耕作地として利用し難く、長く帯状に続くことから、道路と想定することも可能であろう。

③・④区と⑤区の地割は、東西方向はほぼ同一であるが、南北方向に若干のずれが認められる。これは地形の制約か、開発時期差があるためと思われる。⑤、⑥区間は東西方向の小河川により分断され、地形の制約から地割の方向が若干異なっている。⑥区は平成6・7年度第Ⅲ調査区が該当する。

4. 栃木遺跡と如意寺

調査で検出した遺構の大半は13世紀前後の比較的短い期間のものである。検出した遺構について、調査区北東の谷に所在する天台宗寺院である如意寺と関係を考えてみたい。

如意寺は櫛谷川左岸の河谷平野から東方へのびる支谷に位置し、伊川流域に所在する太山寺とともに旧明石郡内を代表する天台宗寺院である。寺院は法道仙人開基の伝承をもち、縁起などでも創建は古代にさかのほると記されているが、伽藍配置や現存する阿弥陀堂の建築様式などから創建時期は12世紀後



第11図 如意寺と調査区周辺

半以降と推定される。神戸市教委が行った如意寺塔頭址の調査においても検出された古い遺構は12世紀末～13世紀初頭であり、これをさかのぼる成果は得られていない。遺構と建築の時期がほぼ一致することから、伽藍が整備されたのは12世紀後半以降とするのが妥当であろう。またこの時期は本発掘調査で検出した一連の遺構とほぼ同時期であり、寺と遺跡の距離も近いことから、両者はなんらかの関係をもつものと考える。

12世紀後半～13世紀の寺院の動向を比較的文献資料の残る太山寺を見てみたい。太山寺では文治3(1187)年頃原景時より庄内の荒野5町を講堂修造料田として寄進されている。この後も荒野の寄進が数度記録され、その土地を開発し地利を宗教活動や寺院の運営・維持にあてている。このような動きは太山寺に限られたものではなく、各地でみられるもので、如意寺も同様であったものと推定する。具体的な如意寺による土地開発を示す文献は存在していないが、伽藍が整備され、寺院の体制が確立されるとともに、寺院の維持のために門前にあたる権谷川沿いの開発を行ったのであろうか。貞応3(1224)年延暦寺政所下文案によれば、如意寺の寺領は東西一六町、南北一二町あったとされる。

一方、13世紀における土地開発は、周辺との軋轢が発生している。太山寺では周辺住民や武士の所従などの寺内への乱入狼藉が繰り返し、弘安8(1285)年に本堂などが炎上している。如意寺においても貞応2(1223)年に国役免除と国衙使入部停止の播磨國司序宣を、貞応3(1224)年正月に本寺である延暦寺政所から寺領内の狼藉防止の下文を得ており、太山寺と同様の緊張が生じていたとみられる。このような周囲との軋轢が遺跡の存続期間を短くする原因になったのかもしれない。

出土遺物は13世紀以降の遺物も出土しているが、多くない。しかし12世紀後半～13世紀に開発された土地は耕作地として利用され、その地割は踏襲され、中世後半から近世にかけてより東側の丘陵裾部まで土地開発が及んでいったようである。



第12図 如意寺

参考文献

- 兵庫県史編集委員会編「兵庫県史第2巻」 兵庫県 1975年
「如意寺」「昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 1985年
兵庫県史編集委員会編「太山寺文書」「兵庫県史史料編中巻2」 兵庫県 1987年
「桜木道跡」「昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 1985年
「如意寺塔頭址」「昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報」 年神戸市教育委員会 1988年
「桜木道跡」「昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 1990年
「桜木道跡」「第7次調査」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 1994年
「桜木道跡」「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 1997年
「桜木道跡」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 1998年
「桜木道跡」「第12次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 1999年
「桜木道跡」「第13次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 2000年
「桜木道跡」「第14次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 2001年
「桜木道跡」「第15次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 2001年

第1表 遺物觀察表（1）

土 器

報告No	種 漢	器 標	出土地区	出土遺構	口 径	器 高	底 径	残 存	考	色 調
1	土輪器	小皿	崖敷地 I	SB01 P16	7.90	1.40	4.35	9×10	クロロ底形。体部は外開き気味に立ち上がり、口縁は丸く見える。	内) 10YR8/2 外) 10YR8/5
2	土輪器	羽釜	崖敷地 I	SB01 P11	(27.90)	(7.00)	—	縫片	口縁は内側へながら立ち上がり、縫跡を大きく見える。内面に横ハケ痕跡が観察できる。縫跡は口縁下3.5cmに貼り付ける。	内) 10YR8/4 外) 5YR6/6
3	土輪器	小皿	崖敷地 I	SE01	7.60	1.60	5.25	完形	クロロ底形。手の平の形。体部は外開き気味で口縁部をよく見える。	内) 7.5YR7/6 外) 10YR8/1
4	須志器	小皿	崖敷地 I	SE01	8.45	1.40	5.05	3×5	クロロ底形。体部はやさしく斜め上方に立ち上げ、口縁部を大きく見える。	内) SYR7-3.5YR8/1 外) 5YR6-2.5YR8/1
5	土輪器	甕	崖敷地 I	SE01	(26.90)	(5.10)	—	1×5	口縁部は「く」字になり、縫跡を角ばっておる。外面斜行タキ。	内外) 2.5Y7/3
6	土輪器	甕	崖敷地 I	SE01	(27.20)	(11.10)	—	1×6	外方向に縱方向のハケ跡が僅かに観察される。口縁部は近く「く」字に折れ、諸部は内なる。	内外) 10YR7/3
7	土輪器	羽釜	崖敷地 I	SE01	(31.20)	(9.70)	—	1×10	外方向に新方向の平行タキが僅かに観察される。内面は板ナゲ網目。	内) 10YR5/2 外) 10YR7/2
8	土輪器	羽釜	崖敷地 I	SE01	(23.00)	(14.70)	—	1×6	外方向は平行タキの後、縫ハケ、内面は板ナゲ網目。縫跡は口縁下3.8cmに貼り付ける。	内) 10YR5/2-5/2 外) 10YR8/2-5/1
9	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	(16.20)	(4.80)	5.70	1×4	クロロ底形。体部はやや開き気味に立ち上がり、口縫部をやや角ばせておる。東ね焼痕跡。	内外) NS/
10	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	(16.00)	(4.80)	6.00	1×3	クロロ底形。体部は外開きし、口縫部は角ばらせておる。	内外) 5Y7/1
11	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	(16.30)	(5.15)	(6.50)	1×3	クロロ底形。体部は直線的に立ち上げ、L縫跡を多く見る。	内外) NS/
12	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	(15.30)	(4.40)	6.70	1×4	クロロ底形。体部は内側しながら立ち上がり、口縫部をよく見える。内外面に墨付有。	内外) 2.5Y8/1
13	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	(16.20)	(5.15)	(5.25)	1×8	クロロ底形。体部は外開きに立ち上げ口縫部を小さく歪曲状にしておる。	内外) 5Y 8/1
14	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	17.20	4.85	6.10	1×3	クロロ底形。体部はやや開き気味に立ち上がり、口縫部をよく見える。東ね焼痕跡。	内外) 5Y8/1-7/1
15	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	28.35	10.90	10.40	1×2	クロロ底形。口縫部は前面三形で上下に試張りがあるが、肥厚の度合には小さい。底盤承取り後、低い輪高台に貼り付ける。	内外) NS/
16	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	(32.70)	(13.20)	10.30	1×2	クロロ底形。口縫部は前面三形で上下に少し拡張するが肥厚の度合は大きい。底盤承取り後、低い輪高台に貼り付ける。	内) N6/-5/ 外) N7/
17	須志器	甕	崖敷地 I	SE01	(31.10)	(9.80)	—	1×8	外表面平行タキ（横方向の後、縦方向）。口縫部をかるく凹頭状にする。	内外) NS/-4/
18	青白磁	合子舟	崖敷地 I	SE01	(4.30)	1.85	(3.60)	1×3	重ねけのかり付き。外面上には窓舟を描く。底盤承取り後は露舟。	10YV1/ 10GVS1
19	白磁	碗	崖敷地 I	SE01	(15.70)	(3.60)	—	縫片	厚手の器壁で、口縫部跡を外側に押す。生地の鉄分の加減で緑色に発色し、色調が緑色になる。	5Y8/2/ 5Y8/3 7.5Y6/3
20	白磁	碗	崖敷地 I	SE01	(17.00)	(4.90)	—	1×8	第1類白陶器。体部は内開き気味に立ち上がり、下端は基脚になる。	5Y8/1/ 7.5Y7/1
21	須志器	小皿	崖敷地 I	SK01	(8.10)	(1.55)	(4.90)	1×4	クロロ底形。体部は外開き気味に立ち上がる。	内外) NS/
22	須志器	小皿	崖敷地 I	SK01	8.10	1.45	5.40	完形	クロロ底形。体部は外開き気味に立ち上がる。	内外) NS/
23	土輪器	小皿	崖敷地 I	SK05	(6.90)	1.30	(4.30)	1×2	クロロ底形。内外面にクロロナデし、体部は細く開き気味に立ち上がる。	内) 5YR7/6 外) 10YR8/2-5YR7/6
24	須志器	小皿	崖敷地 I	SK06	(8.40)	(1.40)	(5.20)	3×4	クロロ底形。体部は外開き気味に立ち上がる。	内) NS/ 外) N4/
25	土輪器	甕	崖敷地 I	SK08	(25.60)	(11.85)	—	1×2	外表面平行タキ（上半は平行、下半は右上がり）口縫部は上端に縫跡を持つ。	内外) 2.5Y6/2
26	土輪器	甕	崖敷地 I	SD01	(13.30)	2.90	—	1×3	チバノイ底形。内面及び外側体部上半を模ナゲ。底部は丸足。	内) 10YR5/2-7.5YR8/3 外) 10YR8/2
27	土輪器	甕	崖敷地 I	SD01	(27.70)	(9.00)	—	1×3	外削、右上がりの平行タキ。薄い器壁が特徴。	内) 2.5Y5/5-7.5YR7/3 外) 10YR7/2-5/2
28	土輪器	羽釜	崖敷地 I	SD01	(29.40)	(8.99)	—	1×6	外側体部に横ハケ、内面は板ナゲ網目。口縫T3.0cm=2.5cmを貼り付ける。口縫部が体部に比較して厚軸となる。	内外) 2.5YS/2
29	須志器	甕	崖敷地 I	SD01	(16.60)	(4.85)	(6.80)	1×2	クロロ底形。体部は直線的に立ち上がり、口縫部は丸く見える。東ね焼痕跡。	内) 5Y7/1/ 外) N7/
30	須志器	甕	崖敷地 I	SD02	(26.40)	(6.95)	—	1×4	外側口縫部周辺に平行タキ（横方向の後、縦方向）。口縫部は外反し、外側に縫跡を持つ。	内外) 7.5Y7/1-6/1
31	須志器	甕	崖敷地 I	SD04	(16.00)	(4.70)	(5.00)	1×2	クロロ底形。体部はやや外開き、口縫部は角ばらせておる。	内外) NS/

第1表 遺物観察表（2）

報告No.	種別	符號	出土地区	出土標識	口径	器高	底径	残存	備考	色調
32	須恵器	裏	屋敷地1	SD05 (31.30)	(7.20)	—	1 / 7	口縁部を外反させ、外縁に面を持つ。口縁部の内面上面を凹状にナデる。外縁に平行テキサキが観察される。	内) 10YR6/2・7/2 外) 2.5YR6/6・5Y2/1	
33	須恵器	縁	屋敷地1	SK01・SD02	29.10	10.80	9.20	2 / 3	口縁部は断面三角形、体部は直線的に開くもので、ロクロ痕跡が観察。	内) N7/
34	須恵器	縁	屋敷地2	SB02 P4 (16.30)	4.90	6.60	3 / 4	ロクロ成形、体部は腰が少し後退するが直線的に立ち上がる。口縁部は丸くおえる。	内) NS/・7/	
35	土師器	杯	屋敷地2	SD24	14.80	3.60	7.50	2 / 3	ロクロ成形、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおえる。	内) 10YR6/3
36	須恵器	小皿	屋敷地2	匂合層	(7.90)	1.40	(5.30)	3 / 4	ロクロ成形、体部は僅に外方に立ち上がり、口縁部は丸く見える。	内) N7/・6/
37	土師器	羽釜	屋敷地3	SB03 P10 (22.30)	(6.20)	—	細片	外縁底部に平行テキサキ、内面接合部調整。口縁部下3.5cmに小さめの跡を貼り付ける。口縁部は内側消す。	内) 10YR7/3	
38	土師器	小皿	屋敷地3	SB03 P25 (7.20)	(0.90)	(4.90)	1 / 4	ロクロ成形、低い器高の側作で、体部は斜めに立ち上がり、口縁部は丸くおえる。	内) 2.5YR6/2	
39	土師器	小皿	屋敷地3	SB03 P36	7.80	1.30	6.30	完形	手びね成形。体部は僅に外側引き気味に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) 5YR7/8
40	土師器	小皿	屋敷地3	SD43	7.30	1.10	5.40	2 / 3	ロクロ成形、体部は丸く窪く立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) 7.5YR7H・7/6
41	須恵器	縁	屋敷地3	SD42 (14.90)	(4.15)	7.00	1 / 2	ロクロ成形、体部は斜めに窪き気味に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) 7.5YR8/1	
42	土師器	羽釜	屋敷地3	SD12 (20.00)	(8.60)	—	1 / 2	外縁を縱方向の平行テキサキ、口縁部は内側して口縁部に面を持つ。	内) 10YR6/2・6/2 外) 7.5YR7/0・10YR6/2	
43	土師器	精進豆・羽	屋敷地3	SD37 (11.20)	(21.95)	(8.80)	1 / 3	外縁を縦方向の平行テキサキ、内面底面に横方向に凹凸を設けた。口縁部下及び底部に一箇所づつの孔跡。	内) 7.5YR8/4	
44	土師器	羽釜	屋敷地3	SD37 (20.40)	(9.50)	—	1 / 4	外縁を平行テキサキ、内面底ナゲ調整。体部は丸く立ち上がり、縁は1段階下3.5cmに貼り付ける。	内) 10YR7/3 外) 10YR6/2・2/1	
45	須恵器	縁	屋敷地3	SK11	15.10	4.30	7.70	完形	ロクロ成形。体部は直線的に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) N4/ 外) 5Y7/1
46	須恵器	縁	屋敷地3	SD38 (16.80)	(5.00)	(5.90)	1 / 3	ロクロ成形。体部は外側引き気味に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) 5Y7/1	
47	土師器	小皿	屋敷地5	SB05 P9	8.15	1.40	4.90	完形	ロクロ成形。体部は斜めに立ち上がり口縁部を丸くおえる。	内) 2.5YR2/7.5YR6/6
48	青磁	碗	屋敷地5	SB05 P6 (16.80)	(5.15)	—	1 / 8	内面側面露光元文、外面滑稽文。丸く内済気味の体部、口縁部は小さく丸くおえる。底部下半分には露地。	7.5Y7/1 縁) 7.5Y7/2	
49	須恵器	縁	屋敷地5	SB05 P6	16.20	4.30	7.05	2 / 3	ロクロ成形。体部は斜めに立ち上がり口縁部を丸くおえる。ロクロ似跡が観察。	内) N7/・6/
50	土師器	羽釜	屋敷地5	SP03 (21.90)	(9.15)	—	1 / 4	外縁を平行テキサキ、全体に底部のため調整は不規則。底部の体部に、縁は口縁下2.5cmに貼り付け。	内) 7.5YR7/6 外) 10YR6/2	
51	土師器	羽釜	屋敷地5	SP03 (20.60)	(6.75)	—	1 / 8	外縁を上り平行テキサキ。底部のため調整はやや長脚の体部に、縁は縫下2.5cmに貼り付け。底部に縁テキサキが残る。	内) 5YR7/6	
52	土師器	小皿	屋敷地5	SP02	7.65	1.75	4.65	7 / 8	ロクロ成形。体部は斜めに立ち上がり口縁部を丸くおえる。	内) 2.5YR2/7/3
53	土師器	小皿	屋敷地5	SP04 (7.30)	1.10	4.45	1 / 2	ロクロ成形。体部は斜めに立ち上がり口縁部を丸くおえる。	内) 10YR6/2・7/2 外) 2.5YR2/7/2	
54	土師器	小皿	屋敷地5	SP04	7.70	1.35	5.30	1 / 2	ロクロ成形。体部は済美しながら立ち立てる。	内) 5YR7/6・10YR6/2
55	須恵器	小皿	屋敷地5	SP04 (8.10)	(1.40)	(5.80)	完形	ロクロ成形。体部は斜めに立ちとり口縁部を丸くおえる。	内) N4/ 外) N4/	
56	須恵器	縁	屋敷地5	SP04 (15.20)	(3.50)	—	4 / 5	ロクロ成形。薄い体部でロクロ痕跡が観察。	内) 2.5YR6/1・6/1 外) N4/・5YR2/3	
57	須恵器	縁	屋敷地5	SP04 (15.40)	(4.15)	(4.60)	1 / 6	ロクロ成形。体部は斜め上方に立ち上げ、口縁部は丸く小さくおえる。	内) N7/	
58	須恵器	裏	屋敷地5	SP01 (20.90)	(5.00)	—	1 / 4	外縁を上り平行テキサキの後、横ナダ。口縁部は通過をつまみ上げ、内面に凹状にナデする。	内) N4/ 外) N4/	
59	須恵器	縁	屋敷地5	SP05 (26.60)	(11.10)	(7.60)	1 / 4	口縁部は断面三角形で、上に少し延びる。	内) N6/・5/	
60	須恵器	縁	屋敷地5	SD69	15.95	4.80	3.65	2 / 3	ロクロ成形。内外面のロクロ痕跡が観察。口縁部はやや肥厚させる。	内) N6/・5/
61	青白磁	合子壺	屋敷地5	SD69 (5.40)	(1.25)	—	1 / 4	唇厚せ成形。内面下半から口縁部が露地になら。天井部に花紋を押す。	5 Y7/1 内) 10Y7/1	

第1表 遺物觀察表（3）

報告番号	種別	器種	出土地区	出土遺物	上口径	高さ	底径	残存	備考	色調
62	須恵器	碗	尾張地5	SD71	15.60	5.30	6.40	2/3	ロクロ成形。体部は両面しながら立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) SY7/1 外) N6/
63	青磁	碗	尾張地5	SD71	(15.10)	(4.65)	—	1/4	内外面に轉文を描ぐ。	SY7/1 外) 10Y7/1
64	須恵器	碗	尾張地5	SD79 - SD87	(15.40)	4.40	6.20	1/4	ロクロ成形。体部は斜め上方に開き、口縁部を丸くおくる。外面底部に花押模の墨書き。口縁部並ねある痕跡。	内) NS/
65	須恵器	碗	尾張地5	SE02	15.25	4.50	7.25	完形	ロクロ成形。体部は丸く内湾しながら立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) 5Y8/1 - 7/1
66	須恵器	鉢	尾張地5	SP02	(27.20)	(7.65)	—	1/8	口縁部断面三角形で底部を上方に尖らせており、内面に付着物あり。	内) 7.5Y7/1 外) N8/
67	土器類	小豆	尾張地5	SE04	7.40	1.10	5.65	完形	ロクロ成形。体部は豊く開きながら立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) 10Y7/2 外) 2.5Y8/2
68	須恵器	小豆	尾張地5	SE04	7.95	1.55	5.30	完形	ロクロ成形。体部は外開きに立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) NS/
69	土器類	豆	その他	SK15	(13.30)	(2.30)	(9.50)	1/4	ロクロ成形。体部は直線的に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) 2.5Y8/1 - 8/2
70	須恵器	椀	その他	SB10 P10	(15.80)	(4.90)	(6.20)	1/3	ロクロ成形。体部はやや直線的に立ち上がり、口縁部を肥厚させ、縁部を丸くおえる。	内) NS/
71	土器類	豆	その他	SD05	(14.10)	(2.90)	—	1/8	手ぐく成形。内面および外側体部上部を横ナザする。	内) 2.5Y8/2
72	須恵器	椀	その他	SD05	(16.10)	4.65	(6.60)	1/2	ロクロ成形。体部はやや丸く外開きし、口縁部を丸くおえる。	内) NS/
73	須恵器	鉢	その他	SD05	(28.50)	(4.90)	—	1/8	断面二角形の口縁部で、底張によって少し肥厚する。	内) NS/ 外) N6/-3/
74	須恵器	小豆	尾張地4	SD66	(8.40)	1.55	4.95	1/2	ロクロ成形。体部中位に屈曲点があり、口縁部を丸くおえる。	内) 10Y7/1
75	須恵器	碗	尾張地4	SD66	14.90	(4.60)	(6.20)	1/2	ロクロ成形。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部を丸くおる。底体部の器壁が厚くなる。	内) NS/
76	須恵器	椀	尾張地4	SD66	(14.70)	(4.60)	(5.50)	1/3	ロクロ成形。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部を丸くおる。底体部の器壁が厚くなる。	内) NS/ - 7.5Y7/1
77	須恵器	豆	尾張地4	SD66	—	(8.85)	(10.80)	1/3	底面下部の偏体一部は赤切り後、輪廻台を貼り付ける。	内) 5Y7/1 外) 5Y6/1 - 5/1
78	須恵器	鉢	その他	SK20	(33.00)	(4.10)	—	細片	口縁部は上下に弧張する。口縁部は基本的には直向三角形である。	内) NS/
79	須恵器	壺	その他	SK20	(25.70)	(42.20)	(40.40)	1/3	外輪模方向の平行タキ、内面はナゲで平滑に磨き、口部は「ノ」字に折り、外側に凹。口縁部上部に凹縫状の溝みをもつ。	内) NS/ 外) NS/ - 6/
80	須恵器	椀	その他	SD67 - SD79(文点)	(15.65)	4.20	6.30	2/5	ロクロ成形。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) NS/ 外) NS/ - 7.5Y7/1
81	須恵器	壺	その他	SD67	(24.30)	(8.80)	—	1/4	外輪平行タキ(壺の内の方に傾方向)平行タキ。口縁部内面にヘラ跡あり。	内) NS/ - 6/
82	須恵器	小豆	その他	SD78	(8.10)	1.50	(5.30)	3/5	ロクロ成形。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) 2.5Y8/2 - 7/1 外) 2.5Y8/1 - 7.5Y7/1
83	須恵器	椀	その他	SD78	(15.15)	4.60	6.30	2/3	ロクロ成形。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部を丸くおえる。	内) NS/ - 6/
84	土器類	羽釜	その他	SD78	(24.30)	(14.35)	—	1/2	外輪は縦方向のハサキ網繩、内面は横方向で一組一小字形の仮ナガ網繩。口縁部は内溝するが、作部は直立気味。	内) 10Y7/3 外) 2.5Y8/6
85	白磁	盃	その他	SD78	(3.10)	(1.30)	—	1/2	天井部外側に圓形化した坪花文を描く。内面にかえりが付く。	5Y7/1 外) 2.5Y7/1
86	土器類	小豆	その他	SD81	(7.90)	1.00	6.25	1/8	ロクロ成形。底体部の境が明瞭で、体部は開き気味。直立的に立ち上がる。	内) 2.5Y8/2 - 5Y8/8
87	土器類	羽釜	その他	SD81	(30.20)	(8.10)	—	1/6	口縁部は内済、外側下3cmに網を貼り付ける。口縁部が底面に比べ著しく肥厚する。	内) 10Y8/2 外) 7.5W6/3
88	須恵器	小豆	その他	SD81	(8.10)	1.50	(5.50)	1/3	ロクロ成形。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部を丸くおる。	内) 10Y8/1
89	須恵器	壺	その他	SD83	(24.60)	(5.80)	—	1/4	口縫部を丸くさせ、外面に面を持つ。体部にタキ(タキのうちにロクロ)施す。内面にはナゲなどによって下唇に調整する。	内) 7.5Y5/1 外) 10Y5/1
90	土器類	碗	その他	SD88	(16.30)	(5.95)	—	1/4	裏蓋の器形で、口縁部を「ノ」字に凸し、端部を外方に折る。外面には平行タキが施されている。	内) 10Y8/2 外) 10Y8/3
91	青磁	碗	その他	SD88	(18.10)	(5.40)	—	1/4	裏蓋底の延葉弁文飾。裏弁は陽刻され、裏蓋部は削り出される。	NS/ 外) 7.5Y6/2

第1表 遺物観察表（4）

番号	種別	器種	出土地区	出土遺物	口 洋	器 高	底 径	残 存	備考		色 調
									長 (12.10)	幅 (12.15)	
92	瓦	平瓦	その他	SB05							
93	須恵器	瓶	確認	包含層 (確認)	(15.00)	(2.60)	—	細片	ロクロ底面。体部が斜め上方に立ち上がり、口縁は肥厚し、端部を丸く見える。	内) N6/	
94	須恵器	瓶	確認	包含層 (確認)	15.80	5.65	5.60	5 / 6	ロクロ底面。体部を彎曲して立ち上げ口縁部を丸く見える。	内) N7/	
95	須恵器	甕	確認	包含層 (確認)	(19.20)	(5.90)	—	1 / 4	口縫は大きく外反し、縁部は角ばっており、外側に面を持つ。体部外側に平行タキが部分的に残る。	内) N7/ 外) N6 / 5/	
96	須恵器	盆	確認	包含層 (確認)	(23.40)	(4.70)	—	細片	口縫は凹面し下方に括弧が進む。端部は丸みを帯びる。上方にやや突出する。14世紀代のものである。	内) N7/	
97	須恵器	鉢	確認	包含層 (確認)	(24.70)	(3.90)	—	1 / 8	口縫は前面が上下に拉張り、端部を内面にや向ける。14世紀代のものである。	内) 5YR5/2 - 2.5YR5/3 外) 5YR6/2 - 6/6	
98	須恵器	鉢	確認	包含層 (確認)	(16.90)	(4.10)	—	1 / 8	口縫を上方に拡張し、肥厚させる。	内) N7/ 外) N8/	
99	青磁	瓶	確認	包含層 (確認)	(14.70)	(3.50)	—	1 / 4	同上空系。内外面に櫛目文が施され、外縁は解剖肉、内面は草花文と雷光文？が描かれる。	2.5Y7/1 株) 50Y9/1	
100	青磁	瓶	確認	包含層 (確認)	(15.40)	(4.80)	—	1 / 8	蓮瓣底部の絞蓮瓣文。蓋弁を落とし、蓋の縁を切削取りで装組。体部は腰状貼りカバーを施す。丸みを帯びる。	NB/ 株) 10Y6/2	
101	青磁	碗	確認	包含層 (確認)	(13.80)	(4.45)	—	1 / 4	蓮瓣底部の絞蓮瓣文。やや厚手の盤体。蓋弁は丸みを帯びて装組。蓋弁は幅が不均等で施すは表現されず。	2.5Y7/1 株) 2.5G6/1	
102	白磁	碗	確認	包含層 (確認)	(15.70)	(4.90)	—	1 / 8	第Ⅱ類白磁碗。体部下端は露胎で、口縫部は半縫にしてある。	2.5Y8/1 株) 7.5Y7/1	
103	青白	合子舟	確認	包含層 (確認)	(6.20)	(1.95)	(6.60)	1 / 6	蓋受けのかえりが付く。内部は器物。	10Y9/1 株) 7.5Y7/2	
104	土師器	小鉢	確認	包含層 (確認)	7.75	1.59	4.60	1 / 2	ロクロ底面。体部は斜め上方に大きく開き、口縫部は丸く見える。	内) 2.5Y8/2	
105	土師器	鍋鉢	確認	包含層 (確認)	(25.35)	(12.25)	11.95	1 / 4	口縫部は退化し、下縁に凹を作れる。内面には頭的なハケ付の後、8本単位の繊密な組目がある。	内) 5YR7/6 外) 5YR7/6	
106	須恵器	甕	確認	包含層 (確認)	(29.10)	(37.00)	(15.70)	1 / 8	外縁平行タキ(左上りの平行タキののち綻び方向)。内面は水平にナデる。口縫部は粗く、「く」字に折れ。	内) 5Y7/1 - N6/ 外) 5Y7/2 - 6/6	
107	青磁	皿	確認	包含層 (確認)	(10.90)	2.20	5.05	1 / 2	蓮瓣底面。内縁に押切取りで草花文?を施す。外縁青苔台露胎。	2.5Y6/1 株) 7.5Y6/2	
108	青磁	碗	確認	包含層 (確認)	—	(1.80)	(5.20)	1 / 2	蓮瓣底面。内縁に押切取りで草花文?を施す。外縁青苔台露胎。	2.5Y6/1 株) 50G6/1	
109	弥生土器	広口甕	弥生	SX03	28.90	47.80	10.55	完形	口縫部に押切取りで草花文?を施す。外縁青苔台露胎。	内) 2.5Y8/2 外) 5Y8/2 - 10YR8/2	
110	弥生土器	甕	弥生	SX03	—	(16.20)	(12.75)	1 / 10	底部付、縁底が新しい。体部下端にハケ且溝。豊底跡が確認される。弥生時代中期	内) 10YR7/2 外) 7.5YR7/6	
111	弥生土器	廣口甕	弥生	SD94	(9.20)	(28.70)	6.30	3 / 5	外縁は体部下部を除いて瓶底のハケ且溝。下子は瓶方向のガキ調整。内面は部分的にハケ且溝痕跡が残る。	内) 5Y8/2 - 7.5YR6/6 外) 10YR7/6 - 10YR7/4	

石製品

番号	種別	器種	出土地区	出土遺物	口 直 径	器 高	底 径	残 存	備考		色 調
					長 さ 11.00				幅 5.25	厚 1.30	
S1	石製品	砾石	屋敷地5	SB07	11.00	—	—	—	—	—	—
S2	石製品	砾石	その他	SK29	長さ (27.70)	幅 (25.40)	厚 (14.30)	1 / 2	花崗岩製の下臼。口は6本単位で6~8分割されると検定される。中央に歯受け穴がある。	—	—

第2表 新旧遺構名対照表(1)

土坑

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
SK01	SK37		
SK02	SK38		
SK03	SK48		
SK04	SK34		
SK05	SK33		
SK06	SK40		
SK07	SK39		
SK08	SK31		
SK09	SK32		
SK10	SK02		
SK11	SK15		
SK12	SK16		
SK13	SK05		
SK14	SP02		
SK15	SK10		
SK16	SK11		
SK17		SK05	
SK18		SK03	
SK19		SK04	
SK20		SX01	
SK21		SK06	
SK22		SK02	
SK23		SK07	
SK24		SK03	
SK25		SK01	
SK26		SK04	
SK27		SK05	
SK28		SK08	
SK29			SK01
SK30			SK02

柱穴(単独)

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
SP01		P20	
SP02		P31	
SP03		P32	
SP04		P33	
SP05		P59	

掘立柱建物

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
SB01	建物1		
SB02	建物2		
SB03	建物3		
SB04		○	
SB05		SB02	
SB06		SB01	
SB07		SB03	
SB08		SB04	
SB09		SB05	
SB10			SB01

※ ○=遺構名なし

井戸

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
SE01	SK46		
SE02		SE01	
SE03		SE02	
SE04		SE03	
SE05			SE01

墓

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
SX01	SX01		
SX02	SK09		
SX03		SX01	

第2表 新旧機種名対照表(2)

SB01

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1	SK50		
P2	SK51		
P3	SK57		
P4	SK54		
P5	P91		
P6	P89		
P7	P87		
P8	P86		
P9	P84		
P10	P82		
P11	P78		
P12	P74		
P13	P69		
P14	P68		
P15	P65		
P16	P66		
P17	P67		
P18	P107		
P19	P104		
P20	P93		
P21	P92		
P22	P90		
P23	P81		
P24	P79		
P25	P75		
P26	P70		
P27	P71		
P28	P72		
P29	P76		

SB03

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1	P52		
P2	P18		
P3	P11		
P4	P43		
P5	P08		
P6	P16		
P7	P05		
P8	P41		
P9	P42		
P10	P31		
P11	P30		
P12	P101		
P13	P100		
P14	P99		
P15	P98		
P16	P97		
P17	P33		
P18	P22		
P19	P24		
P20	P48		
P21	P39		
P22	P36		
P23	P19		
P24	P15		
P25	P01		
P26	P40		
P27	P44		
P28	P28		
P29	P27		
P30	P29		
P31	P46		
P32	P45		
P33	P21		
P34	P23		
P35	P47		
P36	P20		
P37	P32		
P38	P35		
P39	P26		
P40	P25		
P41	P108		
P42	P06		
P43	P07		

※ ○=追機名なし

第2表 新旧遭構名対照表(3)

SB04

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1	○		
P2	○		
P3	○		
P4	○		
P5	○		
P6	○		
P7	○		
P8	○		
P9	○		
P10	○		
P11	○		
P12	○		
P13	○		

SB05

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1	○		
P2	○		
P3	P29		
P4	P1		
P5	P28		
P6	P63		
P7	P27		
P8	P68		
P9	○		
P10	○		
P11	○		
P12	○		
P13	○		
P14	○		
P15	○		
P16	P69		
P17	P67		
P18	○		

SB06

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1	○		
P2	○		
P3	○		
P4	○		
P5	○		
P6	○		
P7	○		
P8	○		
P9	○		
P10	○		
P11	○		
P12	○		
P13	○		
P14	P21		
P15	P65		
P16	○		
P17	○		
P18	○		
P19	○		
P20	○		

SB07

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1	○		
P2	○		
P3	○		
P4	○		
P5	P30		
P6	○		
P7	○		
P8	P35		
P9	P2		
P10	○		
P11	○		
P12	○		
P13	○		
P14	○		
P15	○		
P16	○		

※ ○=遭構名なし

第2表 新旧遺構名対照表（4）

SB08

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1		○	
P2		○	
P3		○	
P4		○	
P5		○	
P6		P54	
P7		○	
P8		P9	
P9		P7	
P10		P70	
P11		P19	

SB09

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1		○	
P2		○	
P3		P47	
P4		○	
P5		P48	
P6		○	
P7		○	
P8		○	
P9		○	
P10		○	

SB10

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
P1			P5
P2			P7
P3			P6
P4			P11
P5			P10
P6			P9
P7			P8
P8			P4
P9			P3
P10			P1

※ ○=遺構名なし

第2表 新旧造構名対照表(5)

清

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
SD01	SD46		
SD02	SD74		
SD03	○		
SD04	SD56		
SD05	SD73		
SD06	SD71		
SD07	SD67		
SD08	SD66		
SD09	SD64		
SD10	SD75		
SD11	SD65		
SD12	SD68		
SD13	SD70		
SD14	SD60		
SD15	SD59		
SD16	○		
SD17	SD58		
SD18	SD52		
SD19	SD49		
SD20	SD53		
SD21	SD55		
SD22	○		
SD23	SD78		
SD24	SD77		
SD25	SD54		
SD26	SD45		
SD27	SD44		
SD28	SD48-28		
SD29	SD43		
SD30	SD79		
SD31	○		
SD32	○		
SD33	SD40		
SD34	SD42		
SD35	SD47-30-38		
SD36	SD39		
SD37	SD20-08		
SD38	SD03		
SD39	○		
SD40	SD05		
SD41	○		
SD42	SD02		
SD43	SD01		
SD44	SD11		
SD45	SD12		
SD46	SD13		
SD47	SD16		
SD48	SD17		
SD49	SD18		
SD50	SD14		

新番号	旧番号		
	990265	2001141	2001211
SD51	SD51		
SD52	SD10		
SD53	SD21		
SD54	SD22		
SD55	SD23		
SD56	SD24		SD10
SD57	SD25		SD09
SD58		○	SD01
SD59	SD32		
SD60	SD26		
SD61	SD36		
SD62	SD37		
SD63	SD33-34	SD12	
SD64		SD11	
SD65	SD09		SD12
SD66		SD02	
SD67		SD03	
SD68		SD06	
SD69		SD07	
SD70		SD09	
SD71		SD14	
SD72		SD10	
SD73		SD15	
SD74		SD16	
SD75		SD27	
SD76		SD13	
SD77		SD08	
SD78		SD01	
SD79	SD29		
SD80	SD31		
SD81		SD04	
SD82		SD25	
SD83		SD22	
SD84		SD21	
SD85		SD20	
SD86		○	
SD87		SD24	
SD88		SD18	
SD89		SD05	
SD90			SD05
SD91			SD02
SD92			SD03
SD93			SD04
SD94		SD17	

※ ○=造構名なし

報 告 書 抄 錄

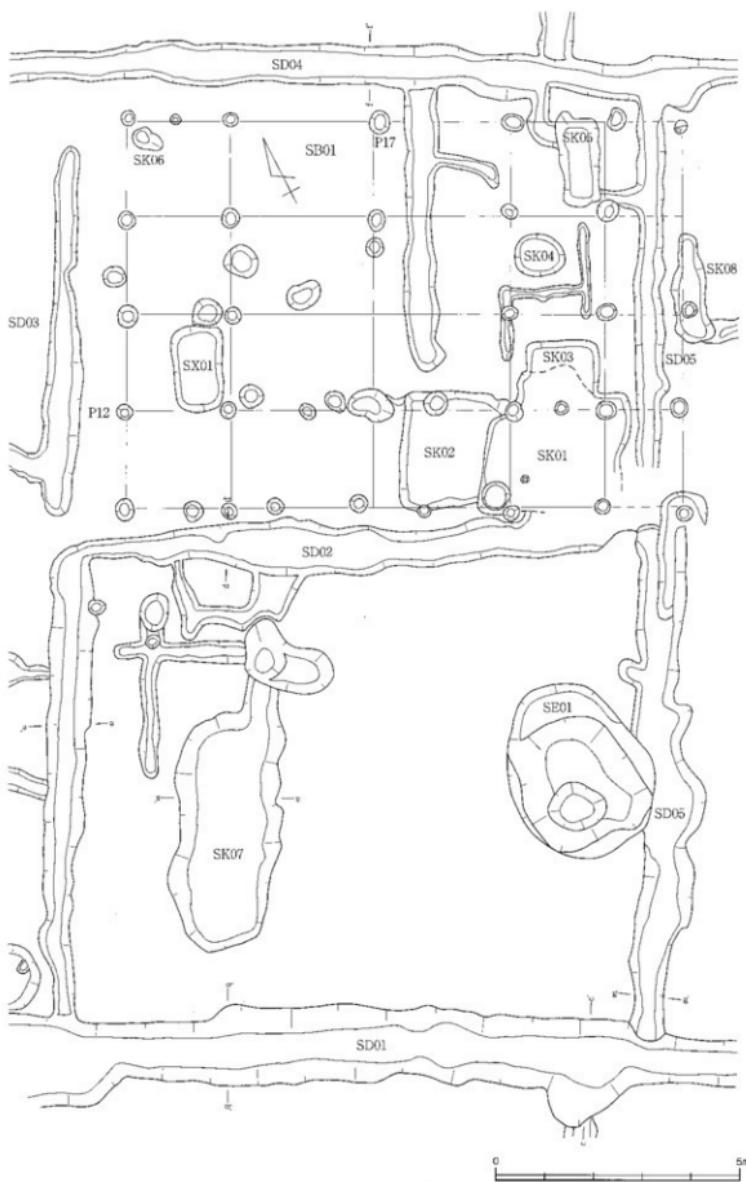
ふりがな	とちのき							
書名	柄木遺跡							
副書名	神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書							
巻次	V							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第358冊							
編著者名	長濱誠司・山上雅弘							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 TEL 079-437-5589							
発行年月日	西暦2009(平成21)年3月13日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
柄木遺跡	兵庫県神戸市 西区植谷町音野	28110	990265 2001141 2001211	34度 46分 36秒	134度 46分 36秒	19990930~ 20000317 20011225~ 20020312 20020128~ 20020315	5,497m ² 4,732m ² 774m ²	一般国道2号 (神戸西バイ バス)建設事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柄木遺跡	集落	中世 弥生時代	掘立柱建物・溝・土坑 土器埋納坑・溝	須恵器・土師器・陶磁器 弥生土器	溝によって区画された集落を検出			

図 版

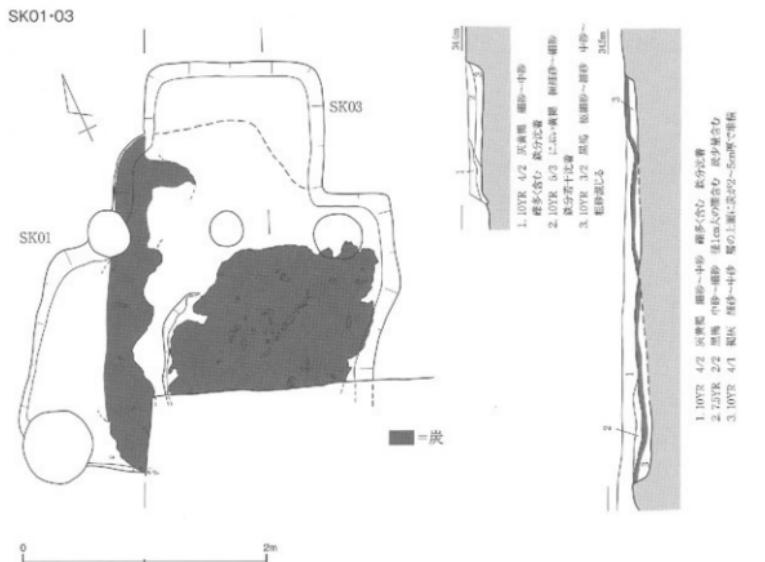
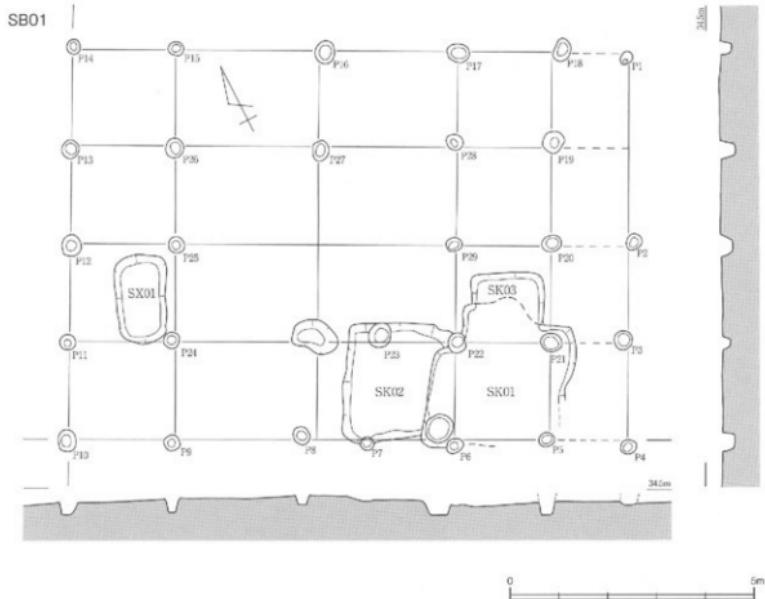


全体図

図版2 遺構

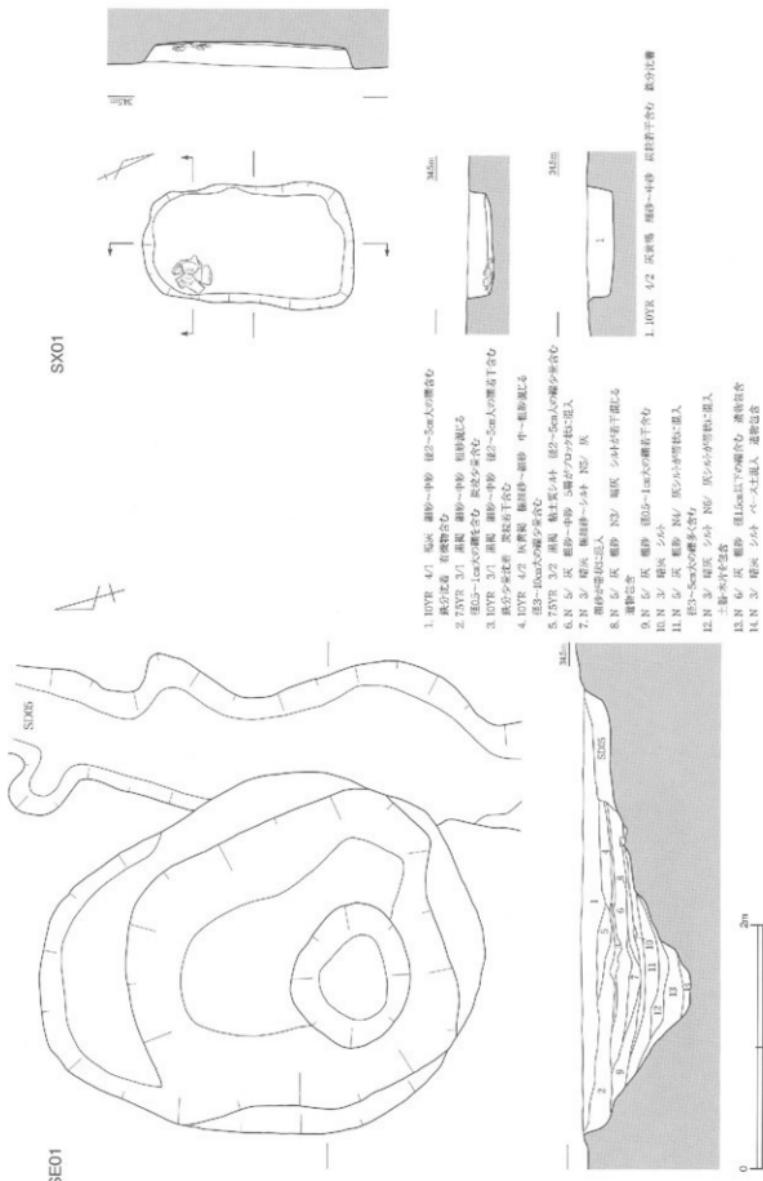


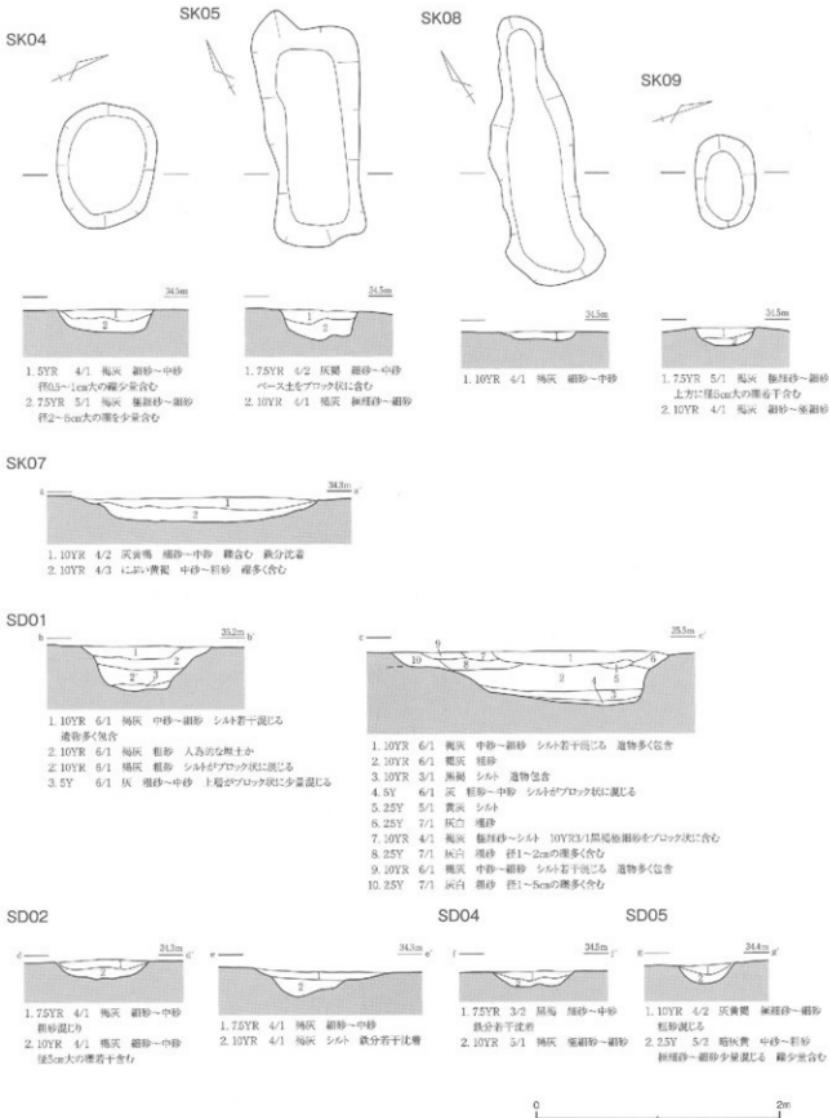
屋敷地1 (1)



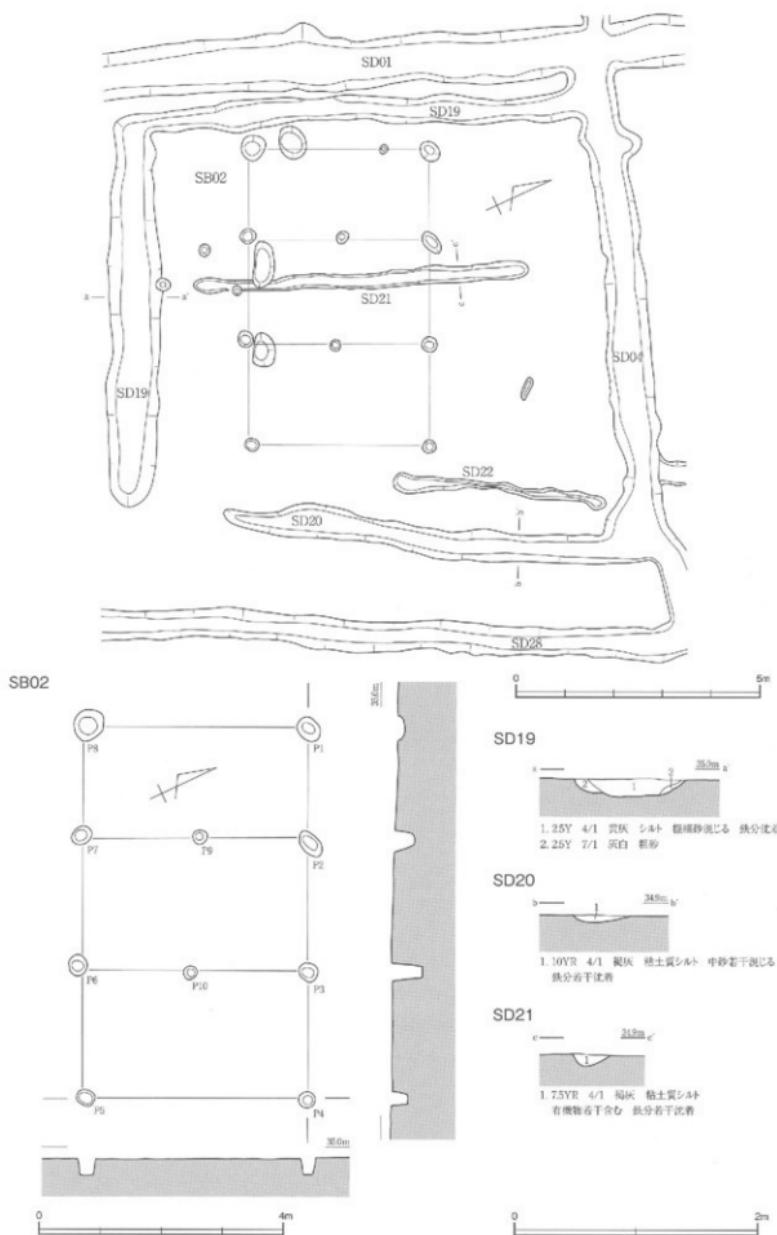
屋敷地1 (2)

図版4 遺構

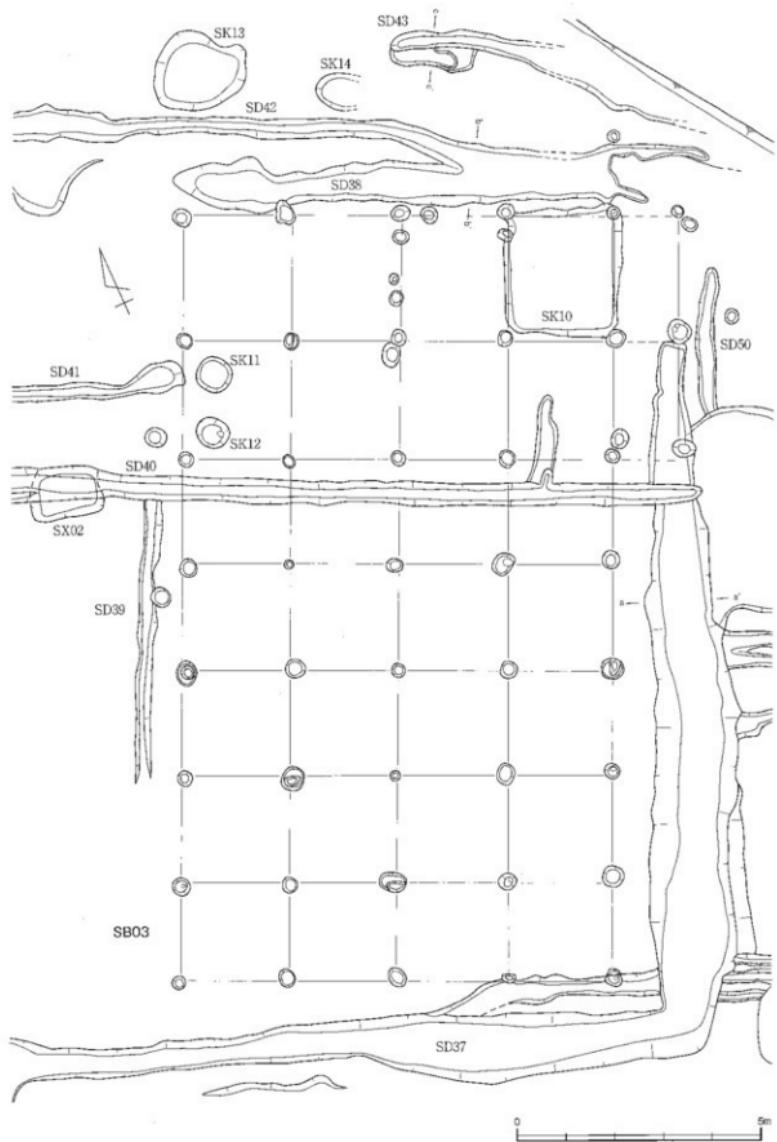




図版 6 遺構

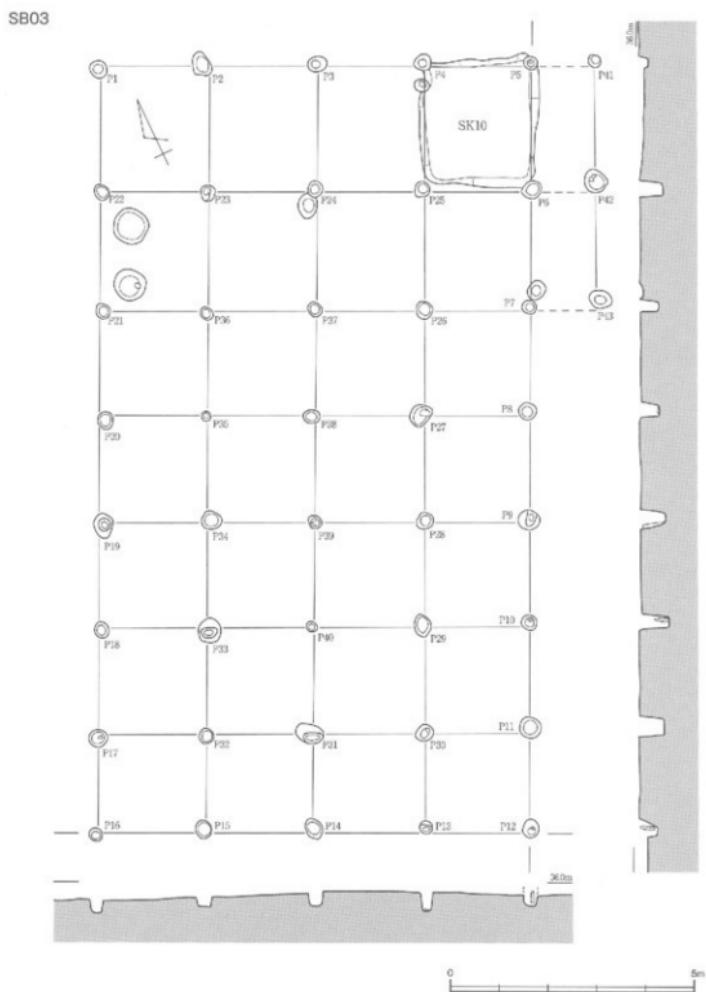


屋敷地 2



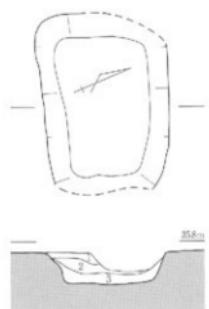
屋敷地 3 (1)

図版 8 遺構



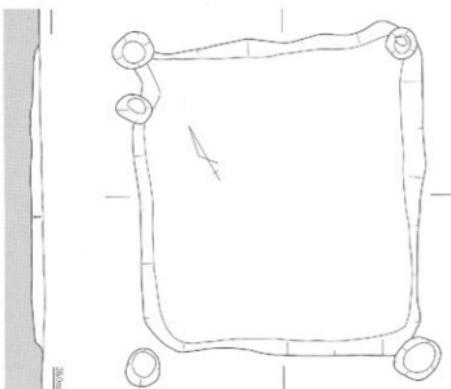
屋敷地 3 (2)

SX02



1. 10YR 5/2 黄褐色 細砂～中砂 有機物多く含む
2. 7.5YR 5/3 にかく海 細砂～中砂
7.5YR 5/6 有機物ブロック混じる
3. 10YR 4/2 黄褐色 細砂～中砂

SK10

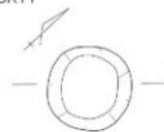


SK13



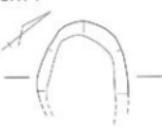
1. 7.5YR 4/4 開 細砂～中砂 径10cm以下を含む

SK11



1. 2.5Y 6/1 黄灰 細砂～粗砂 シルト混じる
有機物多く含む
2. 10YR 5/1 海灰 細砂～シルト 有機物含む

SK14



1. N 4/ 灰 細砂

SD37



1. 2.5Y 5/1 黄灰 細砂～粗砂 径5～20cmの塊多く含む
有機物含む
2. N 4/ 灰 細砂～中砂

SD42-38



1. 10YR 6/1 橙灰 細砂～粗砂
ベース土混入 (SD42)
2. 10YR 5/1 橙灰 細砂～粗砂
ベース土少量混入 (SD38)

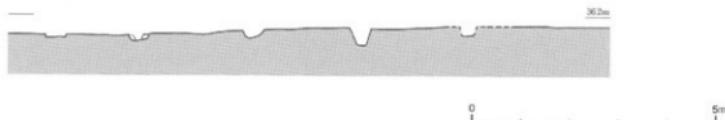
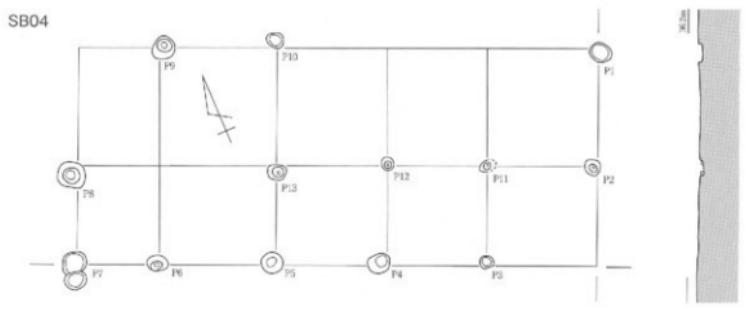
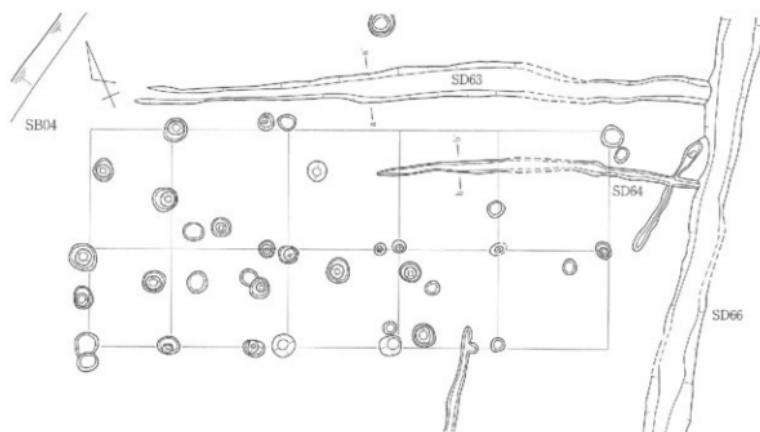
SD43



1. BY 5/1 灰 細砂～粗砂

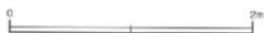


図版10 遺構

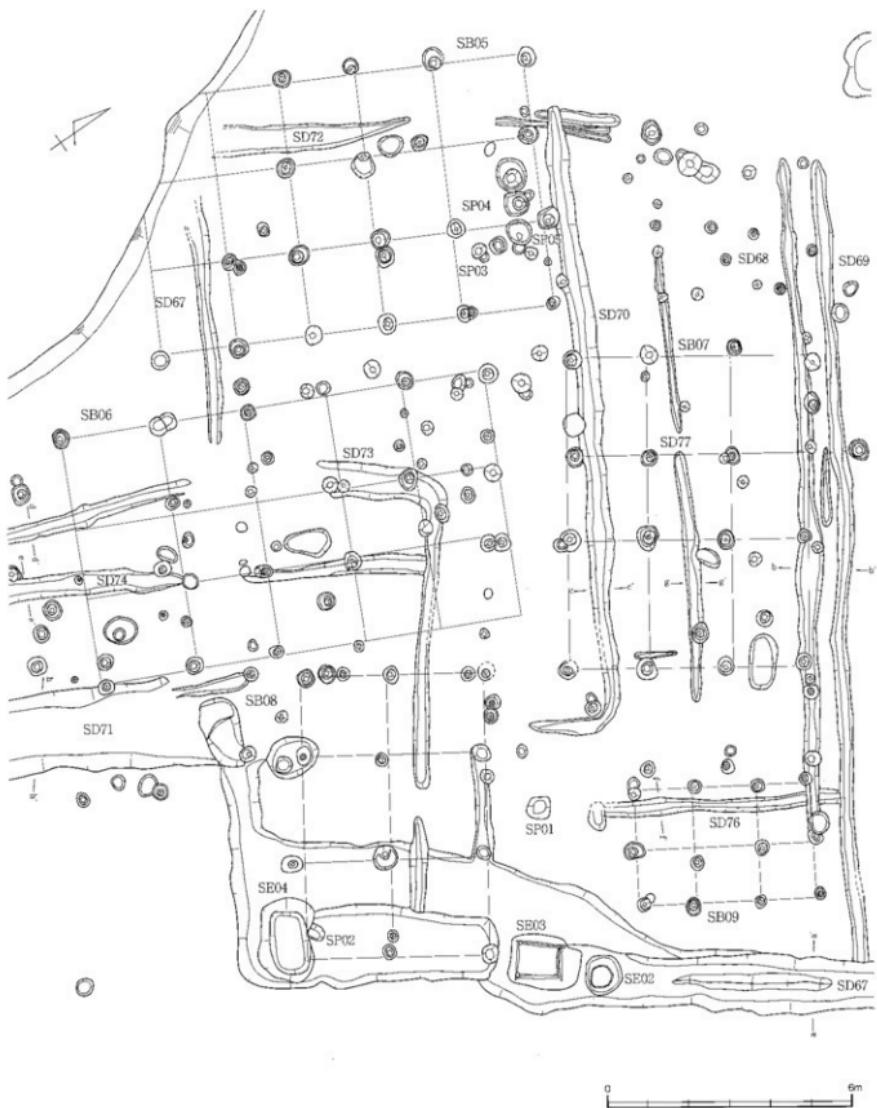


SD63
1. 10YR 4/2 淡黄褐色 シート質細粒
2. 10YR 5/3 にほん黄褐色 粗砂 マンガン沈着

SD64
1. 10YR 3/2 黒褐色 シート質細粒
マニガン沈着



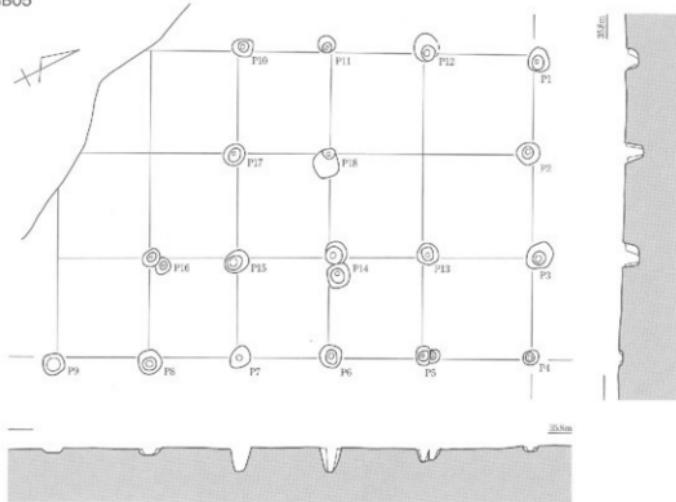
屋敷地 4



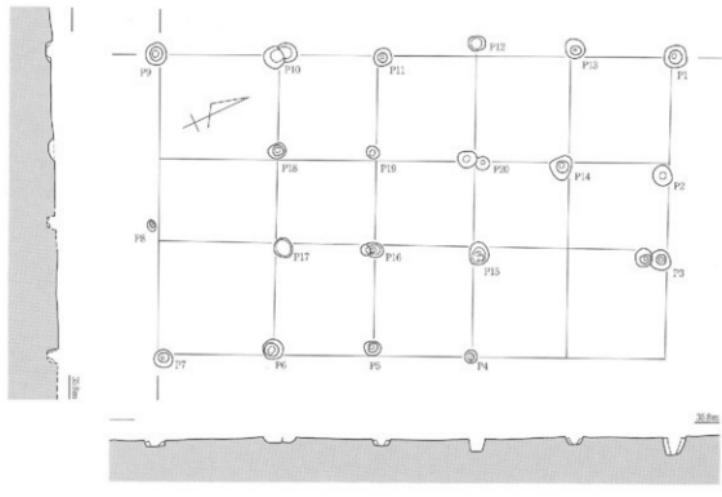
屋敷地 5 (1)

図版12 遺構

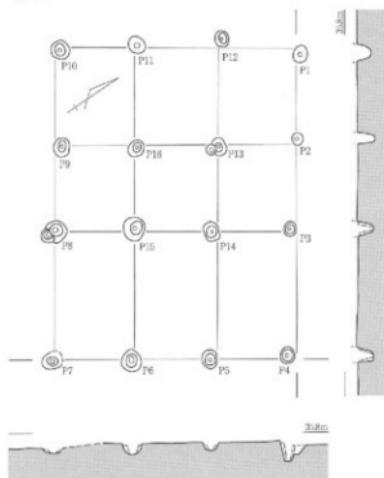
SB05



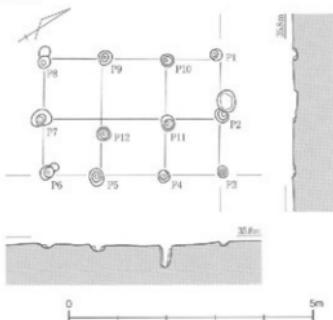
SB06



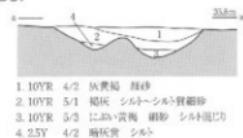
SB07



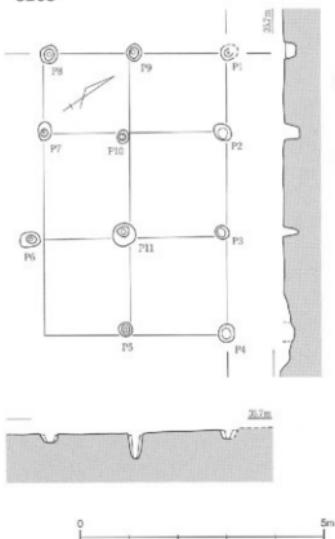
SD09



SD67



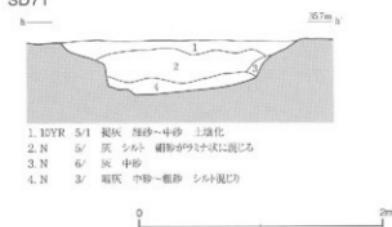
SB08



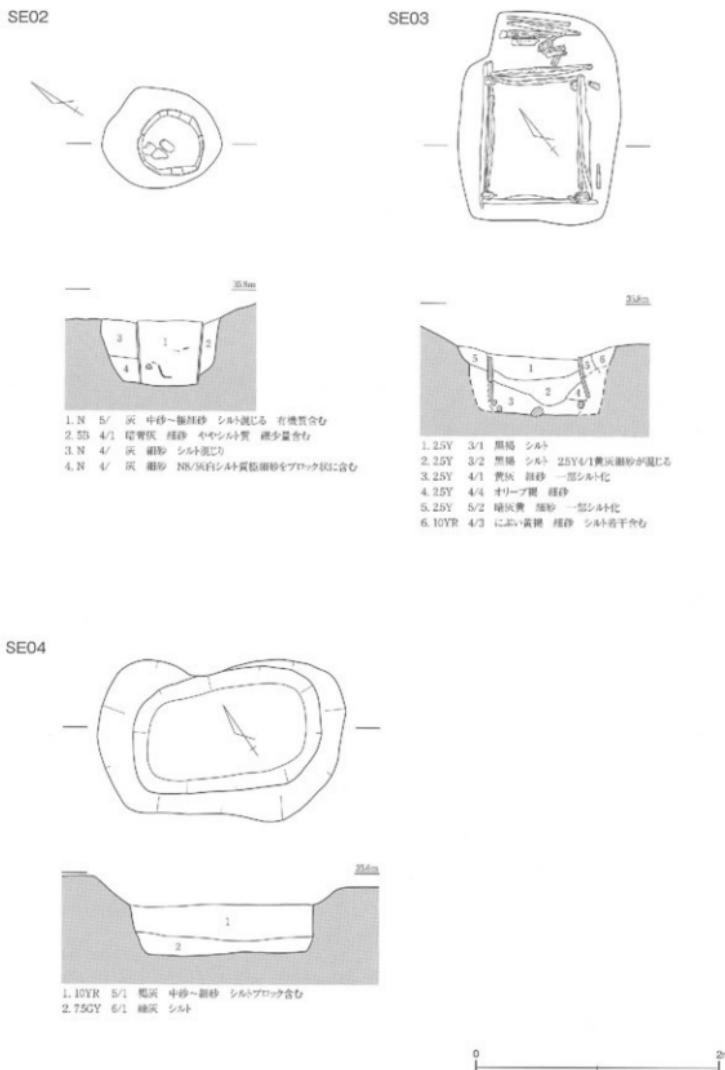
SD76

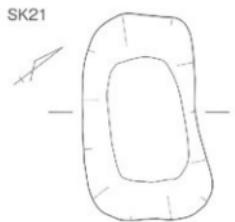


SD71

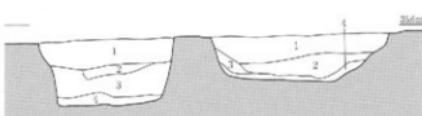
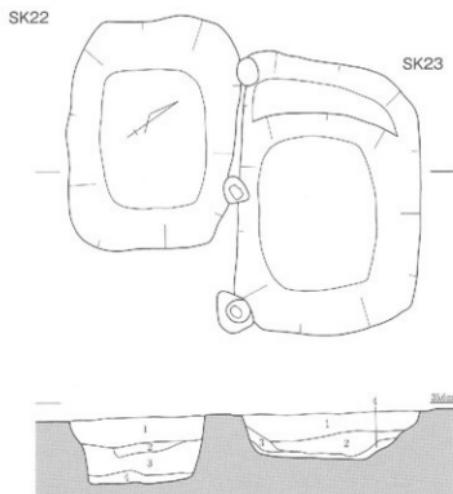


図版14 遺構





1. 75YR 5/2 灰褐色 細緻 線、中砂～粗砂含む
2. 75YR 4/3 黒褐色 粗砂 10YR5.2灰黃褐色シルト含む
3. 75YR 5/3 に加え側 細緻～粗砂
- 75YR7.6褐色シルトブロック混じる



1. 10YR 5/1 棕褐色 中砂 黄褐色シルトブロック含む
2. 10YR 5/1 棕褐色 中砂 シルト質粘土
- 黄褐色シルトブロック含む
3. 25Y 5/6 黄褐色 シルト ブロック状の漂砾
4. N 7/ 底面 細緻 グライ化
1. 10YR 5/1 棕褐色 粗砂～中砂 シルト混じり
- 黄褐色シルトブロック含む
2. N 5/ 底面 細緻～細緻 黄褐色シルトブロック含む
3. N 4/ 底面 細緻 黄褐色シルトブロック含む
4. 10YR 6/1 棕褐色 中砂

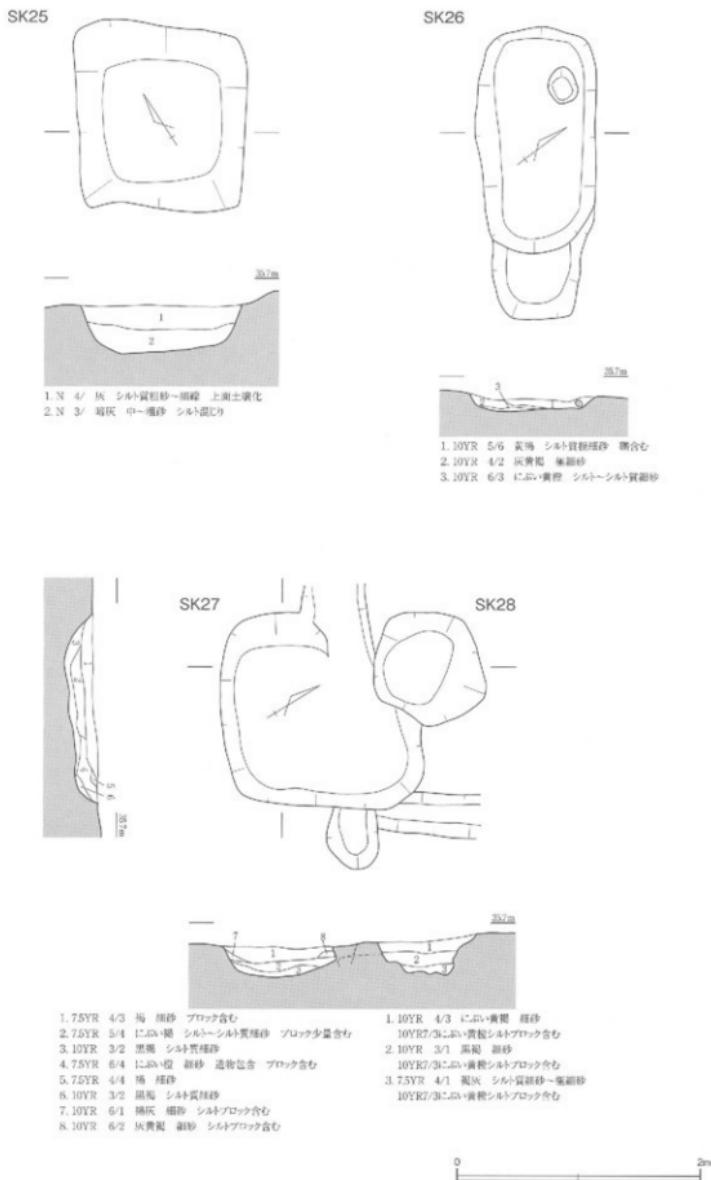


1. 10YR 3/3 暗褐色 シルト質粗粒砂
- 10YR4.6褐色シルトブロック含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 粗砂
- 10YR6.6灰褐色シルトブロック含む
3. 10YR 3/1 黑褐色 粗砂と
- 10YR 5/4 に加え黄褐色シルト質粗粒砂の互層

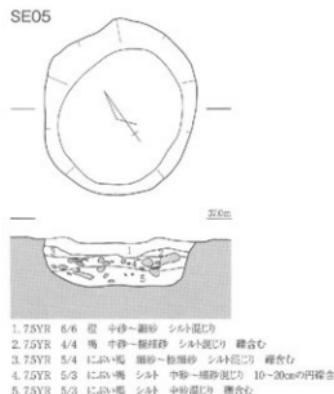
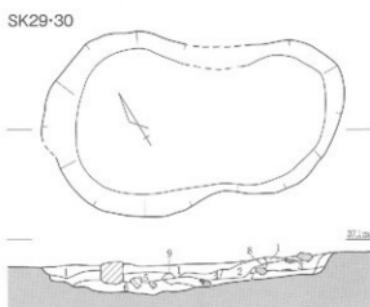
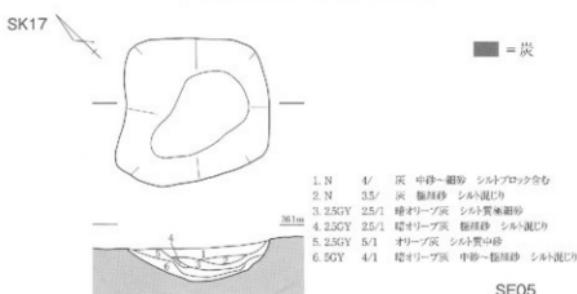
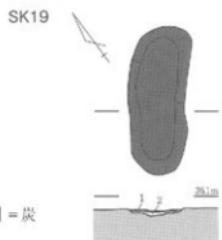
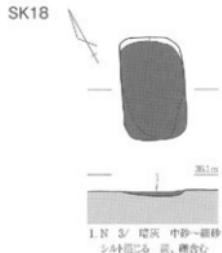
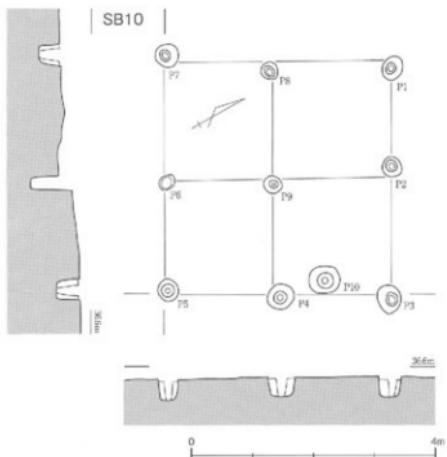


土坑群（1）

図版16 遺構



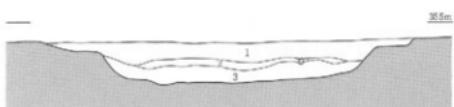
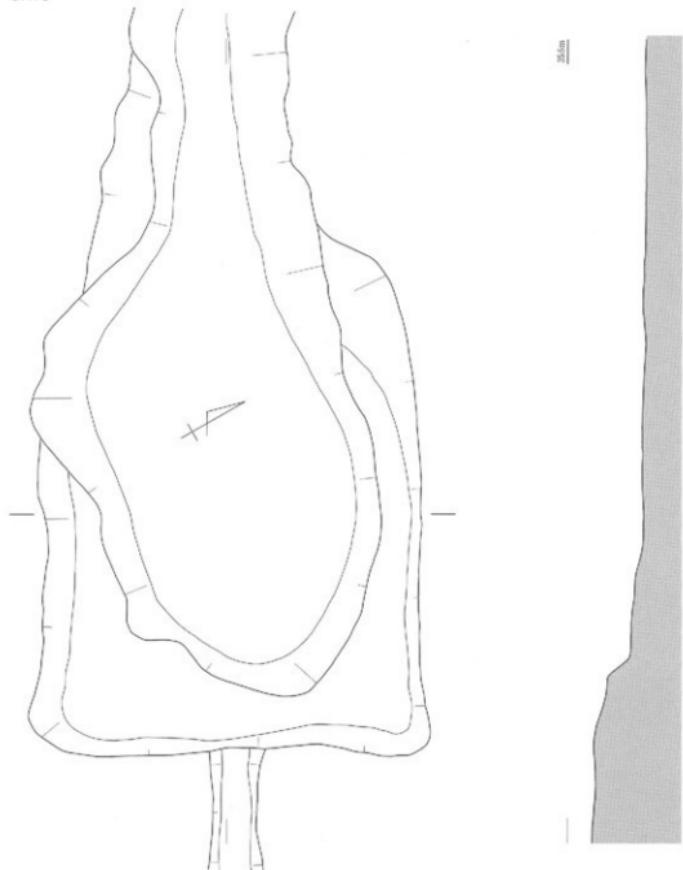
土坑群（2）



0 2m

図版18 遺構

SK15

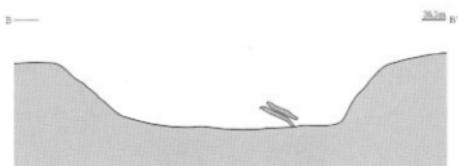
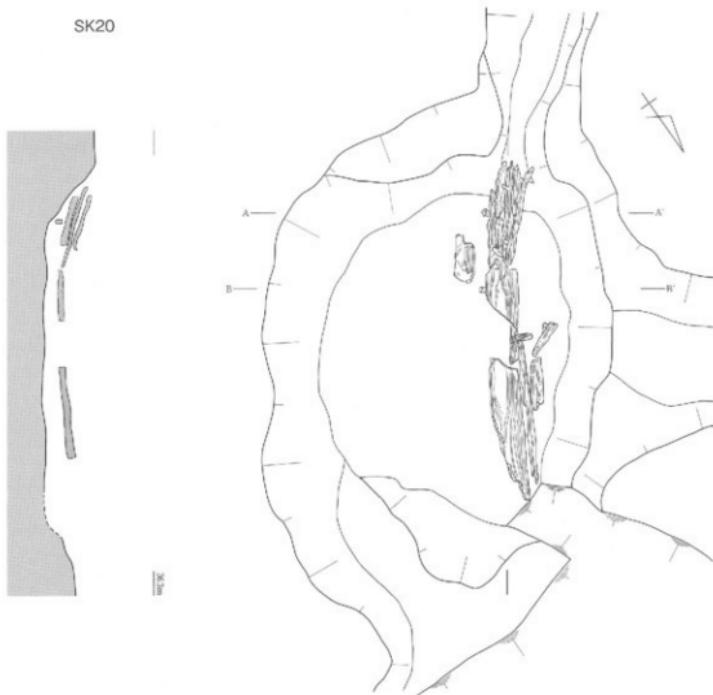


1. 25Y 6/2 灰質 優鉛鉄～細砂 従5cm以下の薄少並含む
2. 75YR 5/8 明褐色 細砂～中砂
3. 10YR 5/2 灰質側 細砂

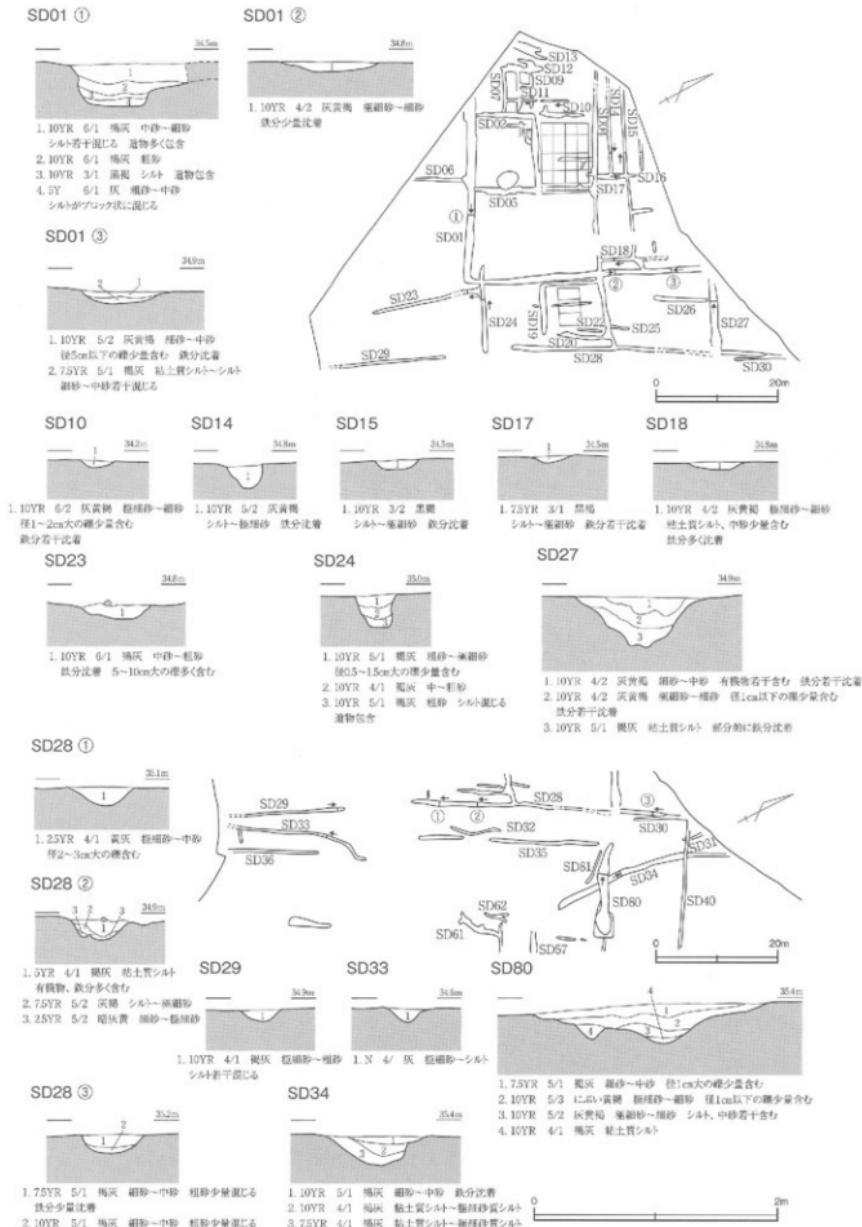


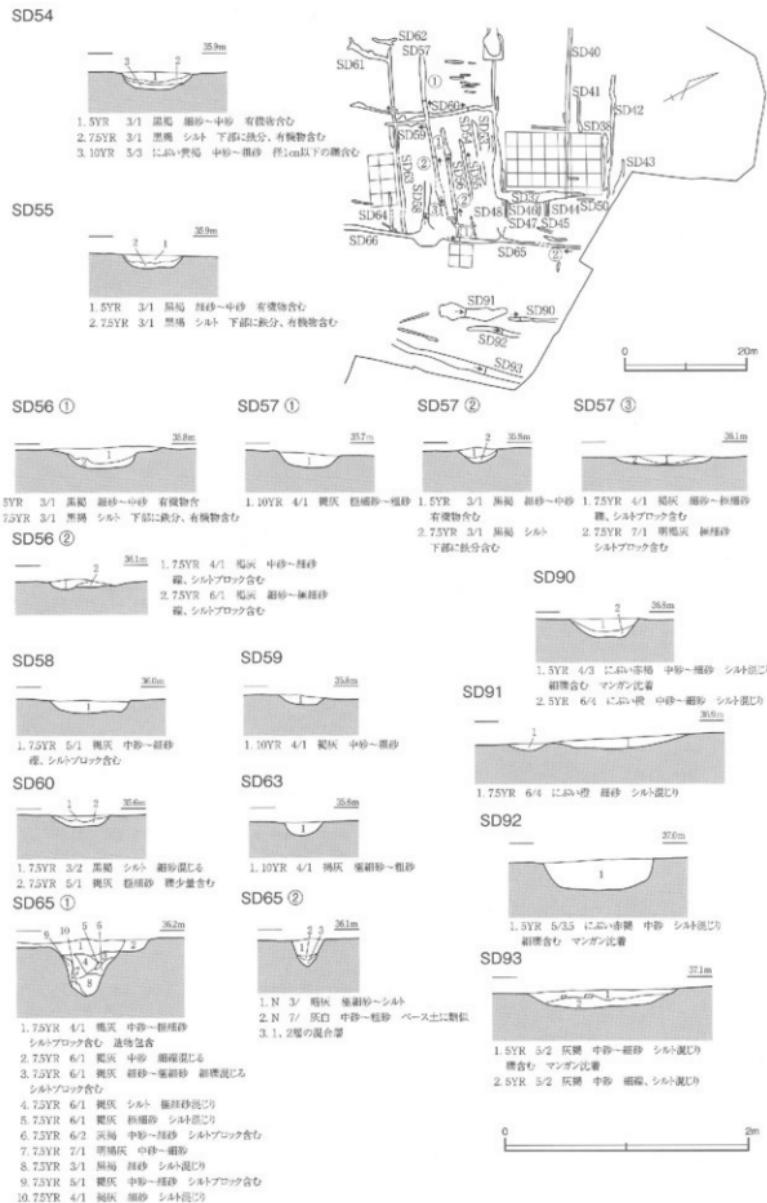
その他の遺構（2）

SK20



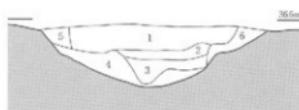
図版20 遺構





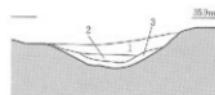
図版22 遺構

SD78 ①



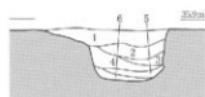
1. 7SYR 4/3 海 細砂 粒含む
2. 7SYR 4/2 底泥 シルト質細砂
3. 7SYR 3/2 黒泥 細砂～粗砂
4. 10YR 4/1 塗灰 細砂～シルト質細砂
5. 10YR 3/3 塗灰 細砂
6. 7SYR 3/4 塗灰 細砂 シルト質細砂

SD78 ②



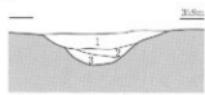
1. 10YR 5/4 にじみ黄褐色 シルト質細砂
2. 10YR 4/3 にじみ黄褐色 シルト
3. 2SY 5/2 塗灰 黃褐色 細砂 粒含む

SD78 ③



1. 10YR 4/3 にじみ黄褐色 細砂 粒含む
2. 10YR 4/1 海灰 細砂
3. 10YR 3/2 黒泥 細砂～シルト質細砂 粒含む
4. 2SY 4/2 塗灰 黃褐色 細砂 退色含む
5. 2SY 5/2 塗灰 黃褐色～中砂
6. 2SY 5/1 黄灰 シルト～細砂

SD67



1. 10YR 5/4 にじみ黄褐色 細砂
2. 10YR 3/2 黒泥 シルト～シルト質細砂
3. 10YR 3/4 塗灰 シルト～シルト質細砂

SD81

SD86



1. 10YR 6/1 黒灰 細砂
鉱分沈着 上層土壌化



1. 7SYR 5/2 塗灰 中砂～粗砂

SD84 SD85



1. 10YR 6/3 にじみ黄褐色 細砂

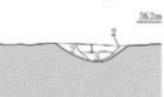


SD87 ①



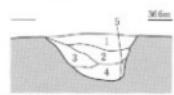
1. 10YR 4/3 にじみ黄褐色 細砂
2. 7SYR 3/2 黒泥 細砂～シルト質細砂
3. 7SYR 4/1 海灰 シルト
4. 7SYR 5/1 塗灰 シルト～細砂
5. 7SYR 4/4 海 細砂

SD88 ①



1. 7SYR 6/1 塗灰 細砂
2. 10YR 5/4 にじみ黄褐色 シルト質細砂
3. 7SYR 6/1 海灰 シルト
4. 10YR 5/2 黑糞質 細砂
5. 10YR 4/4 海 細砂

SD87 ②



1. 10YR 4/4 黄 細砂
2. 10YR 5/4 にじみ黄褐色 細砂 粒含む
3. 10YR 4/2 黄褐色 細砂 粒含む
4. 10YR 4/1 海灰 シルト
5. 10YR 6/3 にじみ黄褐色 シルト～シルト質細砂 粒含む

SD88 ②



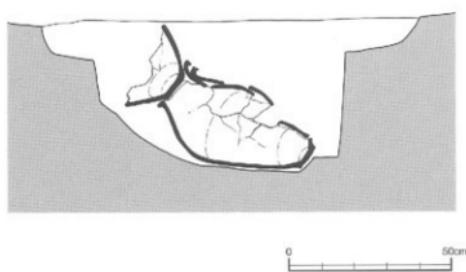
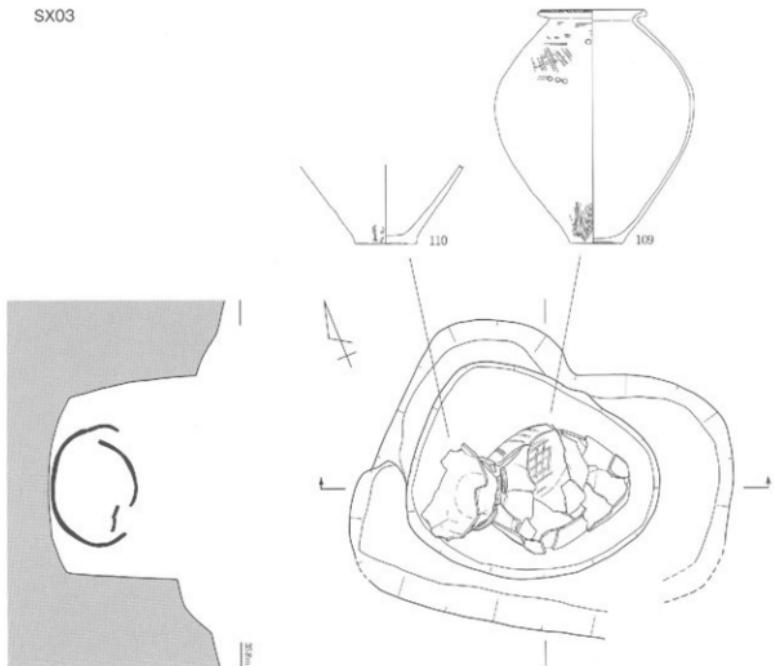
1. 10YR 4/3 にじみ黄褐色 細砂
2. 7SYR 5/6 明黄 細砂

SD87 ③



1. 7SYR 4/4 海 細砂
2. 10YR 5/3 にじみ黄褐色 細砂
3. 10YR 6/1 海灰 シルト
4. 10YR 6/2 にじみ黄褐色 細砂

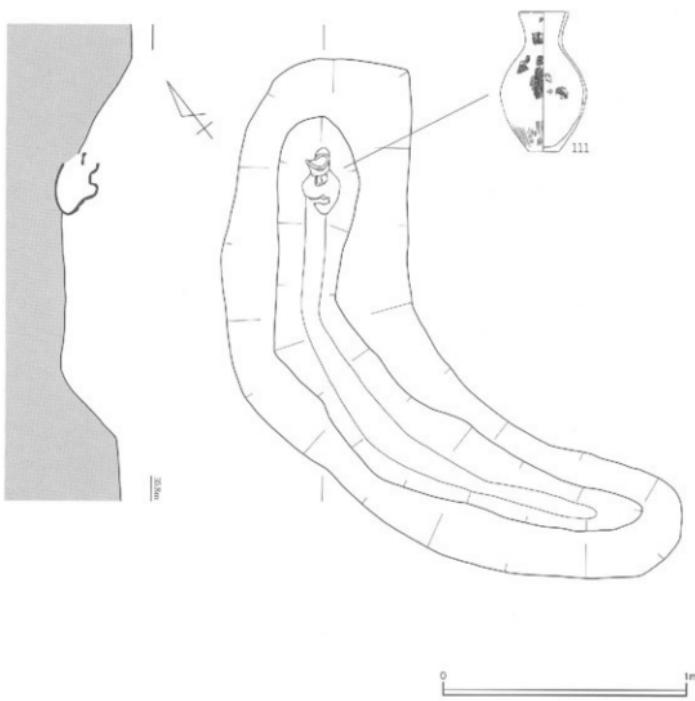
SX03

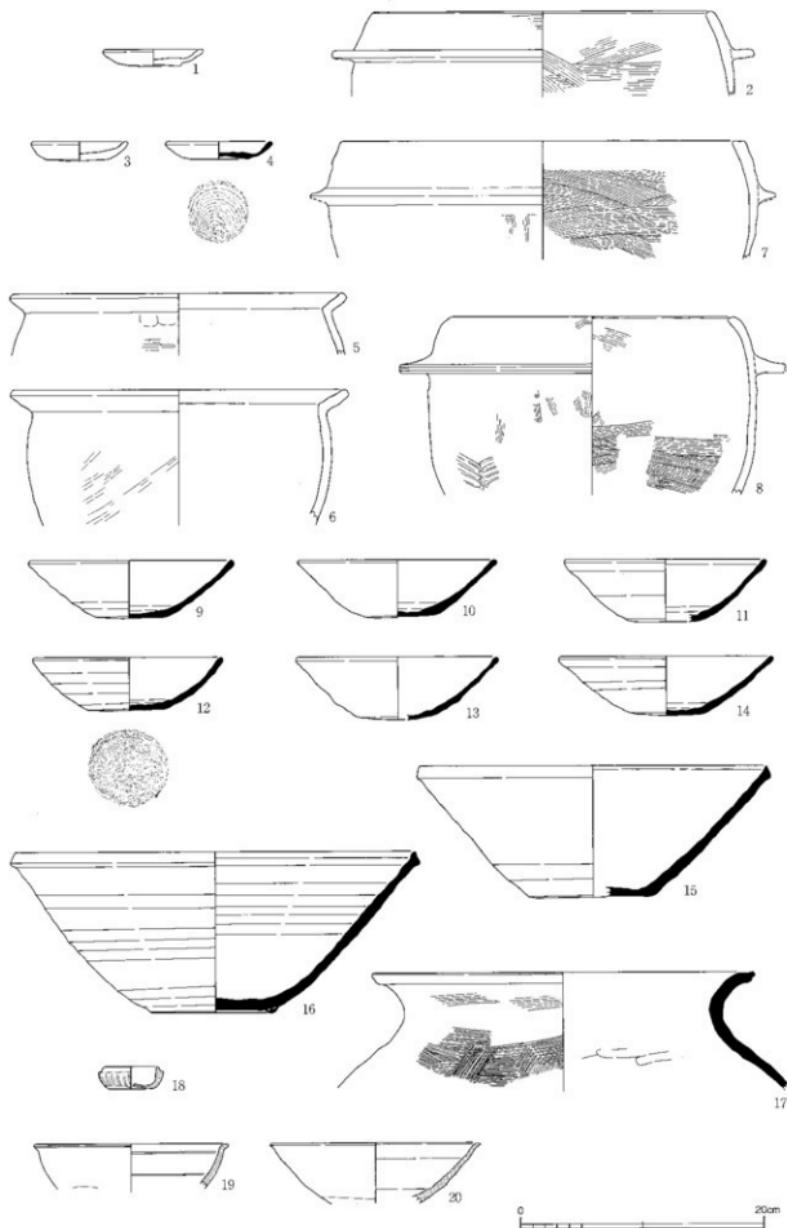


弥生時代の遺構（1）

図版24 遺構

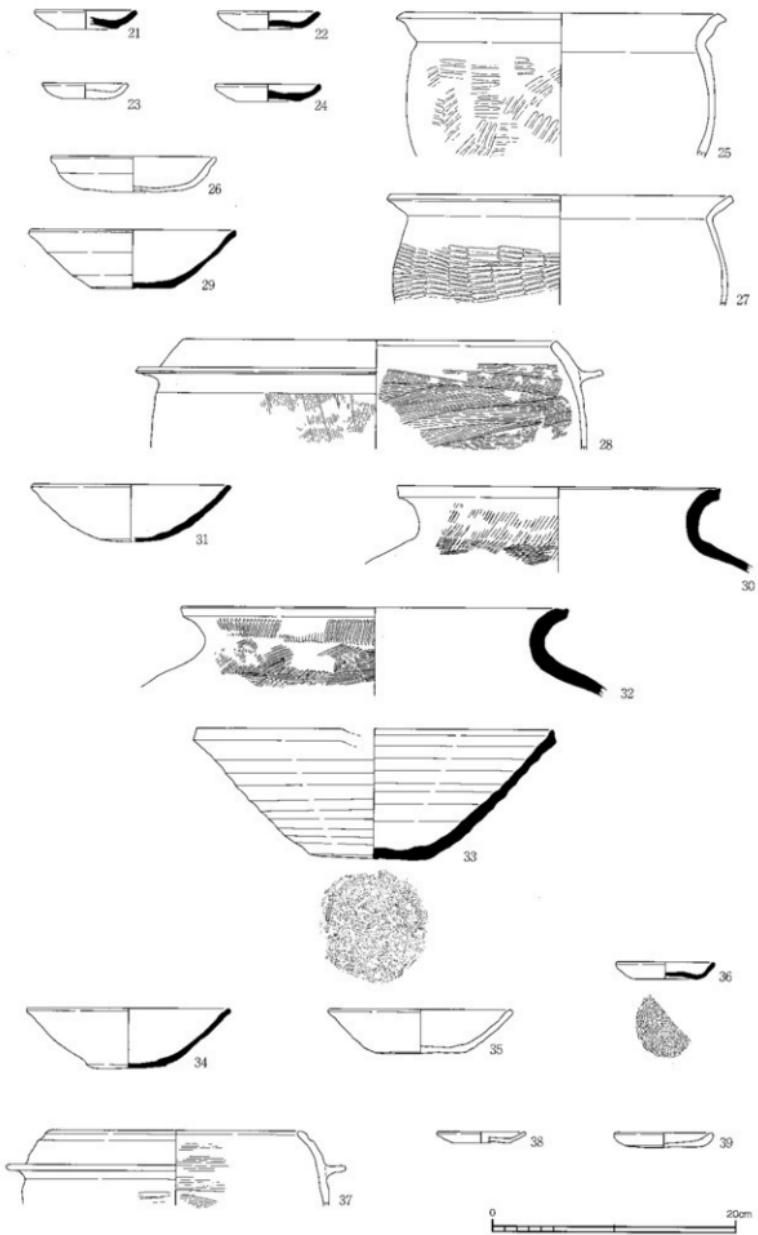
SD94



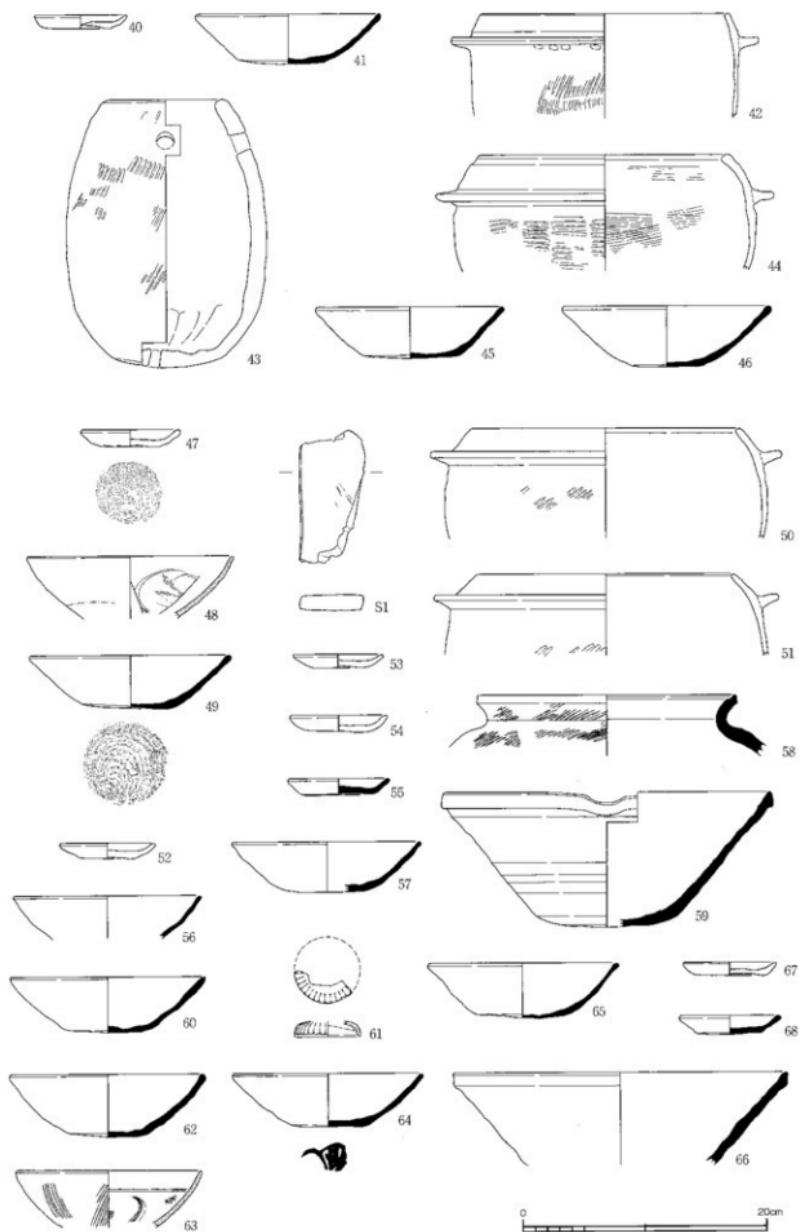


出土遺物 1 土器 1

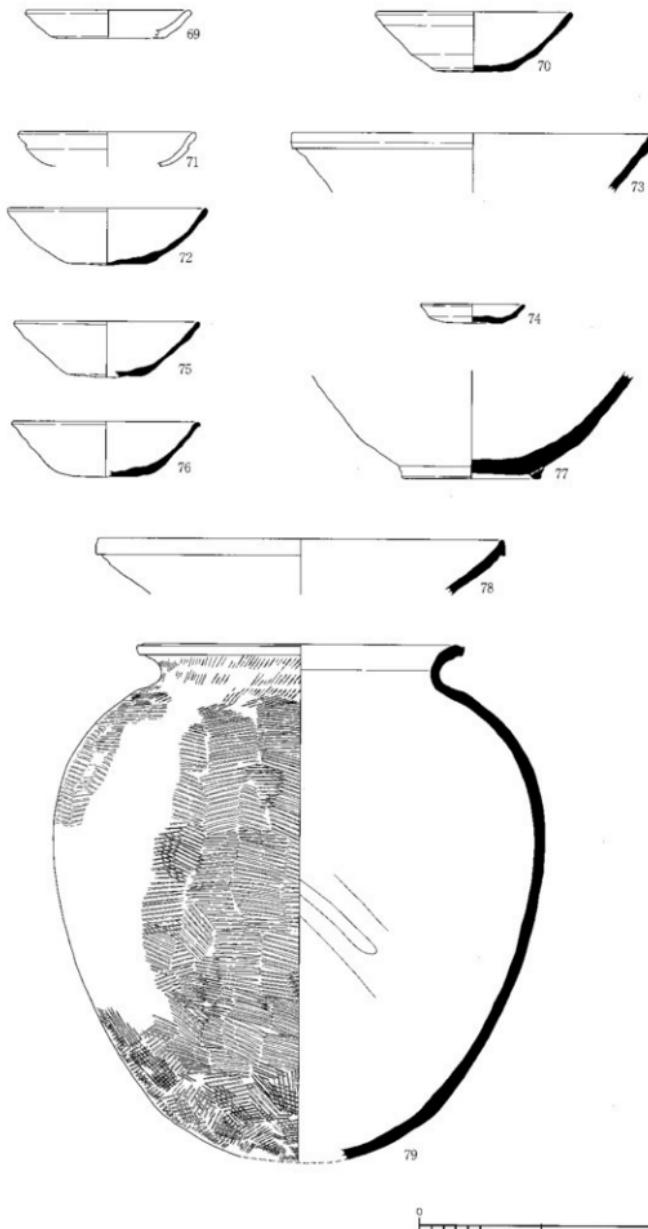
図版26 遺物



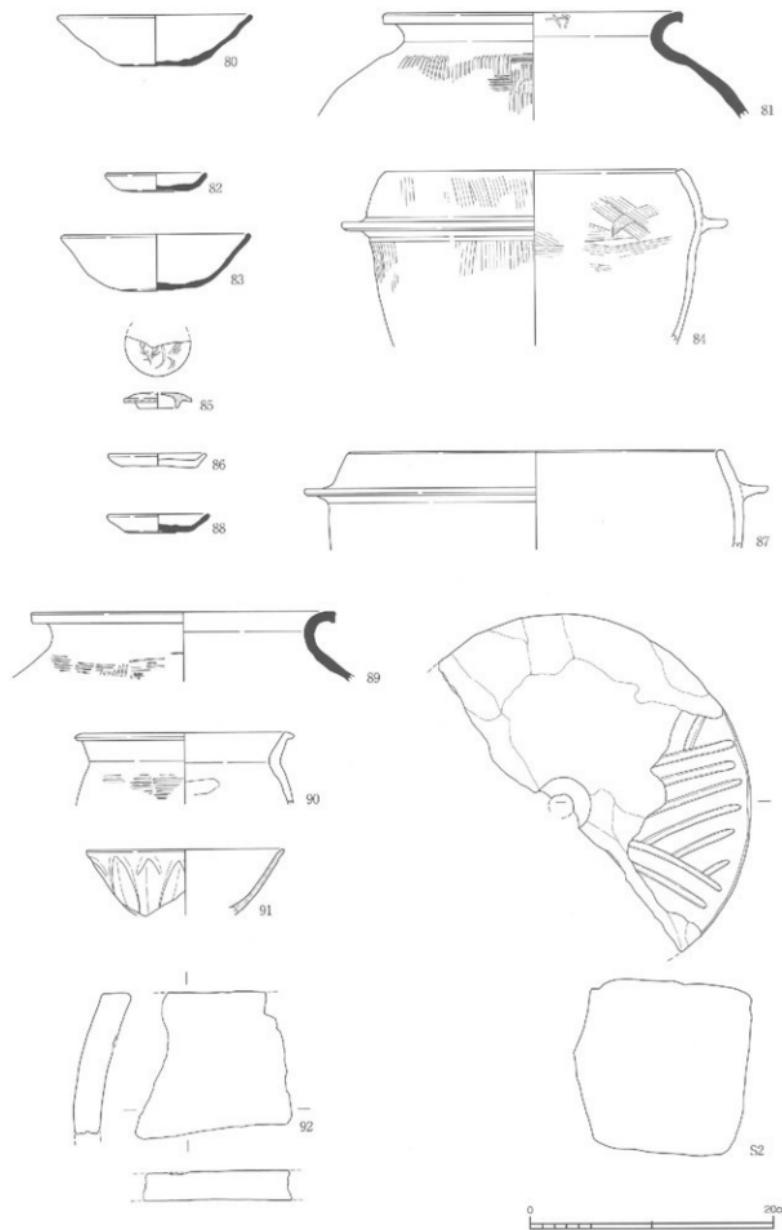
出土遺物 2 土器 2



図版28 遺物

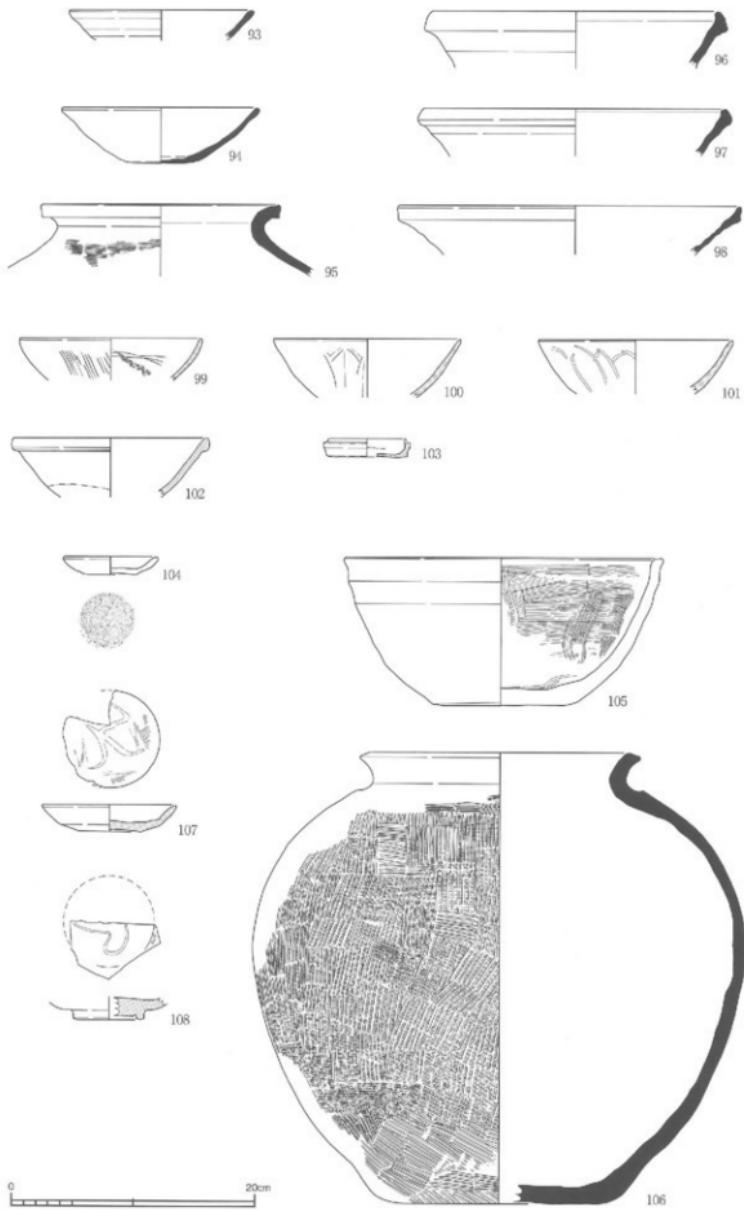


出土遺物 4 土器 4

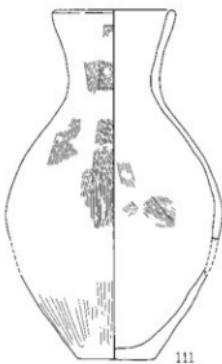
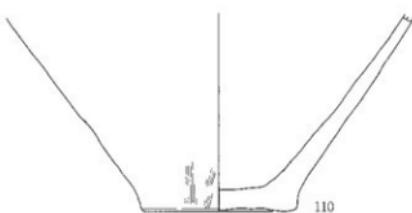
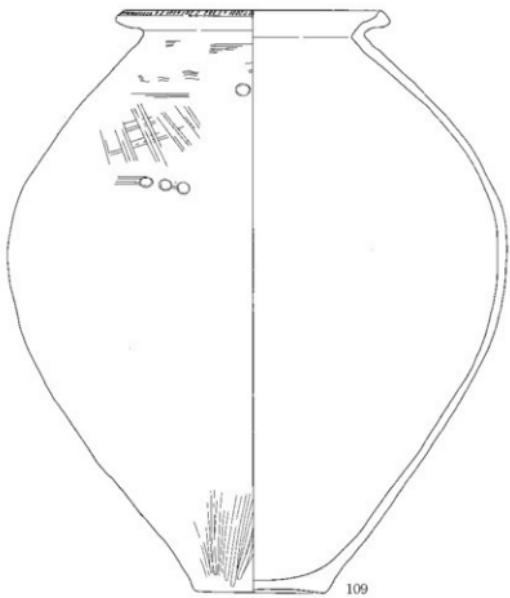


出土遺物 5 土器 5、石製品

図版30 遺物



出土遺物 6 土器 6



出土遺物 7 弥生土器 1

写 真 図 版



調査区付近航空写真（1973年国土地理院撮影）



明石川付近より櫛谷川流域を見る（南西から）



遺跡の遠景（南西から）



調査区遠景(1)（西から）



調査区遠景(2)（北から）



平成11年度調査区全景(1)（垂直写真）



平成11年度調査区全景(2)（西から）



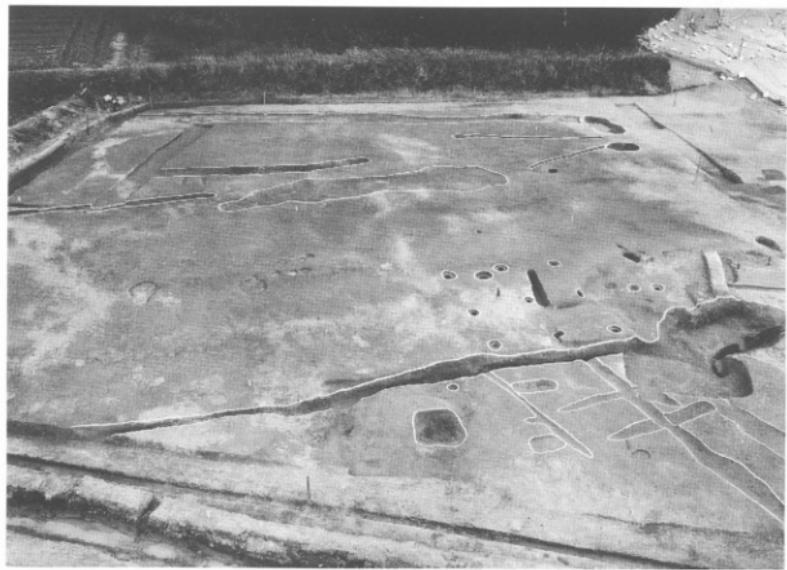
平成13年度調査区(Ⅰ) 全景(1) (垂直写真)



平成13年度調査区(Ⅰ) 全景(2) (北東から)



平成13年度調査区(II) 全景(1) (垂直写真)



平成13年度調査区(II) 全景(2) (北西から)

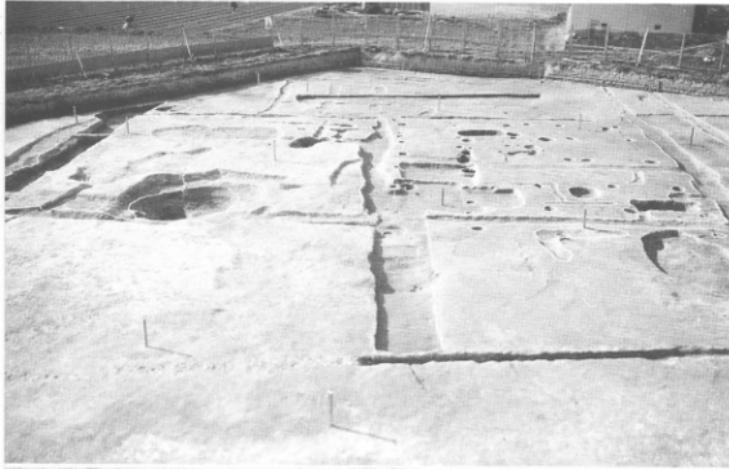


屋敷地1・2(1)
(垂直写真)



屋敷地1・2(2)
(南東から)

写真図版 8 遺構



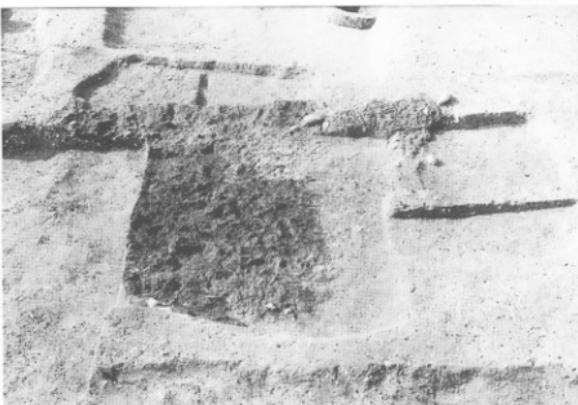
屋敷地 1
(南東から)



SB 01
(南東から)



SB 01 P 21
柱根検出状況
(南から)



SK01
(南東から)



SK01
炭化物検出状況
(南から)

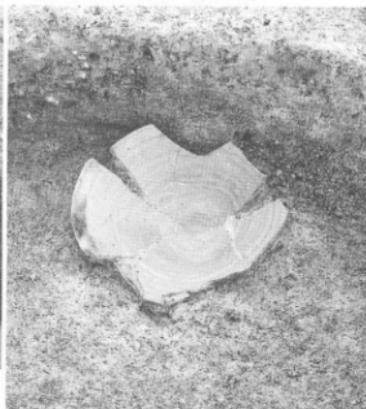
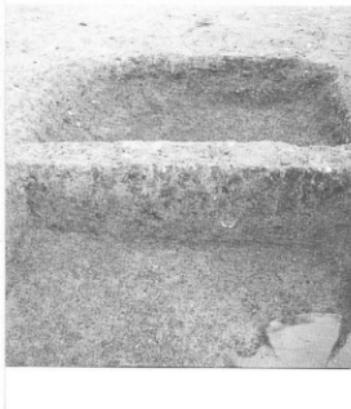


SE01
(南西から)

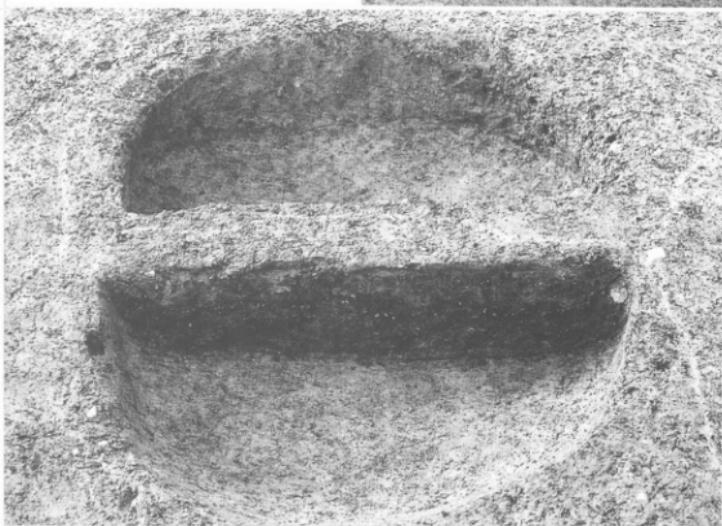
写真図版10 遺構



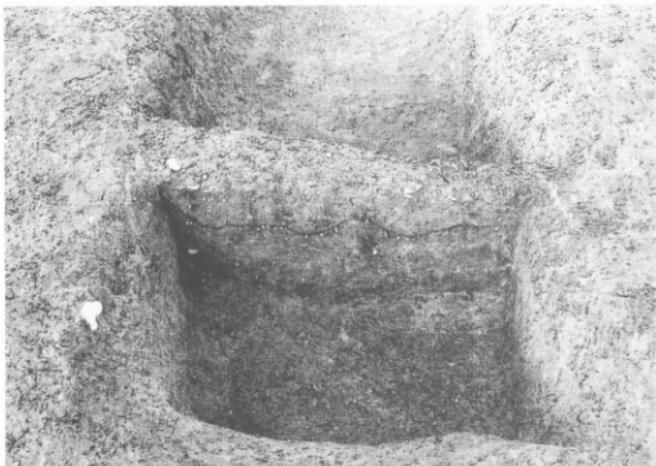
SX01
(北から)



左) SX01断面
(南から)
右) SX01
土器出土状況
(西から)



SK04断面
(東から)



SK05断面
(南から)



SD01(b-b')断面
(西から)

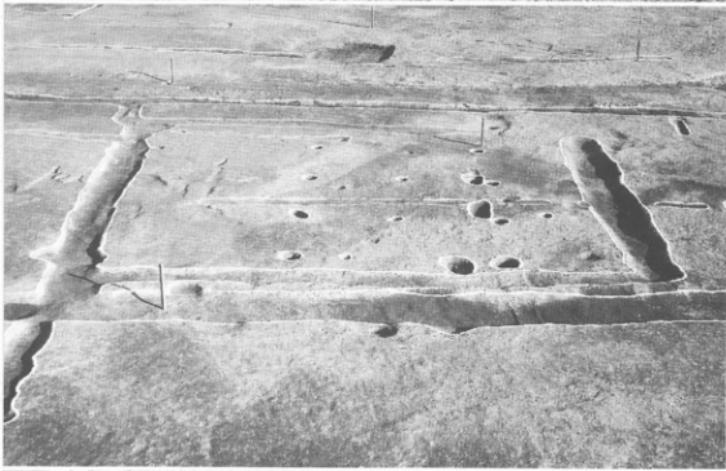


SD01(c-c')断面
(東から)

写真図版12 遺構



SD01
土器出土状況
(西から)



屋敷地2(1)
(北西から)



屋敷地2(2)
(南西から)



屋敷地3(1)
(垂直写真)

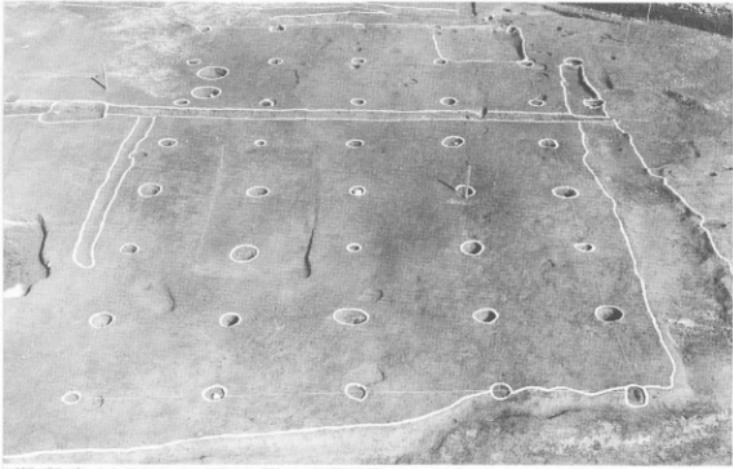


屋敷地3(2)
(南西から)



屋敷地3(3)
(北西から)

写真図版14 遺構

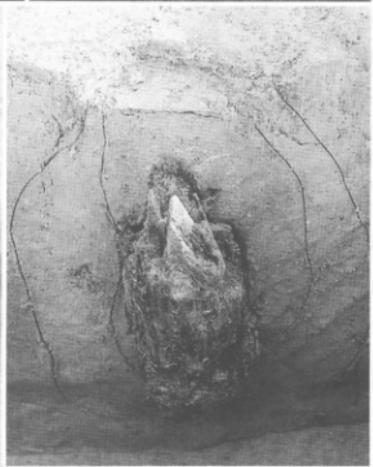


SB 03
(南西から)



左) SB 03 P 22
柱根検出状況
(南から)

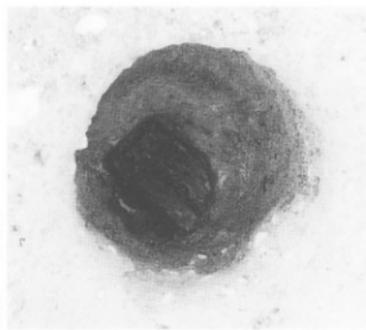
右) SB 03 P 31
柱根検出状況
(南から)



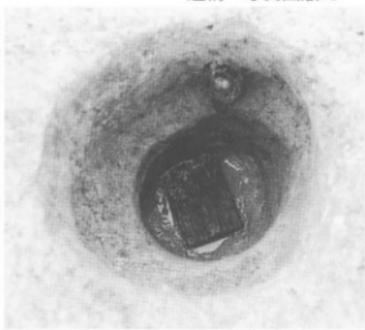
左) SB 03 P 12
柱根検出状況
(南から)

右) SB 03 P 36
柱根検出状況
(北から)

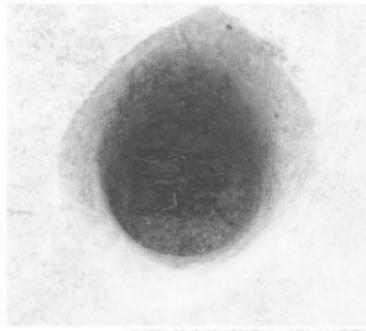
左) SB03 P 8
礎板検出状況
(南から)



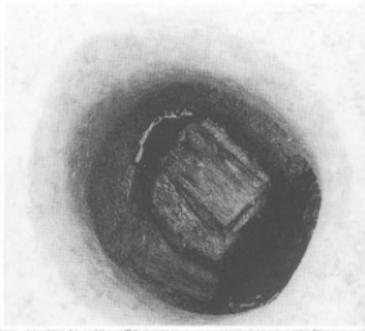
右) SB03 P 28
礎板検出状況
(西から)



左) SB03 P 29
礎板検出状況
(南から)



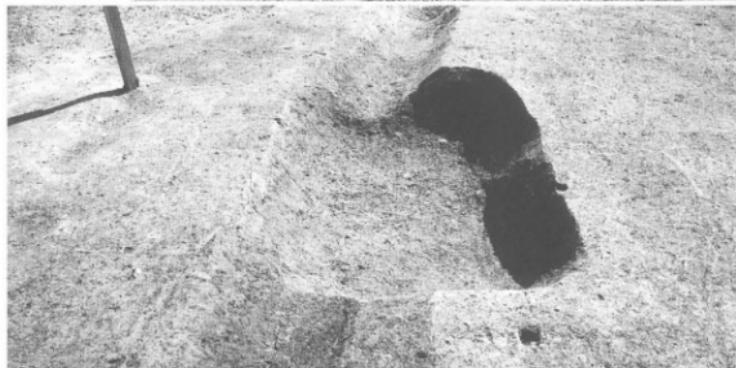
右) SB03 P 37
礎板検出状況
(北から)



SB03 P 36
土器出土状況
(西から)



SX02
(北西から)





SK 10
検出状況
(北西から)

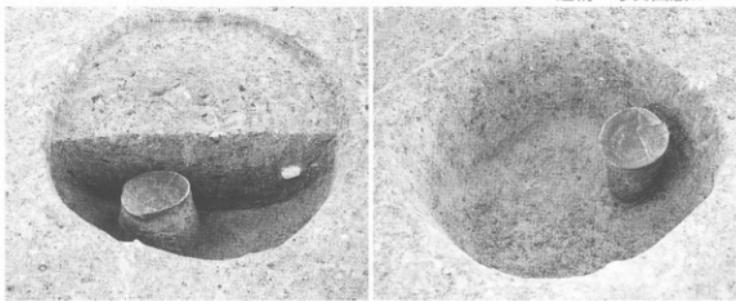


SK 10
東西断面
(南から)

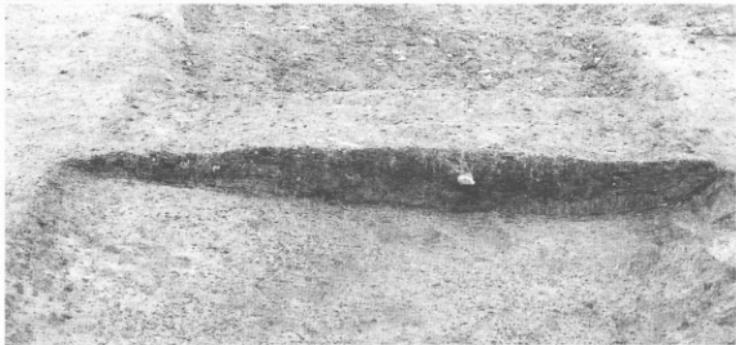


SK 10
完掘状況
(北西から)

左) SK11断面
(南から)
右) SK11
土器出土状況
(北から)



SD37断面
(南から)



SD42・38断面
(西から)



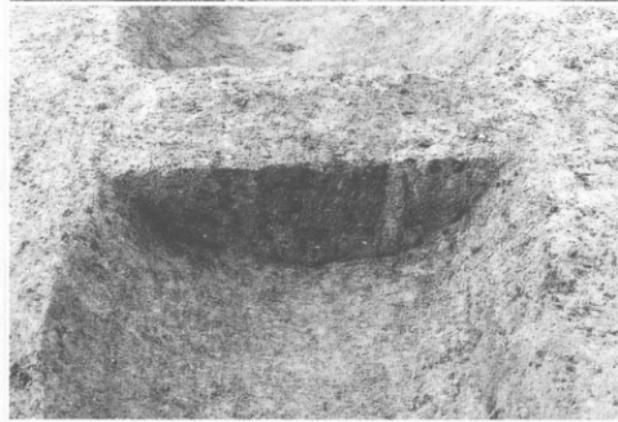
SD42
土器出土状況
(西から)



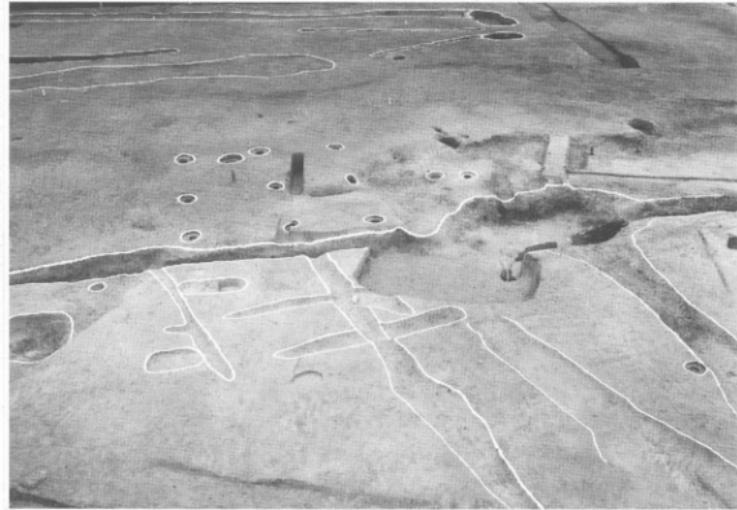
写真図版18 造構



屋敷地4
(北西から)



SD63断面
(北東から)



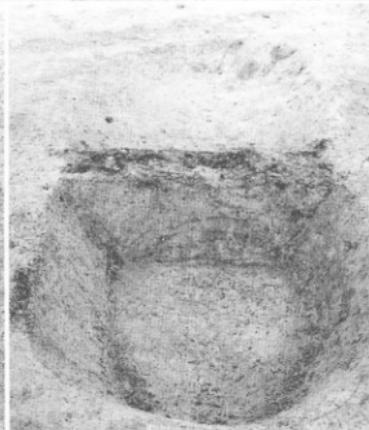
SB10、SK20
(北から)



SK17断面
(南から)



左) SK18断面
(南から)



右) SK19断面
(南から)



SK20
(北東から)



SK 20断面
(北から)



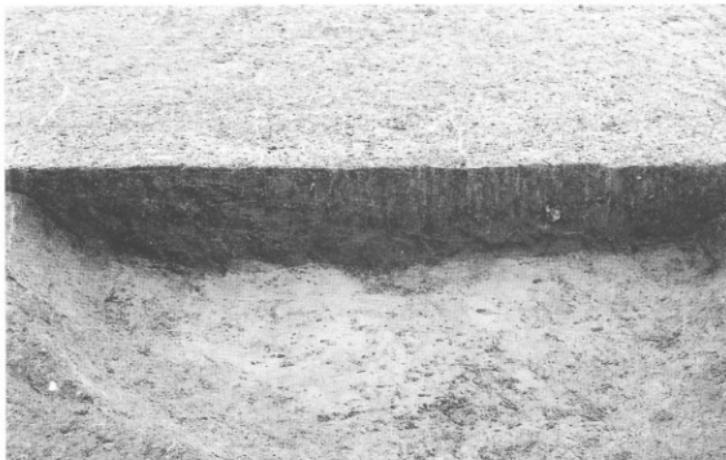
SK 20
木材出土状況(1)
(西から)



左) SK 20
木材出土状況(2)
(北から)



右) SK 20
木材出土状況(3)
(東から)



SK 15断面
(東から)



SK 29・30断面
(南から)



SE 05断面
(南から)

写真図版22 遺構



屋敷地 5 (1)
(垂直写真)



屋敷地 5 (2)
(北から)



屋敷地 5 (3)
(北西から)



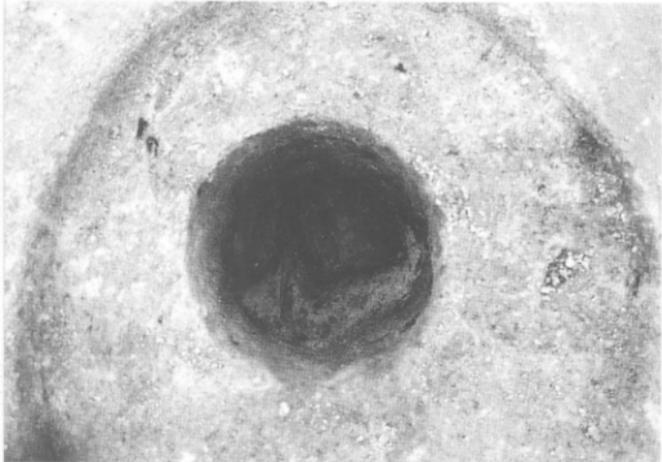
SB05・06
(北西から)



SB07
(北西から)



SB09
(北西から)



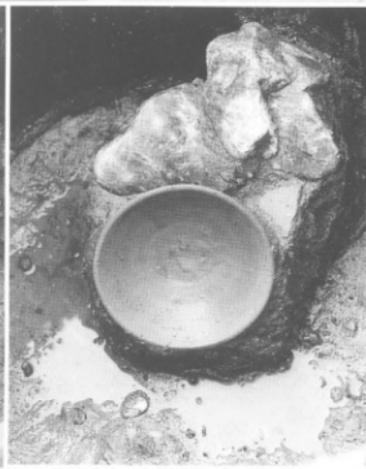




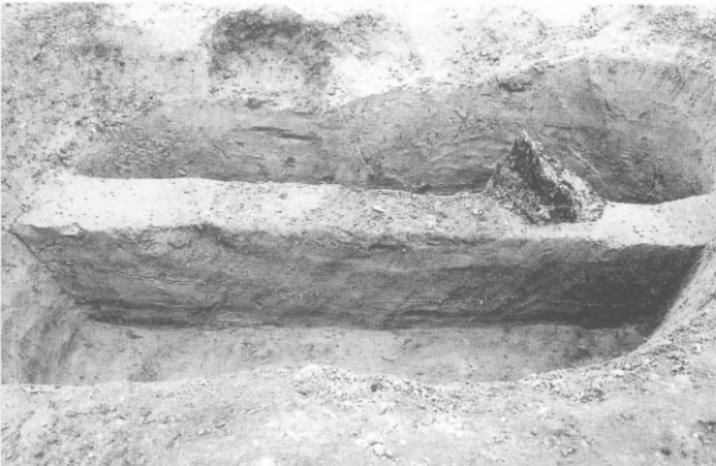
SE 02
掘方断面
(西から)



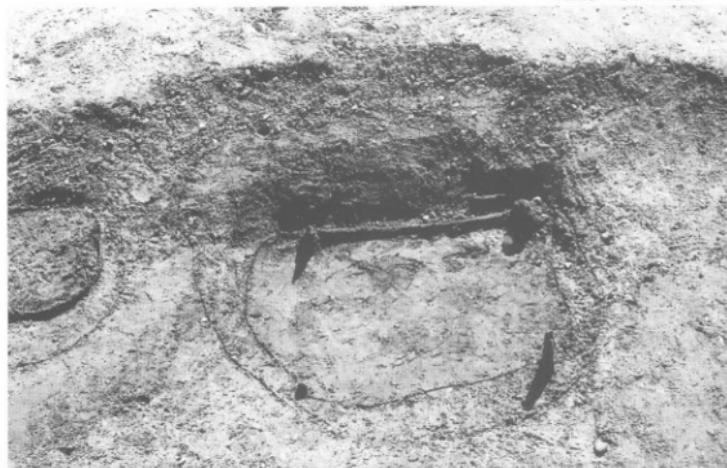
左) SE 02
曲物片出土状況
(西から)



右) SE 02
土器出土状況
(東から)



SE 04断面
(南から)



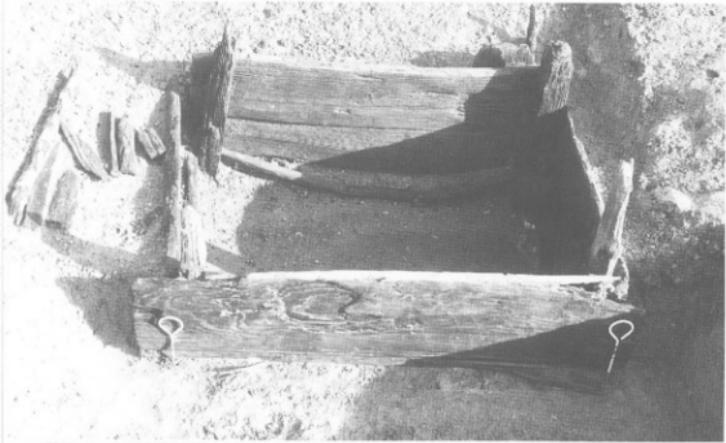
SE 03
検出状況
(北西から)



SE 03断面
(北東から)



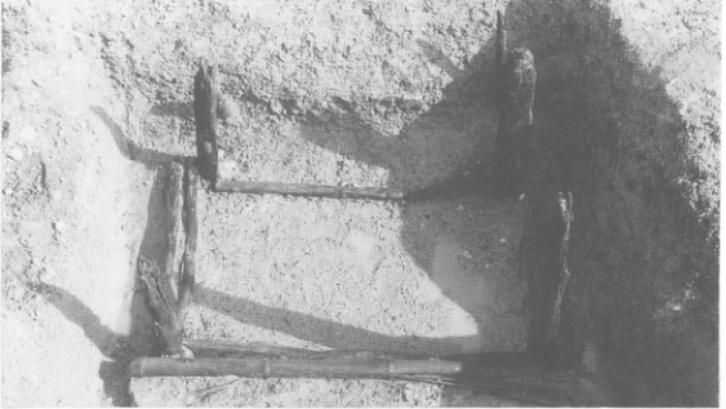
SE 03
(北西から)



SE 03
井戸側板
(北西から)



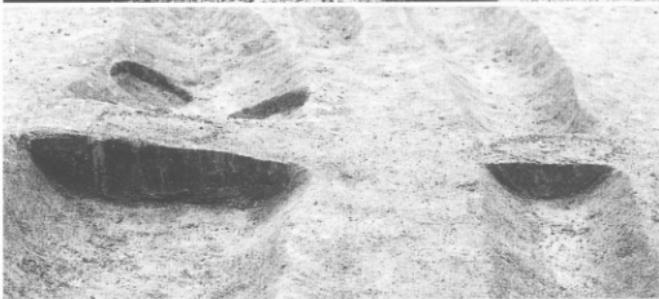
SE 03
井戸側板
左上) 北東面 右上) 南東面
左下) 南西面 右下) 北西面



SE 03
根太検出状況
(北西から)



SD 67断面
(北から)



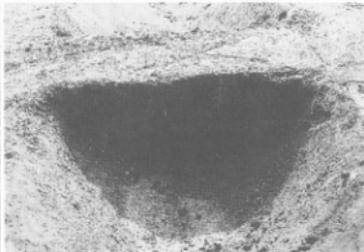
SD 68・69断面
(東から)



SD 71断面
(南から)



左) SD 70断面
(東から)



右) SD 73断面
(南から)



SD 74断面
(南から)



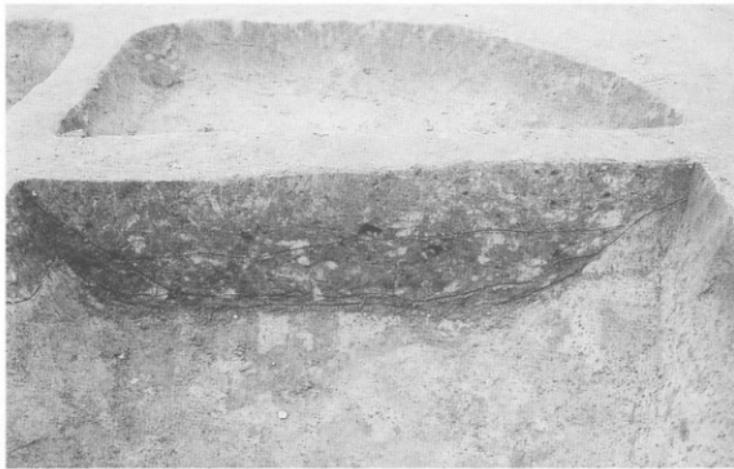
土坑群
(北西から)



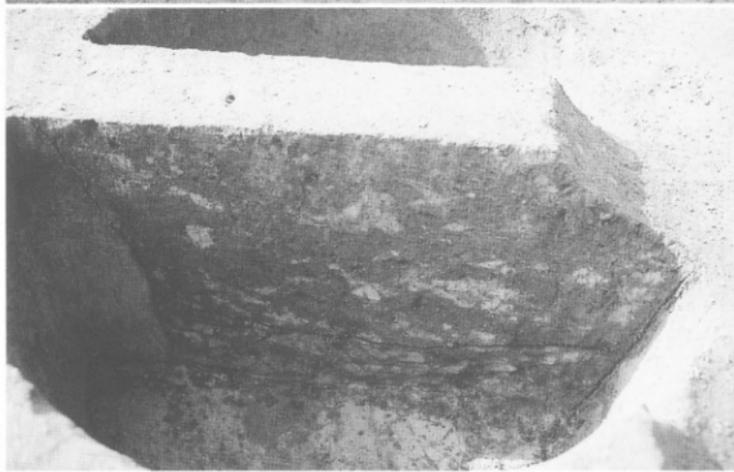
SK21断面
(西から)



SK22断面
(西から)



SK 23断面
(東から)

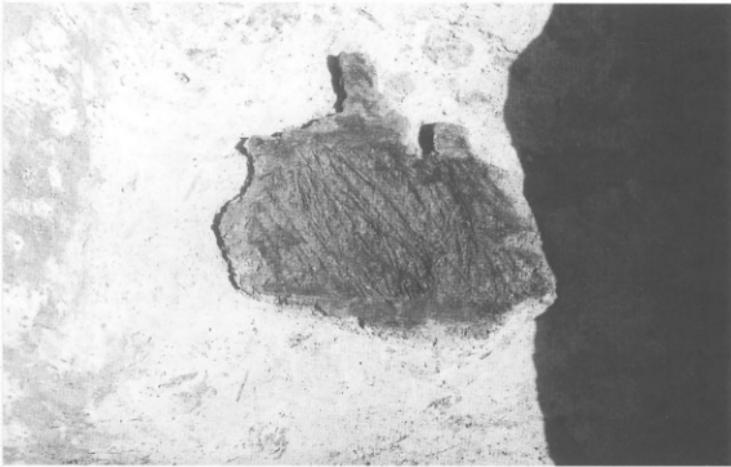


SK 24断面
(東から)



SK 25断面
(南から)

写真図版32 遺構



SK25
木製品出土状況
(南から)



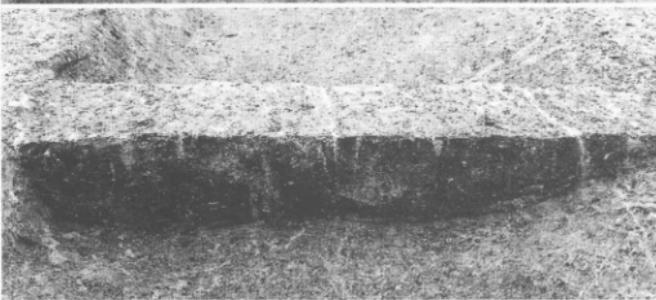
SK27東西断面
(南から)



SK28断面
(西から)



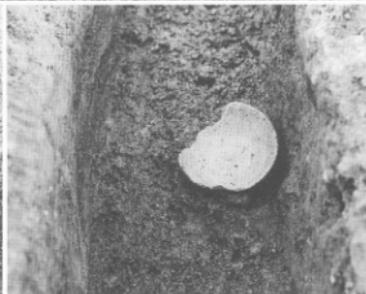
SD 01①断面
(西から)



SD 01③断面
(北から)



左) SD 17断面
(南から)



右) SD 24
土器出土状況
(東から)



SD 27断面
(東から)

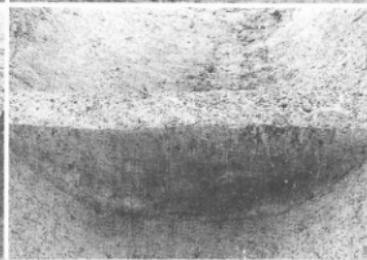
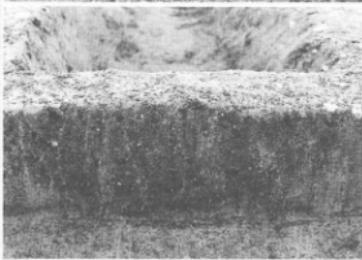
写真図版34 遺構



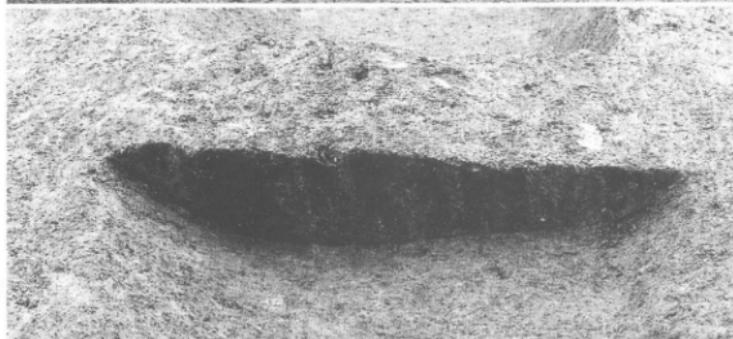
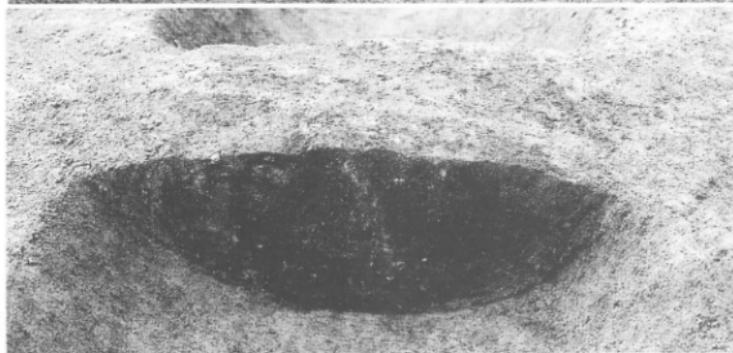
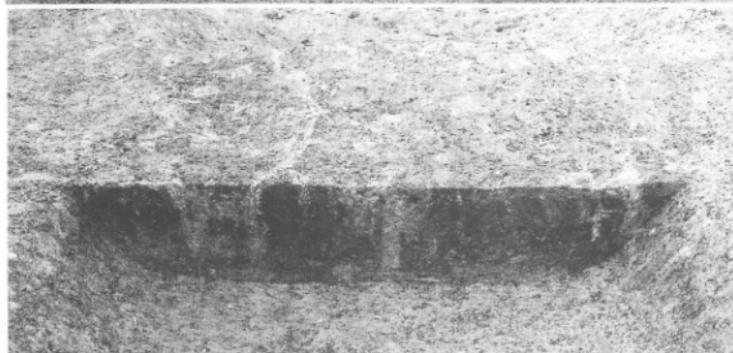
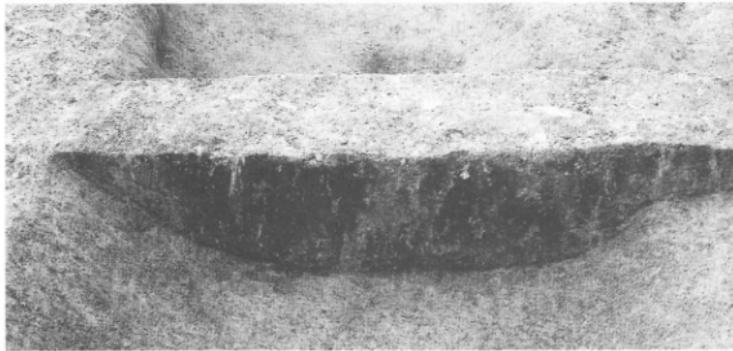
SD 28・35周辺
(南西から)



左) SD 28①断面
(北から)
右) SD 28②断面
(西北から)

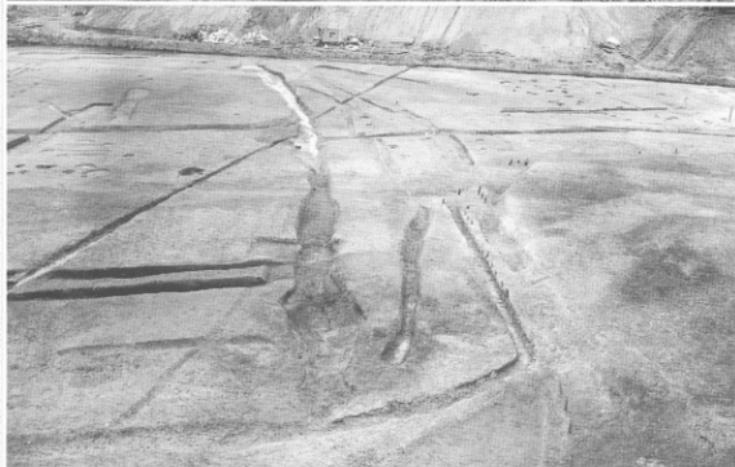


左) SD 28③断面
(北から)
右) SD 34断面
(南から)





SD67断面
(南から)



SD78周辺(1)
(南東から)

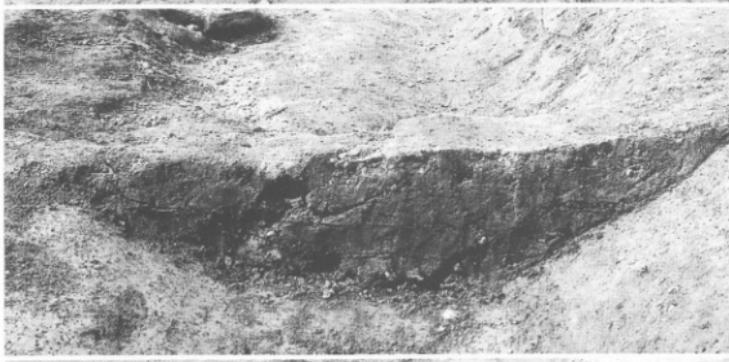


SD78周辺(2)
(北西から)

SD 78①断面
(西から)



SD 78②断面
(東から)



SD 78③断面
(東から)



SD 84・85断面
(西から)





SD 65①断面
(南から)



SD 87①断面
(南から)



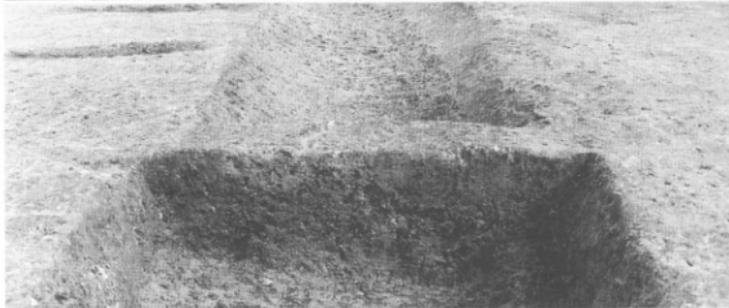
SD 87②断面
(南から)



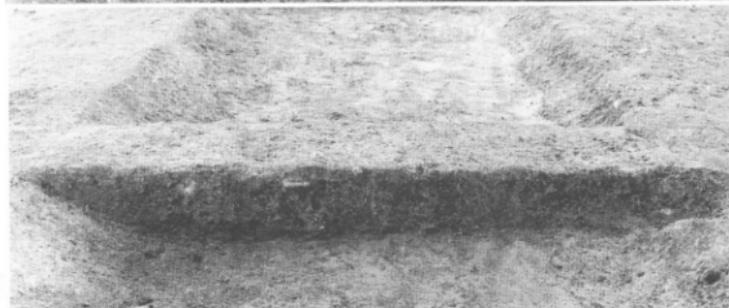
SD 87③断面
(南から)



SD 90断面
(南から)



SD 92断面
(南から)



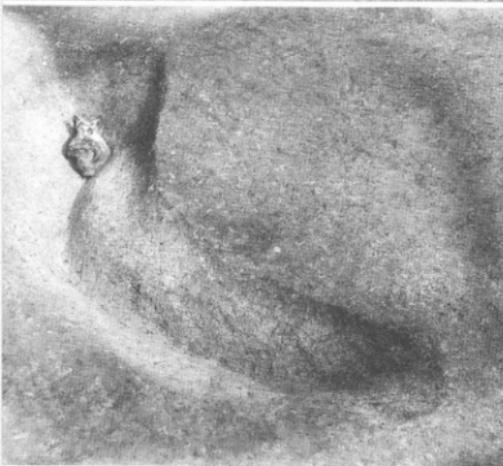
SD 93断面
(南から)



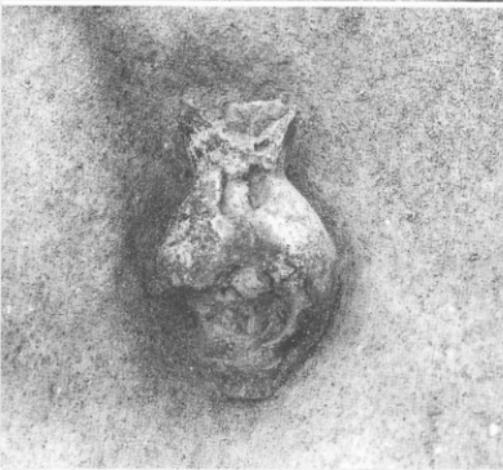
調査風景



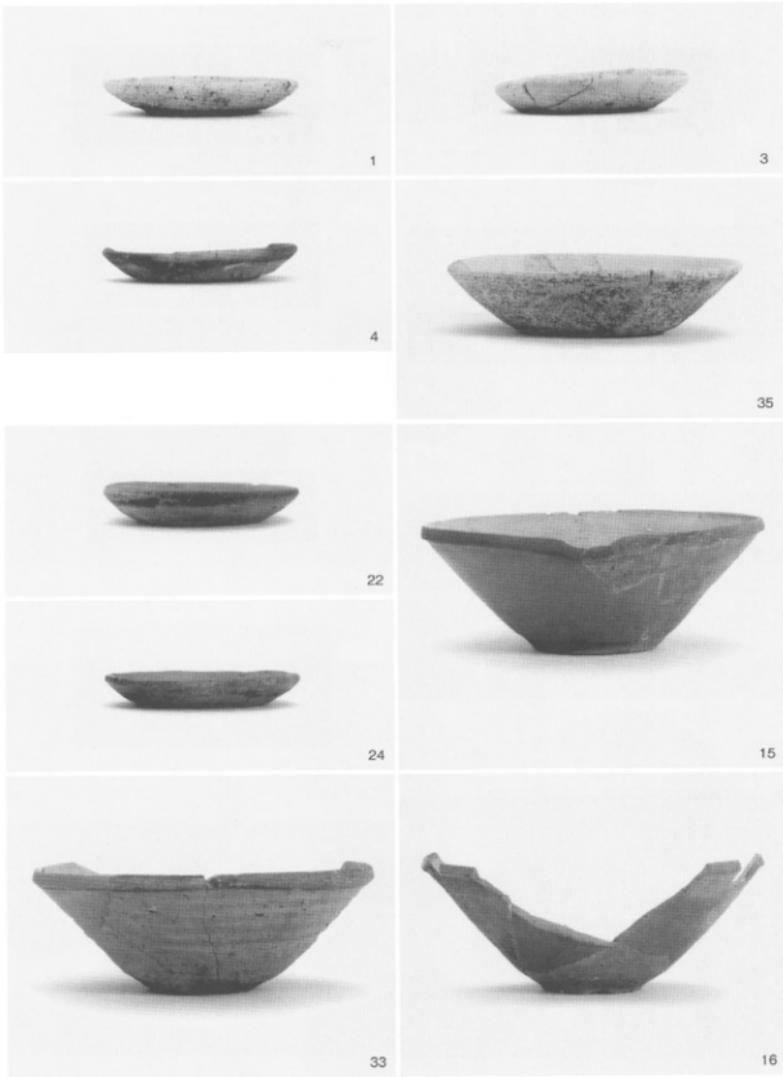
SX 03
(東から)

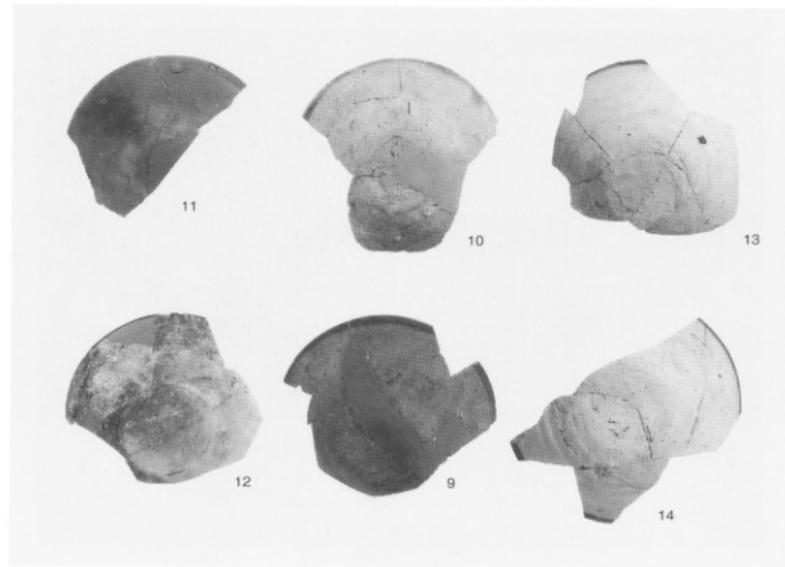
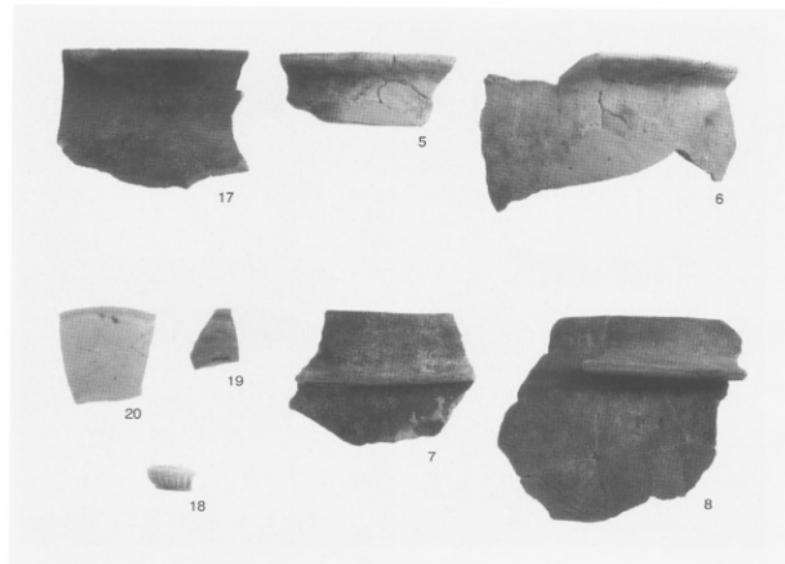


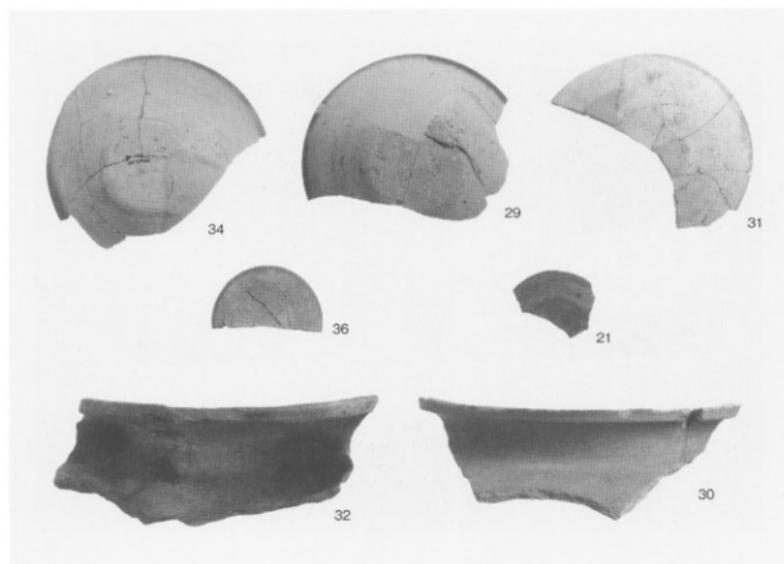
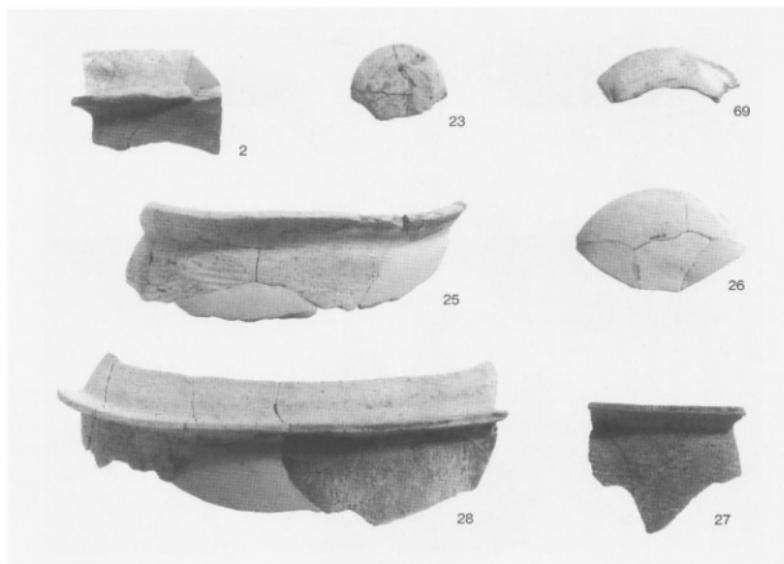
SD 94
(南から)



SD 94
土器出土状況
(南から)







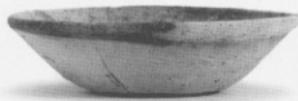
中世土器 3



39



40



45



41



38



44



37



43



46



42



53



54



52



47



55



67



68



49



56



62



64

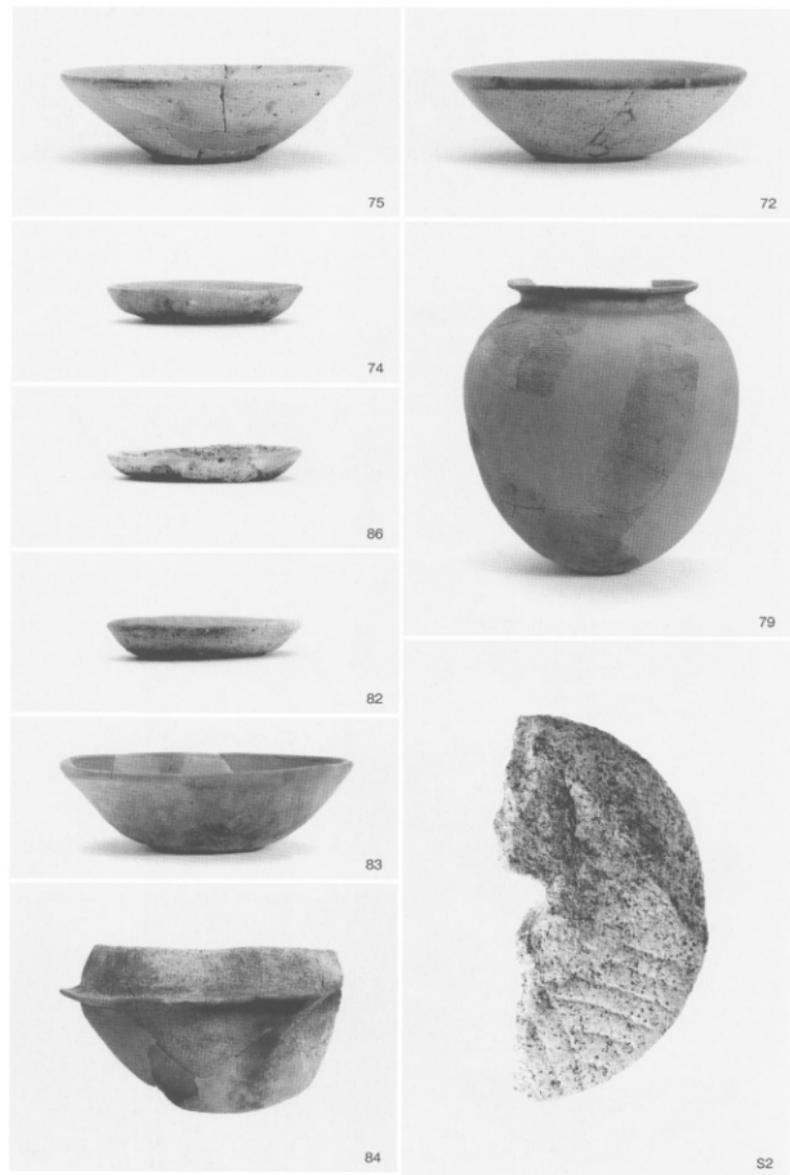


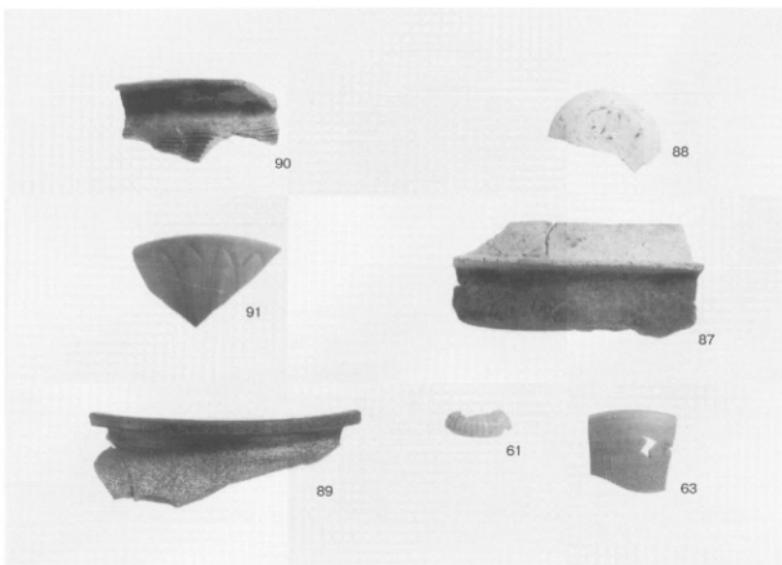
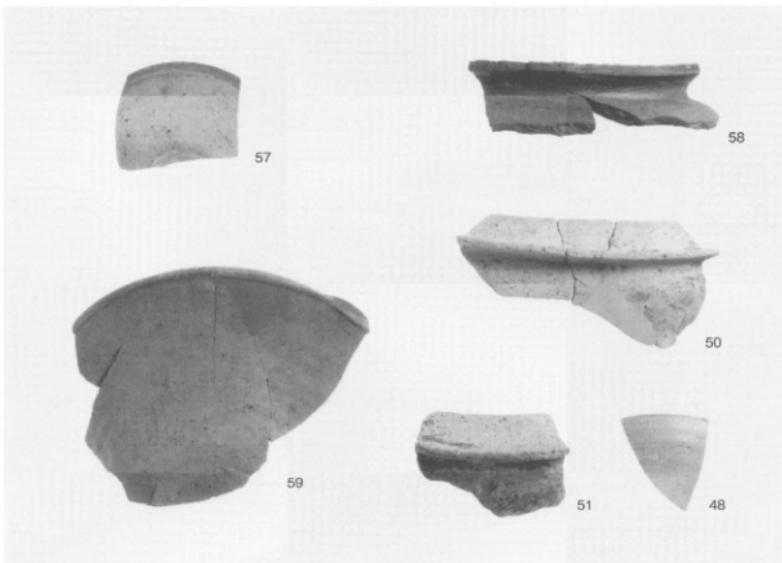
65

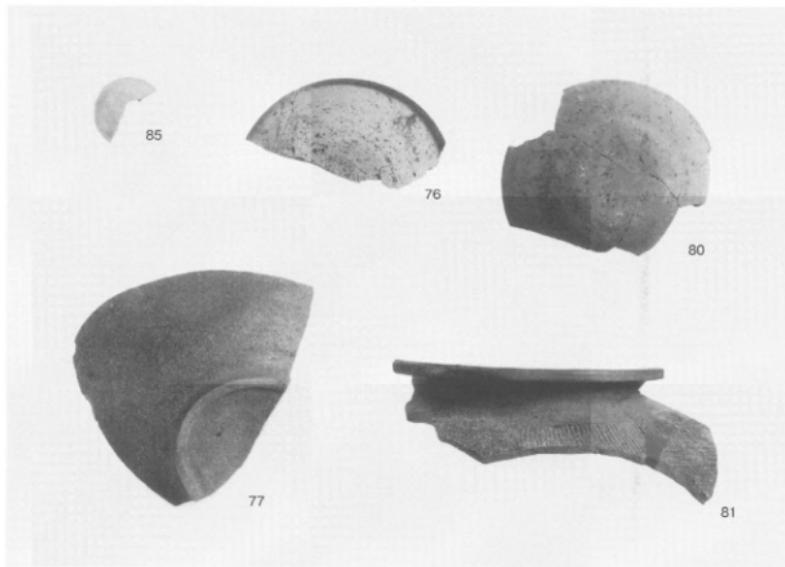
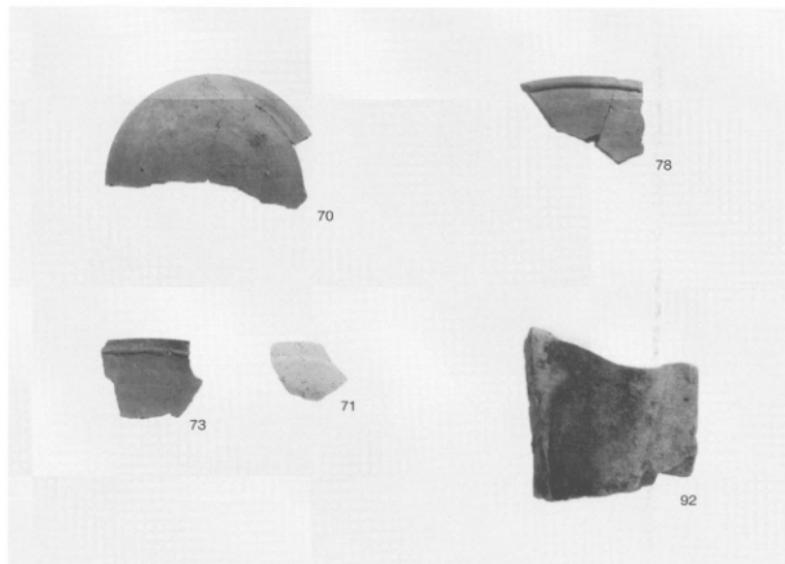


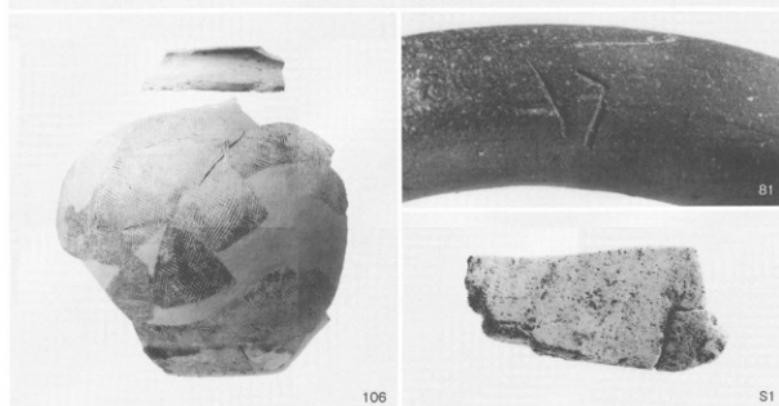
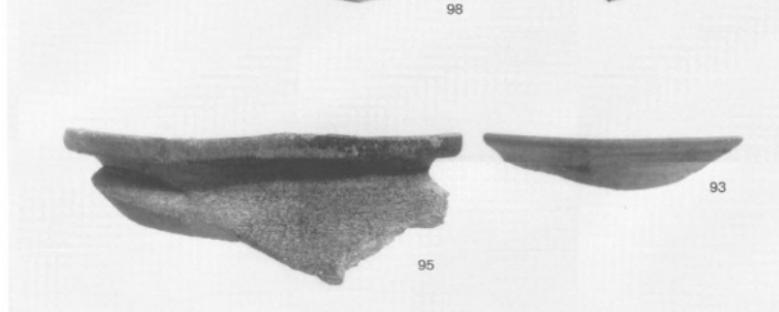
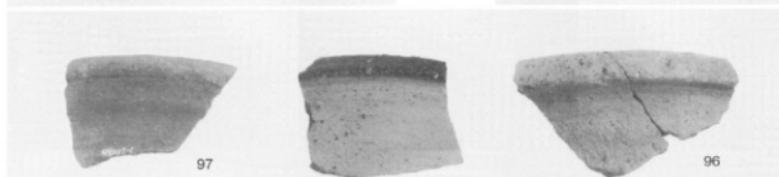
60













109



110



111

神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書V

栎木遺跡

一般国道2号(神戸西バイパス)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年3月13日 発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500

TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL 078-341-7711

印刷 野崎印刷紙業株式会社

〒603-8151 京都市北区小山下郷町54-5
